

---

# ハロウ・ストームの冒険 色烏飛行

渡志路

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハロウ・ストームの冒険 色烏飛行

### 【Nコード】

N2016G

### 【作者名】

渡志路

### 【あらすじ】

何もできない青年詩人ハロウ・ストームが、これまで出合ったことのない人々に出会い、旅する、いくつかの箱をめぐる冒険。

## まえがき

彼が突然ぼくのドアを叩いたのは4年も前の話だ。ぼくはその頃まる一年かけて赤毛の青年の物語を語り終えたばかりだったので、その青白い、深刻そうな顔をした青年のことがさっぱりわからなかった。「あなたはだれ？」とぼくが聞いても、彼は暫くのあいだ応えてもくれなかった。ただ邪魔にもならなかったので、ぼくは彼をそのままぼくのドアの内側にほうっておいた。

そうしていると彼はだんだん自分のことをぽつりぽつりと話し始めた。

彼はまず自分の名前を語り、

彼をとりまく人々について語り、

彼自身の思うことを語った。

そして彼自身の物語について3年もかけて少しずつぼくに話をしてくれた。

ぼくが相変わらずぼくのドアの内側で彼とぼんやりしていると、彼は黙って立ち上がってそつとドアに手をかけた。

「行くのかい」と僕が言うと、彼は見間違いかもしれないと思うくらいかすかに頷いて、きゅつと帽子を目深に被り、こつこつとくつの音を控えめに立てて歩き出した。

ここからは彼のものがたりなのだ。

## 問題です

(1)

その時ハロウ・ストームが思ったのは、はたしてどこから首をそれに入れるかということだった。シャンデリアにうまく縄がかかったところまでは良かったのだが、実際に自分がそこにたどり着く経路というものがどうしても見つからなかったのだ。ハロウの体はそこにすでにぶら下がっている縄がそうであったように、軽くもないし、投げ上げてくれる人もいない。

結構難しいものだな。

かといってナイフで手首やら首やら腹やらを切る気もない。痛そうだし血は嫌いだ。考えるだけで貧血を起こしそうになる。そもそも手元にナイフがない。

さて、それなら

シャンデリアの下、見事な黒々としたグランドピアノ（だが埃は1センチほど積もっている）の上に立ってハロウは考えていた。正面の大きな重い櫛の扉には、先日からのハロウの奇行に何かを感じ取ったナニーが、外からキツチリと鍵をかけてしまっていた。軟禁状態というわけだ。

本当に感心するけど、ナニーはどうしてあんなにカンがいいんだろう。

後はシャンデリアのさらに上にある通気孔がわりの丸い天窓と、かつては貴賓室であったこのただっぴろい部屋を取り囲むはめ込みのステンドグラスだけ。

ステンドグラスには昔話の挿絵のような月や太陽、花や獅子や鳥のモチーフが刻まれている。一番大きい部分には黄色の髪の姫君と姫君に跪き手を取る騎士の姿がある。

さて。

ハロウはもう一度シャンデリア（とそれにぶら下がる首吊り縄）を見上げ、もう一度回りを見渡すと、ぱたぱたと体についた埃を払った。きちりと着込んでいた黒いコートが灰色になりそうなほどだった。グランドピアノを磨いておくべきだったのだ。それでもまだ兄から誕生日にプレゼントしてもらったシルク・ハットは汚れていない。

吐く息が白くなってきた。これは自主的に暖炉の火を消していたことによる。凍えたくはなかった。まだ体が温かいうちに。

ハロウはグランドピアノに添えられていた（そしてかつて彼の母親がそこに座ってピアノを奏でていた）重い黒檀の椅子を振り上げ、振り下ろした。

## （２）

ストライクはその時とても急いでいた。

だが急いでいるといっても油断してはいけない。いつどこから鋭い矢が飛んできてても不思議ではないのだ。この街もそろそろ出なくてはならない。でもその前に一仕事しなければ。まだもうしばらくは大丈夫だろう。

大通りは夕暮れの薄闇の中活気に満ちていた。あと一週間で新年を迎えるとあって、街には新年の飾りや縁起物のクッキー、魔よけのヒイラギの枝なんかを売り歩く人々とそれらに足を止める人々、あるいは足早に歩き去る人々が溢れていた。忙しそうなおトレンチコートの男。まつげの優雅な獣人の占い娘。親とはぐれて泣いている子供。ころころと太って買い物袋を胸に抱えたウサギ顔のおばさん。長く白い耳がスカーフからはみ出ている。

その隙間を縫うようにストライクは歩いていた。遅くもなく早くもなく、誰からも注目されないように。

と、その時前方に一人の男が見えた。こちらに向かって歩いてく

る。

いかにもひよろひよろと歩いている。背が高いので余計にふらふらとして見える。これからパーティにでも行くみたいシルク・ハットを被っている。あとは黒尽くめだ。何か考え事でもしているみたいに目深に帽子を被った上に俯いている。

ストライクはきゅつと紺色のフード付きのマントを引き締めると、その変な男に軽くぶつかった。

「すみません！」

あくまでも自然に謝罪してそのまま直進する。あくまでも歩調を変えない。

男はぶつかられたことさえ気がつかない様子でそのまま歩いて行った。

鈍い！

笑いを押し殺して小さな路地に入ると、ストライクは自分の手に残ったものを取り出した。

結構入っているな。

……結構どころじゃない。

ちよつと信じられないくらい入っている。

紙幣をいちにいさんと数えているとあたりが騒がしくなった。でもストライクには関係ない。100パーセントあの男は自分が俺に財布をすられたことに気がついていない。気がつくにはもう暫くかかるはずだ。だから今ここで起きている騒ぎにはとりあえず自分は関わらなくてもいい。

さて、金だけ頂いてこの財布を早く川かどこかに捨ててしまわないと

と顔を上げようとした瞬間、ストライクは路地から少しばかり広い通りに引き摺り出された。

「こいつだっ！」

掴まれた手首が痛かった。見ると大きな黒い猫の手がツメを出して自分の手首を掴んでいる。その黒い手の主を見ると、やはり黒猫

顔の獣人の青年？で（獣人の年齢は人間からはわかりにくい）、その黒猫はもう片方の手でさっきの黒い服でシルクハットの変な男を捕まえていた。

どうやら見つかったらしい。

おまけにちょうど掴まれたその手に今まさにその黒服男の財布まで持っているのだ。ストライクはいろと諦めてため息をついた。やっぱり俺にはこんな大金縁がないのかあ。

「わかったよ・・・うつせえな。返せばいんだろ？」

とつと次の街に行っておきやあよかったよな。

財布を黒服の男につき返しても、男はなんだかぼんやりしていた。記憶喪失にでもなったみたいに不思議そうに財布を見て、ゆっくりと手を伸ばした。苦労してなさそうな細い綺麗な指だった。ストライクにはなんとなく癢に障った。

「もういいだろ。じゃーな」

黒猫から手を振り切って走る。なんだよ。持ってるやつからもらって何が悪いんだ。あんな・・・のほほんと生きてる金持ちのボンボンから取って何が悪いんだ。・・・悪いことなんかかわかってるよ。でも俺は

かなり滅茶苦茶に走っていた。気がつくとは街のはずれの森の近くまで来ていた。ちょうどいい。このままこの森を抜けて隣の街まで行ってしまうおう。

日はすでに落ちていて、森の中はぞつとするほど暗かった。街の明かりが見えなくなるとあたりは真の闇に包まれ、さすがにストライクは進むのをやめた。焚き火を始めても食べるものも飲むものもない。少しくらい何か揃えられるだろうと思っていたのに、あの黒い服の男と黒猫面の青年のおかげで、本当に体一つで逃げる羽目になってしまった。

死にはしないけどさ・・・

森の中は静か過ぎる。冬だからなのかふくろつさえも鳴かない。

雪の中にいるふくろうの絵を昔見たような気がするのに、冬はほんとうはふくろうはどこかに行ってしまうているのだろうか。マントを体にしっかりと巻きつけても、寒気はじわじわと染み込んで来る。寒さにあまり気をとられないように、ストライクは耳を澄ますことに集中した。

枝が風に煽られざわざわと揺れている。風の冷たさを思うとその風に吹かれているわけでもないのに体がすくんだ。パキ、ポキと軽い音が混ざる。風で枝が折れているのだろうか。まだ木にしがみ付いていた葉が落ちる音だろうか。

ちがう。何かが近づいてきている

ストライクはそれに気がついた瞬間に飛び起きて焚き火を踏み消した。あたりは真っ暗の闇に戻る。

まだそんなに近くには来ていないはずだ……でもストライクは油断するわけにはいかなかった。この暗闇の中でもあるいは細い矢が過たず飛んでくるかもしれないのだ。そうであつても不思議ではないのだ。

音のしたほうとは逆の方向に手探りで数メートル移動し、もう一度耳を澄ました。人の話声がする。「ここら辺だな」

どこかで聞いたことのある声だと思った。  
タン　と何かが地を蹴る音がした。

と同時にドカンと自分の頭の上に何か大きなものが落ち、木全体がわっさわっさと揺れた。

「うわっ！」

ストライクが思わず腕で頭を庇うと、その腕にまたツメが食い込んできた。

痛い。

「よ。さっきのスリ師。焚き火消しちゃったりして無駄だから。

俺夜目が利く生き物。わかる？」



暗闇の中に緑色の大きな目がきらりきらりと光って見えた。

(3)

3人はとても狭くて薄暗くてじめじめしていてやかましい酒場に腰を下ろした。もう少しマシな場所もありそうだったが、黒服の男が「人気のないところ」と言っただので黒猫がここにしたのだ。ほとんど獣人専用の店らしく、人間はストライクと黒服の男しかない。「人気がない」というわけだ。かわいらしいポメラニアン顔のウエイトレスが注文を取りにやってきた。

「マタビビール3つ」黒猫は当然のように言った。

「で？」

ストライクが不機嫌に口を開くと、なんと驚いたことに黒猫まで「それで？」と男を見上げた。もう何がなんだかわからない。

「それで」

黒服の男はシルク・ハットを取ってそつとひざの上に置いた。コート掛けなんていう気の利いたものはない。

「さつきあなたは僕の財布を取ったわけですよ。すごく上手に。僕はぜんぜん気がつかなかった。」

(黒猫が「俺が気づいてやったんだぜ！」と猫背を伸ばした)

「そうだよ。でもその後ちゃんと財布も返したし、あんたも文句付けなかったじゃないか」

今さら文句を言うために俺をまた捕まえたのかよ、と、ストライクは最高にイライラしてきた。自分は法律に守られている、財産に守られていると思っている世間知らずは大嫌いだ。身包みはがされて放り出されてしまえよと思う。はがしそこなつたわけだが。

「財布の中身は少ないですか？」

「は？」

しかもイヤミか？とんでもございません、たいそうな大金でござ

いましたとも言えはいいのだろうか。これだからご教養のおありになる金持ちのボンボンなんてものは性根が腐りになっていらっしやるのだ。

露骨に嫌な顔をしたのがこの人の目を見ない（先ほどから彼は、目の前の木製のテーブルにある木星のクレーターみたいな木のこぶの模様を熱心に見詰めているように見える）黒服の男にもわかったようで、うつむいて、そのしょうがみたいな、薄い黄色の髪の色しかわからなかった顔を、少しだけ上げてストライクを見た。

「実は・・・あなたのような人でないとお願ひできないことがあつて。せつかくお知り合いになれたので・・・お話できればと思ひまして・・・」

貧血でぶっ倒れそうな顔をしていた。好意的に見るなら、とても切羽詰った顔をしていた。

「こちらの黒猫さんに頼んであなたを追いかけてもらつたんです」

黒猫はフンと鼻を鳴らす。

「無論俺だつてタダじゃねーよ。そもそもがスリ師をとつ捕まえてやって、財布の中身を何割 かもらうつもりだったんだよ。そしてそれにーちゃんが『もういちど彼を捕まえてくれな いと払いません』とか言い出すからよ」

「そうでしたね。あなたにもお支払いしないといけない」

「そーそー。早くね」

マタタビビールが運ばれてきた。試しに一口飲んでみると意外と口当たりがいい。黒猫はくびくびとうまそうに半分ほど飲んだ。どうやら財布を掏ったことに関して何かあるのではないらしい。意外なことだが。むしろその技能を認めて何か頼もうとしているのだ。いったいどれだけ甘ちゃんなんだこのボンボンは。

しかしストライクはこの街にもういるわけにはいかなかったし、手ぶらで街を出る気もなくなっていた。

もうへまはしない。

「とりあえずその『お願ひ』の中身を聞いてみねえと。」

黒服の男はまるで熱いカップでも持つみたいに、ビールジョッキを両手で包むようにして話し始めた。

「ある家にあるあるはこを盗み出して欲しいのです。」  
「はこ?」

「そうです。パンドラ・ボックスというのをご存知でしょうか。最近若い女性の間で流行っている一種の伝言ボックスです」

「ああ、あの恋人同士の合言葉がないと箱が開かなくて、入ってる伝言もきけないってヤツか」

黒猫青年がなぜか一緒に聞いている。

「そう。それを一つ盗んで欲しいのです」

「ふー……ん……まあ、あのね、相手にもよるし、場所にもよる。もちろんモノにもよる。あんたが出す金額にもよる。わかるよな?」

黒服の男はかすかに頷いた。頷いたんだかなんだかわからないくらいかすかだった。

「その箱はからくり師のリシュリユー・エウリディクの家にあるはずなんです。隣町に家と工房があり、恐らく家のどこかにあると思います。モノはまあパンドラ・ボックスですから……15センチほどの立方体でしょうか」

男は泡の消えかけたビールから手を離して空中に四角い形を描いた。

「お出しできるのはその財布全部です。もちろん黒猫さんにお渡しする分を引いてですが。あいにくそれ以上は持ち合わせがないので」

「ぜんぶ?」

男はまたほんのちよつとだけ頷いた。

無表情すぎて冗談なのかどうかもわからない顔をしていた。  
この男は目が灰色だなあ、とストライクはその時気がついた。

(4)

3人は夜の森をひたひたと歩いていった。黒猫が小さなランプを片手に持って先導する。なんだか知らないけどこの猫は付いてくることに決めたらしい。黒服の男は左手に小さめのトランクを持って、まるで喪中みたいに俯いて黙々と従っている。トランクは凝ったつくりでゼンマイや歯車が見え、どこから開けるものなのかよくわからない。

ストライクはさらにその後ろからついて歩いていた。

見ず知らずの俺みたいなのやつに(自分に危害を加えたスリ師に)いきなり大金をかけて頼みごとをするなんて、よほど困っているのか、あるいはただの道楽なのか、本物のバカなのか

「それにしても、あんた困らないのか？有り金全部って、その後はどうするんだ？他にアテがあるとか？」

ストライクはかまをかけるつもりで声を掛けてみた。

だってもしトランクの中身も金目のものだったら、それはそれで考えなければならぬ。

「無いですね。何も。一つあるけれど、それはパンドラ・ボックスが手に入ったらのことです」

「でも、金がないと生きていけないんだぜ。本当は何かあるんだろ？」

こいつはもつと叩けるに違いないと踏んでストライクがたたみかけると、男は実にあっさり

「お金がないと生きていけないかもしれませんが、僕はそれでいいんです」

と言った。

ストライクにはそれがどういう意味なのかわからなくて、とりあえず話題を変えることにした。このことについてはまた後で聞き出すことにしよう。

「盗んで欲しいって言う箱とやらは、何かとくべつなものなのかい？例えば・・・すごい宝石が埋め込んであるとか？金でできてるとか？」

「とてもとくべつなものです。ただ、金目のものではないんじゃないでしょうか」

「ないんじゃないでしょうかってなんだ。」

「・・・あんた現物を知ってるんじゃないのか？」

「僕も自分で買ったことがないのでどれくらいするものなのかわかりませんが露天やおもちゃ屋さんなんかで買えるものだと思うので・・・」

「ま、小遣いで買えるくらいだよ。14、5歳の女の子が好き好んで買うようなものだ。普通のパンドラ・ボックスならね」

黒猫が口をはさんだ。

「はつきり言ってしまうえば子供のおもちゃってこつた。友達同士の間でひみつの伝言を伝えたり小物を入れてやつたりするためのな。鍵つきのおもちゃ箱ってどこか」

「つまり、ただのおもちゃを一個盗んでほしいってことかよ？」

ストライクの声が暗い森に風船が割れた音みたいにはつきり響いた。

近くにいた鳥がざあつと飛び立った。黒猫の青年がきゅつと耳を伏せた。

「そういうことですね」

男はストライクの方を見ようとしないうで言った。

本気なのかよ？なんだっていうんだ？

「でもよ黒服の兄さん、あんたその『子供のおもちゃ』に大金を払おうとしてるんだろ？それに俺が言えたことじゃないけど泥棒って

言うのは、警官に下手すると捕まっちゃうくらいのことなんだ。何かあるんだろう？」

たとえばその箱に入っている「ひみつの伝言」とやらがすごいものだとか。でかいダイヤモンドが入ってるとか。宝の地図が入ってたって構わない。

「なあ？」

黒服の男は応えなかった。

(5)

「どうする？」

黒猫がひたひたと歩きながら緑色の目をこちらに向けた。

夜はとつぷりと更けてもう真夜中のはずだ。

「ちょっと休もう」

音を上げたのはストライクだった。寒かったのだ。

ストライクが乾いた木を集めて火をつけるのを、猫と黒服の男はただ眺めていた。黒猫は自前の毛皮を着ているし暗くても困らないからだろうが、黒服のほうはたぶん不慣れで何をしたらいいのかわからないのだろう。

火が安定してちろちろと燃え出すと、3人はそつと周りを囲んだ。ストライクも少しからだが暖まってきてほつと息をついた。

変な眺めだ。

改めてそう思った。

どうして俺はこんなところでこんなことをしているのだろう。

ほんとうは、その男の「お願い」とやらを聞いてやった振りをし、どこかで財布を掏り取って逃げるつもりだった。ところがその「お願い」とやらの報酬がその財布だという。

どうしようか？

まだ何かありそうなんだ。でもここまでで逃げておけよ、と、スリ師のカンミたいなものがつぶやいている。こいつに関わるとろくなことにならないぞ。

どういうわけか猫までついてるんだ。財布をすらせてもくれな  
いだろうし、殴り倒してかっぱらうみたいないな強盗みたいないな真似は嫌  
だ。もうさっさとこの変なパーティを抜けてどっかの街に潜りこん  
だほうがいい。

とはいっても、目の前にだいぶ入った財布がぶらぶらしている。  
「お願い」を聞いてやれば平和に金が入る　かもしれない  
うまく盗めれば。

こいつに関わるとろくなことにならないぞ。

なぜか嫌な予感がする。

ストライクは黒服の男の方を見た。

黒服の男はトランクに手を伸ばすと、あちこちのボタンを押し、  
ツマミをひねり、ゼンマイを回してこんこんと側面を叩く。

次の瞬間トランクはまるでアコーディオンみたいにばらばらと上  
下に開いた。開いたすきまからチョコレートや飴玉が転がり落ちて  
散らばる。

ハトでも出てくるんじゃないか？

男が首をかしげながらさらにネジをくるくると回すと、トランク  
のしきりのようなものがぱたと回転して折りたたみの傘が出て  
きた。

「どこに行ってしまったのかな」

さらに別のところについていたネジを回すと今度は長靴がぼとり

と落ちた。あんな薄っぺらいトランクによく入っていたなと感心している、おたまだの小瓶だのと一緒に毛布があふれ出た。

「あ、やっぱり入ってました」

男はその毛布をストライクに手渡した。

「え？」

「寒そうですから」

ストライクは返す言葉もなくそれを肩にかけた。それを見ていた黒猫が言う

「あんた手品師？」

「ぜんぜん。これはこのトランクの仕掛けなんです。あるからくり師の人がこういう手品を見て、仕掛けを考えて、試作品を僕にくれたんです。まだ使い慣れなくて・・・」

黒服の男は毛布が出てきたときに一緒に地面に落ちた干しぶどうの袋を拾い上げて

「食べます？」

と言ったので、3人で火を囲んで干しぶどうを黙々と食べた。

ますます光景がおかしい

ストライクはなんだかもうどうでもよくなってきた。

(6)

ひとの気配にストライクがはっと目を覚ますと、黒猫が小さくなってしまった火に枝を入れているところだった。

なんだかとてもよく眠った気がする。

黒猫の後ろに、木に寄りかかったままやすやと眠っている黒服



の男が見えた。帽子がちょっと右にずれている。右手は冷たい地面に投げ出され、左手は軽く握られて腹の上に置いてある。

「今こいつを殺して全部持って行ってもわからないよな」

黒猫が低い声でつぶやいた。

「だろ？よく寝てる。誰もいない森の中だ。財布にはたっぷり入ってる。難しいことなんて何も無い。だろ？あんた考えただろ？」

さっきまで見てたいい夢の気配が一気に全部ふっ飛んだ。

「考えたのはお前だろ。一緒にするなよ」

そこまでは考えてない。

「お前スリ師だろ。追いはぎまでもう一歩じゃねえか」

猫の緑の目がガラス玉みたいにきらきら光る。本物のガラス玉みたいだ。

「違うよ。俺は人殺しはしねえ」

「どうだかなあ。ニンゲンってのはうそつきなんだよ。」

しねえつつつてやるんだよ。

条件さえ整ってりゃあいいことより悪いことやんのがニンゲンなんだよ。

特にあんたみたいに何かわりいことをやって生きてる人間なんてゆるいんだ。わかるか？ゆるいんだよ。」

「うるせえ。しねえつつつてんだろ」

なんでこんなクソ猫にからまれなきゃいけないんだよ。

しかも黒服の男を起こさないようにヒソヒソと喧嘩とかあほらしくて泣きそうだ。

「俺はね、あんたとビール飲んだ時から、あんたはこいつの話をマジメに聞く気なんかねえなと思ったよ。金だけもらえりゃいいぜって顔してたもんな。俺はこのままこの兄ちゃんと一緒に行くぜ。お前この兄ちゃんのことは殺せても、猫殺せねえだろ。本気で俺ら猫系獣人が戦うなり逃げるなりしたら、人間が敵うもんじゃないなん

てわかってんだろ？」

「殺したりしねえって言ってるじゃねえか」

ぱちぱち、と木がはぜた。

黒服の男は自分のことが話し合われているなんて全く関係なしに、ほんとうに安らかに眠っていた。

「わかったらもう行けよ」

「は？」

「箱取って来る気ないんだろ。だつたらもうここにアメはないぜ。どっか行けよ」

「取ってくる気ねえなんて言ってねえだろ」

「スリ師にコソ泥の真似ができるわけねえだろが。どっか行けよ」

「できるよ」

「できねえよ」

「できるよ」

「コいてねえでどっか行けよ」

「うっせーよクソ猫が。わかったよ。そんなに言っんなら取って来てやるよ。絶対に。」

言っちゃまったな、とストライクは思った。俺はどうして頭に血が上りやすいんだろう。

やれやれだ。

それにしても猫に追い払われそうになるなんてね。

(7)

ハロウ・ストームが目を覚ました時、まだ辺りは真っ暗だった。

黒猫とフードのついたマントの男がとても険悪に睨み合っていたので、声を掛けられずにいると、黒猫がぱつと振り向いて

「もうすぐ街にはつくはずだ」

と言った。

おもむろにフードの男が立ち上がって毛布を投げて寄りかかったので、畳んでかばんに元通りにしまっていたら、その間に黒猫とフードの男は焚き火を消して歩き出してしまった。

なんだか機嫌がよくないみたいだ。

「僕はどれくらい眠ってしまったんでしょう？」

小さな声でそつと聞いてみると

「ちよつとだよ。30分も寝てたかな」

と黒猫が前を向いたまま応えた。

首が痛くなつて指先がとても冷えていた。外で寝るとこんなことになるのかと、ぼんやりと考えた。肩もかちかちに固まってしまっている。

今頃家では騒ぎになっているのかまだばれてないのか。

まあ ばれているな。

なんだか家を出たあたりのところからずっと夢を見ているような気がする。

猫の言ったとおり、街にはすぐ着いたので、3人はランプを消してかさこそと目的の家を探した。まだ街にはだれもいない。

「お前どこだかわかんねーのかよー」

黒猫がひげを神経質そうにぴくぴくさせながら言った。

「すみません。ちよつと歩いて来た事がなかったの……」

おまけにこんなに暗いうちに来た事がなかったの、まるで初めて来た場所みたいに思えた。でもものんびりと探している暇はない。

「なんかねーの？どつかの建物の近くにあるとか、見た目がこんなとか」

「なんだかたくさんお店が並んでるところの近くにあったんですが・  
・見た目は普通のお店で」

「なんだつけ？何屋の家だった？」

「からくり師です。自宅と工房が同じ敷地にあって別棟で建っているんです」

反射的に応えると、フードの男はふんふんと2、3度頷いて一直線に大通りを下っていった。あまりの迷いのない足取に慌てて後を追うと、街灯の中に雑多な家々が現れた。通りの両側をずらりとあまり背の高くない店が埋めている。

「ここらが職人町。からくり師なんだろう。この辺に住んでるんじゃないか」

あたりを見回すと確かに見覚えがある。時計屋。宝飾店。古い菓子店。そして小さな教会・・・

いつも車はあの教会を左に折れて

「そこを左に」

そこに女性用の洋服屋があってもっと奥にくつ屋。

「そのくつ屋の突き当りを左です」

すると正面に『からくり細工』の文字。

鉄の柵がウィンドウに下りている。あたりまえだけど。夜中だから。いつもは開いている扉もがっちり閉まっている。でも扉をノックするわけにはいかない。

「ここか。裏には回れねえのか？」

「この工房を通過すれば。」

そりゃあそうだろうよ、とフードの男は呆れたようにつぶやいた。「中の様子は知ってるのか？つまり・・・間取りとか人がいるかい  
ないかとか」

「工房には今は誰もいないと思います。工房を抜けると渡り廊下があって、それを抜けると自宅のほうのエントランスに繋がっています。エントランスの左に客間があってその手前に階段があって、あとはよくわかりませんが、ここのご家族が寝室で寝てるんじゃない

でしょうか。階段を上つてすぐの部屋が子供部屋です」

「子供部屋がどうしたつてんだよ」

「箱がたぶん子供部屋に」

フーダの男はちよつと首をかしげて考えるようなしぐさをした後、気を取り直したみたいにきつと顔を上げて、マントの下からはりがねのようなものを取り出すと、街灯の明かりしかない中鍵穴にそれを差し込んで、器用にかちやりと鍵を開けた。

「お前コソ泥のほうもプロだったのか」

黒猫が本当に感心したみたいに声を掛けた。

「うるせえ。足音を立てるなよ」

誰もいない真つ暗な店の中に忍び込む。黒猫の後を慎重に追いかける。なにしろ商品や工具がそこらじゅうにあるから、この暗闇の中何かにぶつからないで歩くなんでできない。店をなんとか無事に通り過ぎて渡り廊下を通るともう一枚ドア。街灯すらないのにフーダの男は全くの手探りで今度もちゃんと鍵を開けた。

「しつぽ掴みな」

黒猫が小さな声で言う。ふさふさのしつぽを握ると何かのゲームをしているみたいだ。階段の段差にちよつと足踏みした以外は、おかげで難なく子供部屋にすべり込むことができた。

子供部屋の中はひっそりとしていた。

子供部屋からは通りからは見えなかった庭が見え、その庭に置いてある天使のかたちの外灯一（ハロウは、それが夜9時になるとオルゴールを鳴らしてくると回るのを知っていた）が、カーテンの隙間から白い光をそつと投げ入れていた。その光はとてもさやかだった、それでも人がその部屋に毎日のように入り、掃除をし、空気を入れ替えているだろうというのがわかった。テーブルはほこり一つなく光を返し、ベッドは今すぐにでも眠れるようにふかふかに整えられていた。でもこの部屋にはベッドにもどこにもだれもい

ない。

「これじゃないか？」

黒猫がそのベッドにつかつかと（とはいってもその足音は聞こえない）歩み寄り、深い小物入れの付いたヘッドボードの奥、人間の目には見えない暗がりから、一つの立方体を取り出した。

「これ」

ハロウはそれを手渡されてすぐにスイッチを押そうとしたので、フードの男が手をやってそれを制止した。

「逃げるのが先だ。窓から行くぞ」

黒猫がそつと窓を開けてそのままひらりと飛び降りる。

無理だ。ハロウが言葉を無くすと、フードの男が軽くハロウの肩を叩いた。

「安心しな。お前にやれとは言わねえよ」

男は心を読んだみたいに低く言い、またマントの中から長いロープを引き出してベッドの足にくくりつけ、ハロウにもう一方のはしを手渡した。

「降りろ」

これもまた無理です。

とは言いにくかったので、とりあえずトランクと箱を先に下の猫に受け取ってもらうと、ハロウは恐る恐る足を踏み出した。

「下を見るな。ロープにしがみつくな。足を使うんだよ。手の力だけで降りようとするとは怪我するぜ」

足を使うという意味が全くわからなかったので、結局ずるずると手の皮が剥けそうな降り方をした上に、着地と同時にへたりこんでしまった。

「へたくそ」とそれを見ていた黒猫が言った。

なんとか立ち上がりながら上を見る。フードの男がロープを回収してマントの中に元通りしまい、黒猫がやったみたいにあわつと飛

び降りてきた。

「同じ人間じゃないみたいだ」

黒猫が追い討ちをかける。でもまったくそのとおりだなあと、ハロウは箱をトランクに入れながら心から関心した。

庭はちょうどフードの男の背丈くらいの塀で囲まれていて、黒猫がひよいと上つて道がある部分を確認、フードの男がかんで踏み台になってハロウを塀の上に持ち上げてくれた。

「どうもすみません、ありがとうございます」

「うるせえよ。終ってからにしろ」

職人町の通りの裏の細い道に出るともう夜が明けかかっていた。

水銀灯の光がそろそろ空の明るさに埋もれようとしている。

「一仕事だったな。どっちに行く？とりあえず街から出なきゃだめだ」

「次の街に俺の知り合いがいる。そこに行こう」

黒猫が言いながら次の街に進路を取って歩き始めた。

「お前スリ師の上にコソ泥もできるなんて、妙な方向に便利なヤツだな」

まだ声を潜めたままで猫が言うと、フードの男は「いろいろあんだよ」と独り言みたいにつぶやいた。

ハロウは自分の手にできたまめをちらりと見てみた。ロープにはさんだのか血豆になっている。とても見た目はよくない。今はじんじんしているけど、時間がたったらすぐ痛くなるんだろうか。

前を見ていなかったでそのまま思い切り黒猫にぶつかった。

「あ、ごめんなさい」

でも黒猫はぶつかられたことを全く気にせずに、耳をぴくぴくくると動かしている。しっぽがそれに合わせるみたいにぴっぴつと左右に振れる。

「おいスリ師、何かいるぞ」

フードの男は弾かれたみたいに体を反転させ、次の瞬間風を切るような鋭い音が顔の側を通った。

「うつ」

と思ったらフードの男は足を押さえてその場に崩れ落ちた。

右の足の太もものあたりに細くて長い棒のようなものが突き立っている

「・・・やばい。見つかった・・・逃げねえと殺される」

「なん・・・何言ってるんだ？おいスリ師」

「逃げよう。殺されるんだってば」

フードの男は壁に手を付いてよろよろと立ち上がる

「おい兄ちゃん、そのスリ師に肩貸してやんな　俺じゃ体が小さすぎる」

黒猫がハロウの手からトランクをもぎとって歩き出したので、ハロウは黒猫に言われるままにフードの男の腕を首に回して体を支え、それを追いかけた。

「・・・いやいや、ほんとにマズい・・・な、んでこんなところに」

正面に人影が見えた。こちらに歩いてくる。

黒猫のしっぽが「ぼっ」と太くなった。

その人影はなんだか見覚えがあった。マントが風にはためいている。

「その男を置いていけ」

声にはますます聞き覚えがあった。

「でないとお前らにも怪我をさせなければいけない」

人影はおもむろにマントの中から小型の弓を取り出して、足にくくりつけられている筒から矢をつがえた。

そのしぐさが

そしてその顔が

「あいつはマジでやるんだって！逃げろよ！」

ハロウははっと我に返るとなるべくでかい声で叫んだ

「警官の方！泥棒です！だれか来てくださーい！」

男は一瞬ひるみ、新聞配達か何かの自転車が通りに踊りこんできたのを見て、身を翻してどこかに消えた。



「よかった」

ハロウが言うと

「よかあねーよ。泥棒は俺たちだ」

黒猫は真剣に困った顔をしてあたりを見回した。

(8)

水はくさくて汚くて最悪だった。

ちようどひざ下くらいの流れは緩やかだけど泡だの油だのが浮いている。しかも一步踏み出すごとに妙にぬるっとしてふかふかとして、何が自分の足の下にあるのか考えたくもない。これが犬系獣人の多い警官をまく唯一の方法なんだ、と猫は言った。

「やつらは暗いところで目が見えねえ。近眼だしな。でも鼻でみてやがるんだよ。だからな、道路をいくら速く走って、いくつ角を曲がったってあいつらは追いかけてこれるんだよ。地上を逃げたってダメだ」

だからって下水道に潜るこたあねえだろう、とストライクは思った。

矢が刺さったままの足は冷たくて自分の足じゃないみたいだ。ズボンがびっしょりと濡れているが、それがこの下水の水でなのか自分の血でなのかわからなかった。どっちにしろ不衛生なこと極まりない。

黒服の男は文句の一つも言わずに肩を貸してくれていた。でも無事な方の左の足ももう思うように動かない。水が重い。さつきからかちかちと歯が鳴って仕方がない。震えているのだ。

そんなに寒いかな

わからない。彼が追いかけてきていそうだから震えているのかも

しれないし、本当に単純に寒いのかもしれない。全然わからない。それにしてもまさかこんなことに巻き込まれてる最中に見つかるなんてね。

「おい、大丈夫か？」

黒猫が顔を覗き込んでくる。

頼む。前に立たないでくれ。立ち止まるのがおつくうなんだ。

「・・・だいじょうぶ・・・す、進んでくれ。はやく」

口がうまくまわらない。歯の根が合わない。

右の足だけどくんどくと言っている。ここだけ火がついてるみたいだ。出血はだいぶひどいんだろうか。

肩が潰れて死んだやつを知っている。傷自体は死ぬほどじゃなかったのに、血が出すぎて死んだ。顔色が石膏みたいに白くなってた。死ぬ前は指先がもう死んでた。冷たくて。

黒服の男の肩に回された自分の左手を握りこんでみる。力が入らなくて指が少し動いたただだった。でもまだ手のひらがほんの少し温かいのがわかった。まだたぶんだいじょうぶ。

だいじょうぶだいじょうぶ。

自分がどこを歩いているのかふっと忘れた。かたんと体が崩れるたびに男が体を立て、猫が顔を引っぱたいてきた。

出たら顔が引つかき傷だらけじゃねえか。

出られたらだけど。

「・・・しだから・・・れ・・・」

黒猫が何か言っている。よく聞き取れない。

だいじょうぶ。だいじょうぶだよレイン。

なんとかやっていけるよ。

「大丈夫？」

「だ・・・いじょうぶ・・・」

全然大丈夫じゃないけど。

「レイ・・・ン」

寒いね。雨が降ってるんだ

ぼくたちもう死んじゃうのかなあ

だいじょうぶ、待っててレイン

だいじょうぶだよ

「しっかりしろよ！」

猫パンチが来て我に返った。さすがに痛かった。これは確実に流血している。顔も。視線がぐらぐらしている。遠近感がおかしくなっている。地面が動いているみたいだ。ストライクはちょっと頭を振って焦点を合わせた。

「あの・・・こんな時にこういうことを伺うのは大変恐縮なんです  
が」

「んだよ・・・」

黒服の男が前にじりじりと進みながら言った。

「こういう時って痛みを感じないって本当ですか？」

「痛えよー!!」

こいつ一回死ねよ

と思っただけ、そこまでだった。

これなものではありません

(1)

温かい手が前髪をかきあげ、額を覆ったのを感じて目を開けると、  
「目を覚ましたのね」

と柔らかくささやくような声が聞こえた。

額に置かれた手には白く細い腕が続き、半そでの白い服がさらにその先に見える。淡い金色の髪がポニーテールに結い上げられている。白い肌にピンク色の唇が瑞々しい。大きくて優しい緑の目が見えた。かわいい。なんでこんな美女がいきなりいるんだろ。慌てて起き上がろうとして、そつと肩を抑えられ、何か液体の入った吸い口を差し出された。

「まだ動かないで。ゆっくり飲んでくださいね。おいしいから」

口に運ばれるままに飲み込む。甘酸っぱい。本当においしい。

ストライクが思わず喰らいつくみたいになら全部飲んでしまうと、女性にくすぐすと笑って

「お代わりを持ってきますね」

と言って、甘いいいにおいを残して手すりの向こうに消えた。そこに階段があるらしい。

白衣の天使というヤツか。

とは言うものの病院という雰囲気ではない。部屋の隅には木箱がいくつか積み上げられていて、天井には梁が見えた。屋根裏部屋らしい。でも大きな窓からはこれでもかと光が入り、部屋は明るくて清潔で暖かかった。

どうなっただんだこれ？

ストープにはやかんが乗せられ、こんこんと湯気を吐き続け、自分分は白いシャツを着せられて、手編みらしい毛糸のブランケットに包まれていた。呆然としていると階下から話し声が近づいてきた。

「犬のおまわりさんに追い掛け回されたってワケだな」

「まあそういうことだな」

やがて黒猫と一緒に、ワイン色に近いくらい赤い髪をモップみたいに伸ばした、目が空みたいに見える若い男が顔を出した。ちよつとキツネっぽい男前だ。液体の入った吸い口を持っている。

「さっきの美人じゃなくて残念でした」

赤毛の男はにこにこ吸い口を差し出しながら言った。猫は木箱を足で蹴って運んでくるとそれに腰を下ろした。今度の液体はまだ温かくて、からだに一気にしみこんで来る。

「俺の知り合いの家だよ」と黒猫が言い、

「チップの雇い主のルーってんだ」と男が続けた。

「チップ？」

「言ってなかったな。俺はチップ。この人間がルー。そんでさっきここにいた女の子がスウ」

そしてさらに階下からそろそろと人が上ってきた。黒服の男（でも今はシルク・ハットもかぶっていないし、白地に灰色のストライプが薄く入ったシャツを着ている）とさっきの美女だった。美女はお茶のカップを5客とティ・ポットとクッキーをお盆に載せていた。

「せっかくだからお茶にしましょう。ルー、テーブルを出してくれ  
る？」

部屋の隅に折りたたまれていた木製のテーブルを、黒猫のチップと赤毛のルーが行儀よく出す。

「椅子は適当にその辺の箱に座ってくれよ」

チップが木箱を蹴りだして黒服の男が受け取り、テーブルに添えると美女に先に座らせてやった。

「あらどうもありがとう」

午後のいつぱいの日差しの中で行われるそれはまるでしあわせな寸劇のようだった。

どうなってんだこれ。

「クッキー食べられる？あなた、足の怪我は大丈夫だけど、栄養失調と寝不足と貧血ですってお医者様が」

スウというらしい美女は、ベッドのサイドボードに、紅茶の入ったカップとクッキーを少し取り分けて置いてくれた。「砂糖入れる？」

そういえば足は、とブランケットをめくってみたら、トランクス一枚しか下につけていなくて顔から火が出そうになった。足には包帯が巻かれ、少しだけ血が滲んでいた。

「迷惑を掛けたみたいで・・・」

やっとそれだけ言くと、ルーが「いつものことだから」と言った。

「こいつはいつも人間拾って来るんだよ。昨日も朝っぱらから、裏口ガンガン叩いてな。しかも全員ドブ水でどろどろ」

「ルーだっていつも面白がってるじゃねえか。トントンだろ」

「チップちゃん、マタビパウダー入れる？」

「入れる」

黒猫はスウから小瓶を受け取ると、茶色っぽい粉を紅茶とクッキーにぱらぱらと振りかけた。

「んであんたらは一体誰なんだ？」

黒服の男が話し出す様子が全くないので（全然聞こえなかったみたい）に彼は紅茶を飲んでいた）ストライクはしょうがなく話した。

「俺はストライクって言うんだ。今はスリ師。昔は泥棒もやってた」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「それで終わり？」

「終わり」

いかにも不満だという風にチップがしつぽを大きく左右に振る。

「あの弓野郎は？」

「知り合い」

「知り合いが殺しに来るのかよおめーは」

「いろいろあるんだよ」

紅茶を一口飲んでやつとひげが伸びかけていることに気が付いた。担ぎ込まれたのが昨日の朝なら丸一日以上寝ていたことになる。

「ま、いいじゃねえかチップ。しゃべりたくないんならさ。そつちのお兄ちゃんは？」

黒服の男は水を向けられてやつと少し顔を上げた。

「僕はハロウ・ストームという者です」

「……」

ハロウという男は、これで話は終わったと言わんばかりに、またテイ・カップを口に運んだ。

「あら？そのお名前聞いたことがあるわ・・・お仕事は？」

スウが遠慮がちに尋ねると、ハロウは難しい顔をしてもう一口紅茶を飲んだ。でもルーはそれを聞いてまたにこにこ笑い出した。

「詩人のハロウ・ストーム。あんた今日の新聞に載ってるぜ。『新進気鋭の詩人ハロウ・ストーム、自宅より忽然と姿を消す』って。こんなところで何してるんだ？」

「どうしても手に入れたいものがあつたので」

新聞記事によると失踪中のハロウ・ストームはもごもごと答えた。チップが助け舟を出した。

「あの箱か？」

「箱？」

「そう。この兄ちゃんがそつちの元泥棒に頼んで人んちに盗みに入つて持ってきた箱があるんだよ」

ハロウは無表情のまま本当にかすかに頷いた。

ストライクはとりあえずクッキーを全部食べた。

箱のスイッチは緑色で、まるでつぎはぎをあてたみたいな銀色の立方体に控えめに付いていた。

「俺はパンドラ・ボックスと言ったらもっとゴテゴテしてるもんだと思ってた」

とチップが言った。

スウも頷いている。「かなりシンプルね」

ハロウが少し逡巡した後スイッチに触れると、パンドラ・ボックスは一瞬全体を白く光らせ、「パスワードをどうぞ」と機械的な女の声で言った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・パスワード・・・は？」

「わかりません」

「そこは隠さなくてもいいだろお？」

「はつきりと聞かなかったの・・・たぶんこういうパスだろうな、というくらいしかわからないんです」

暫くするとパンドラ・ボックスは怒ったように赤く一瞬光り、「パスワードエラー」と言って沈黙した。

「それがお前の欲しかったもの？」

ストライクが呆れて言うと、ハロウは真顔で「そうです」と言った。

「あら。もう少しでお店の時間だわ。片付けてくるね」

スウがティ・カップやポットや、ほとんどストライクが空にしたクッキーの小鉢やらを持って階下に下ってしまい、チップは猫らしくうまく木箱の上で丸くなった。すぐに寝息を立て始める。ルーはとても優しくチップの頬を撫でた。

「スリ師で泥棒だって。珍しいな。こいつはそういう人は連れてこなかったんだよ。そっちのお兄さんみたいなのばかりだったんだ」



「金持ちしか連れてこなかったのか？」

ストライクが憮然として言うと、ルーはまあそうかもな、と笑って言った。

「スレてない人間が好きなんだなこいつ。そういうイキモノって人間の中にしかないって前に言ってた。何もできなくてお人よしで世間知らずで頭悪いイキモノが人間の中にはいる、それでも生きてる、スゲー！って」

「それって人間ってバカだって言ってるね？」

ストライクも笑ってしまったが、ハロウだけ微妙な顔をしてチップを見ていた。

「弱くても生きていけるのは人間だけだって。だからそういう人間を見ると感動するんだと」

「ふうん」

「これ見てみな」

ルーが眠るチップのあごに指先を突っ込んだ。よく見るとチップの首に、ふさふさの真つ黒な毛に埋もれるようにして、これまたふさふさのベルベットの真つ黒な首輪が巻かれていた。今までチップが首輪をつけてることなんて全然気が付かなかった。ルーがちよつとそれをずらすと、首輪の下はすっかり禿げ上がって、ピンク色の柔らかそうな皮膚が露出していた。

「この首輪・・・外した方がいいんじゃない？禿げちまつてるぜ」

「この首輪は俺が買ってやったんだ。このハゲ隠しに」

チップがうるさそうに耳をぱたと振ったので、ルーは首輪から手を離れた。

「俺んちにこいつが転がり込んできた時もうちこうなってた。いろいろあってそう思うようになったら。詩人の兄さん、気を悪くしないでくれよ。こいつは別に馬鹿にしているわけじゃないんだ」

ハロウは眠っているチップをじつと灰色の瞳で見ていた。相変わらず何を思っているのかわからないような無表情だったが、どういうわけか悲しそうに見えなくもなかった。

「雪がな」

チップは自分のことが話されてるなんて気が付かない風に、ルーの手が頬に触れるたびくびくとひげを動かし、くの字に曲げた腕の中に鼻先をきゅうつと抱き込んだ。

「ある日の朝起きて雪が積もってて、もし足跡一つついてないなら、そのままにしておきたいんだーって言ってた。」

「俺は喜んで一番最初に足跡をつけるな」

ストライクが言つと、ルーは「どっちの気持ちもわかる」と言つてまた少し笑った。

(3)

ハロウが1階に下りると、すでにスウが準備を整えて店を開けるところだった。

「ハロウさん。今日は何してもらおうかな」

皿洗いは・・・チップがやるか。料理は私とルーがやるし、配膳は・・・これも私がやるかなあ・・・

健康的に色白でかわいらしいその女性はハロウの顔を見て暫く考え込んでいた。

昨日の夜もハロウは、昼間はカフェ、夜になるとそれにちよつとお酒も出す、このルーとスウの店を手伝おうと、いろいろやらせてもらったのだが、皿を洗えばすぐに手をすべらせるし（泡がこんなにすべるものだなんて）、野菜を切つてと言われればどれくらいの大きさに切るか考え込んでしまうし、これをあの何番のテーブルに運んでと言われても、テーブルに辿り着くまでにどういうわけかコップからは中身が零れてしまうし、無愛想だと客に絡まれるしで正直何もできなかったのだ。

「じゃあね、お客さんが帰ったテーブルを綺麗にしてくれます？お

皿をそのお盆でここまで運んで、そちのふきんでテーブルを拭いて、そしてふきんを洗ってね。いい？」

でもそれも今ひとつうまくいかなかった。

ハロウがきちんと片付けるよりも客の回転が速かったのだ。

目をこすりながら降りてきたチップは慌ててテーブルを片付けて、席があくのを待っていた客を座らせた。

「お前、筋金入りの役立たずだな？」

チップが残りものの載った皿を芸術的に両手に積み上げながら言った。

「でも、お皿も割らなかつたしちゃんとテーブルも拭けてたわよ。ちよつと慣れてないだけよ」

スウがまるで積み木遊びでもしてるみたいに皿を洗い、ステンレスの檻のようなものに泡の付いた皿を綺麗にしまい、檻にざつとお湯をかけて食器を真つ白に洗い上げながら言った。

「ま、ちようどいいや。ストライクにゴハンもってやってくれよ」

ルーが魔法みたいに、目玉焼きをフライパンからレタスとトマトとハンバーグの載ったバンズの上にひょいと載せながら言った。きゅつと上からバンズを押さえて出来上がり。

「これはあんたが食って。ストライクにはポタージュが作ってある」

この人たちは天才だと思いながらハロウが屋根裏部屋に行こうとしたら、ストライクが階段の手すりにしがみついていた。

「・・・・・・トイレ」

肩を貸してトイレに連れて行くとやつと一つ仕事をした気になった。

ストライクは部屋に戻るとポタージュを一瞬で飲み干し、付け合せのライ麦パンで皿までピカピカにし、「ひとくち！」と言ってハロウのハンバーガーを取って一口で半分食べた。一口には違いない。ストライクが箱を開けて見せてほしいと言うので、ハロウは暫くパswordを考えてみた。考え付く限り唱えてみる。

ひまわり。ユリの花。クリスマス。天使のランプ。

おひさま。チューリップ・・・はダメなんだった。こうして考えてみると僕は彼女の何を何も知らない。

オルゴール。あとは何が好きだっただろう。キャンディ。チョコレート。えーと、ベンジャミンの木が綺麗で好きだと言っていた。オリオン座。星の中で一番好き。でも冬しか見られないから、パパもママもあんまり見せてくれないの・・・鳥の声が好き。空の青い色が好き。お姉ちゃんからもらった指輪が宝物なの。

なんだったかな、白いスイトピーを持っていったとき、いいにおいだと喜んでいた。

「開かねえな」

「開きませんね」

「なんでお前開けられねえの？」

「それは」

「ハロウ・ストームがここにいてほんと？」

突然名前を呼ばれて顔を上げると、オレンジ色の髪の大人数の女性と、サングラスを微妙に下にずらした、短い髪が鮮やかな緑色をした黒人の男が部屋を覗き込んでいた。髪が緑で肌が見事にこげ茶色なので、ハロウは「木だ」ととっさに思った。

(4)

その大木みたいな男と（実際体もでかった）オレンジの髪の女は、ルーとスウとチップの友人らしかった。女は白いジャケットに、薄紫色とエメラルドグリーンが複雑に絡んだ色の、膝よりも少し長いスカートを身に付け、かかとのあるくつを履いていた。男の方はカーキ色のコートを着ているので、ますます森の中にいたら溶け込

みそうに見える。女のほうがハロウの横にきちんと背筋を伸ばして立った。

「私ラ・ベルっていう女性雑誌の編集者をしているの。あなたとはあなたの詩集の出版パーティーで会い損なったことがあるわよ」

「僕がいなかったパーティーですね」

ハロウはいつもの無表情のくせにいつもの倍くらい無愛想になった。

「このニュースは記者に渡しているの？警察に渡すべきなの？それともあなたのお父様に電話するのがいいのかしら」

女編集者はからかってくるみたいに楽しそうに笑って言った。

「チップも面白いのを拾ってくるようになったな」

黒人の男は勝手に木箱を転がしてどっかりと上に腰を下ろし、ベツドに半身を起こしているストライクと、その横で箱を手に持って俯いているハロウを交互に眺めた。

「俺はアルフ。タクシー運転手。この町の道のことならネズミより詳しいぜ。そっちのうるさいのがキャリアー。俺の彼女」

「俺はストライク。拾われた一人だよ」

おう、と言ってアルフと言う男はひょっとストライクの手を掴み、ぶんぶん握手した。手がでかい。

「あんた結構有名人だったのか」と、ストライクが箱しか見なくなつてしまったハロウに声を掛けると、ハロウはかなり考え込んだ様子で「僕が有名なのではないです」と言った。

「そちらのキャリアーさんはご存知だと思いますが、僕が詩集を出したのは僕の父が出版社に無理に出させたというのが本当のところ、僕は本当なら、いなくなつたくらいで新聞に載つたりしない人間です」

キャリアーは苦笑いして名刺をハロウに差し出した。

「ともあれ、キャリアエッタ・スワンクです。お知り合いになれて光栄です、ハロウ・ストームさん」

ハロウは下を向いたまま目の前に差し出された名刺を受け取り、

暫く眺めていた。

「ちょうど昼間に編集部の子があなたの行方不明事件のことを話していた矢先だったから、驚いたわ。あなたの追っかけ記者の人が、各局に電話をかけまくってるらしいわよ」

「ウォラ・デイモンが？」

ハロウはその時初めて顔を上げた。

「ええ。かなり必死みたいだったって。すごいわね。1作しか出版してないのに、張り付き記者がいるなんて大物ですね。残念ながら私はハロウさんの詩集を拝読していませんのすけど」

アルフがあくびをひとつした。キャリアとハロウの話がつまらなかったようで、ストライクに話しかけてきたが、ストライクはハロウとキャリアが気になって仕方なかった。

もしかして最初に思っていたよりもこいつ金づるなんじゃないか？ 生返事を返すとアルフは、「堅い話嫌いなんだよー」とブツブツいいながら階下に降りていった。

「ウォラ・デイモンと連絡を取ることはできますか？」

ハロウが決心したように言った。

「私は彼女のこと直接は知らないのよ。だから・・・編集の子に連絡してもらうしかないわね。ここにいて教えてあげるの？」

「できればここにすることは伏せたいのですが」

キャリアは何度が頷いて、脇に挟んでいた大きめの白いかばんから手帳を取り出すと、何かをさらさらと書き付けた。

「でもね、折り返し電話をもらわないといけないかもしれないから、この電話番号はバレると思うわよ。あなたが一番知ってると思うけど、電話番号がばれたら、まあウォラ・デイモンなら、住所割り出して駆けつけてくるかもしれない。すぐに。それでもいい？」

ハロウは目の錯覚かと思う程度に少しだけ頷いた。

「それに、私だってうちの記事としてすっぱ抜けるもんならそうしたいのよ。行方不明の詩人ハロウ・ストーム発見！てね。だから悪いけど記者の子には言うわよ。あなたがここにいてからって。その

子が取材に来ることになるかもしれない。それでもいい?」

ハロウはちよつとだけ考えて「お願いします」と言った。

「でもその前に僕が逃げ出しているかもしれないよ」

キヤリーは冗談だと思ったようではと笑ったが、あの箱を人の家からかつぱらったことを考えると、ストライクには冗談には聞こえなかった。しれつとした顔してるけど前科一犯だぞこいつ。人のこと言えないけど。

アルフがビールを半ダースとスライスしたサラミを持って戻ってきた。階下からルーの声が聞こえた。(「アルフ! そいつはピザ用だ」)

「ところでアルフさん」

「なんでしようハロウさん」

「その髪は地毛ですか?」

アルフは飲みかけたビールの最初の一口を思い切り鼻に逆流させた。

(5)

やがて電話の音がして、ルーがそれを取った。

ルーも電話がかかってくるということはキヤリーから聞いていたので、恐らくそのキヤリーの会社の知り合いだか知らない人だかだろう、と思って取ったら、電話の相手はものすごく苛苛とした調子で「ユー・ジーンと言うものですが、ハロウ・ストームをお願いします」と言った。

チップに言っただけで電話ごと屋根裏部屋に持って行ってもらうおう、と思ったんだけどコードが短すぎたので、ハロウには2階と1階の間の階段の途中で電話を受けてもらうことにした。

キヤリーが会社の子とやらに電話を掛けに行っている間、緑色の髪が地毛でないことを説明すると、ハロウは実に残念そうな顔をした。

「でも草や木は緑色になるのにどうして人の髪はならないんでしょうか」

「どうしてでしょうね？」

アルフは確実にハロウを面白がってニヤニヤと調子を合わせていた。

ストライクがサラミを一枚もらって齧っていると、チップがやって来てハロウに電話だと言った。

「なんかウオラとかなんとか言う人じゃないらしいぜ。ユーージン？とかなんかそんなかんじ」

「ユーージン？誰かしら」

キヤリーが首をひねるのをよそに、ハロウはすたすたと電話口まで歩いていき、アルフはそれをニヤニヤしたままおっかけ、（たぶん盗み聞きする気だろう）ストライクも釣られてベッドを降り足を引きずりながら階段の手すりから覗き込んでみた。

ハロウは一階の厨房のほうに顔を向け（つまりストライクたちに背を向け）、受話器を右手に持ってじっと見つめていた。（電話機の使い方を知らないんじゃないか、とストライクは少し不安になった。）

そして無表情のままひとつ深呼吸をすると（ため息だったのかもしれない）、斜め上に顔を上げて耳に当てた。ちゃっかりチップがその横に座っている。

「もしもし」

ハロウは暫くは立ったままで電話を受けていたが、少しするとチップと並んで階段に腰を下ろした。ときどき女の詰問するような高い声が漏れてストライクのところまで届いた。かなり長い間、ハロ



ウはただその相手の言うことを黙って聞いていた。

後ろから見ていると、ハロウがどんな顔をしていてどんな話をしているのか（されているのか）全くわからない。黄色の髪の後頭部をこちらに向け、肩を落としているのだけが見える。

壊れたあやつり人形みたいだった。あの人形は糸が切れているから使えないんです。

でもハロウはちゃんと生きた人間だったので、「ところで」と声を出した。

「ところでユーージン、あなたのお母様の名前を覚えてくれないか」

「あんななんか死んでしまえばよかったのよ」

その声は電話器から出たなんて信じられないくらいでかく、はっきりとストライクにも聞こえた。それに続いて、壊れちまったんじゃないかと思うくらい破壊的な音を立てて電話が切られた。電話の向こうで相手が受話器を叩きつけたんだろう。

ハロウは無表情のままだった。

（ 6 ）

受話器を置くとすぐに次の電話がかかってきたので、そのままハロウがほとんど反射的に出た。

「もしもし、・・・チップさん、ここどこでしたでしょうか」

でもチップが店の名前を言うよりも早く、相手がハロウを遮ったようだった。

「・・・・・・ハロウ・ストームは僕です」

それにしてもどうしてみんなハロウをフルネームで呼ぶんだろう？

ハロウはさつき以上にぼんやりと話を聞いているように見えたが、今回は3回ばかり丁寧な相槌を打つと、「それでは」と言って電話を切った。

平和的な電話であつたらしい。

「さて」

ハロウはチップに向き直つて「電話をどうもありがとうございました」と言い、とつと元の位置に戻つたアルフとキャリアとストライクを尻目に、さつさと上着を着てコートを着てシルク・ハットを被つてトランクに箱をつめ、すつくと向き直つた。

「ウオラ・デイモンはこちらに来ると思います。僕は彼女と会いたくはないのでお暇致します」

そしてストライクに約束どおり財布ごと手渡した。

「ストライクさん、どうもありがとうございます。あなたに会えて僕は本当に幸運だつたと思います」

ストライクはどういたしましてと言うべきなのかわからなかった。

「キャリアさんもお手数をお掛けして申し訳ありませんでした」

キャリアは営業的笑顔で「どういたしまして」と言った。

「アルフさんにも出会えてよかった。僕はその緑色の髪の毛が好きです」

アルフは腹を抱えて笑いながら「そりやどうも」と言った。

言うだけ言つたという感じでハロウはまたくるりと身を返すと、

1階に振り向きもせず降りていつてしまった。

「本当に逃げるらしいな？」

アルフはまだ半分笑つていた。

「まあいいわ。本人を私が確認したんだから記事にはできるでしょ」  
キャリアがビジネスライクに言った。

これでおしまい。

いや、それでいいんだけど。金ももらったしむしろ言うことない。ストライクは何かひどくむずがゆいような気分だった。それでいいんだけど、何もハロウのことについて半端じゃないか。

箱も開かなかった。なんであんな箱がほしいのかもわからなかった。さっきのものをすごい電話はありや何だよ。くそボンボンめ。

まあいいけど。どうでも。

「ま、なんかの縁だからその辺まで車出してやるよ。外は寒いしもう暗いしな」

アルフが階下を下っていくとキャリーとストライクは二人きりになっちゃった。話すことがないので、ストーブにかけてあるやかんが蒸気を上げる音がやけに耳についた。もう中の水はあらかた蒸発しているらしい。

「あの・・・ハロウってそんなに有名なやつだったのか」

「すつごく有名なのよ」

「詩人で？ そんなになんつーの・・・すげえの？」

キャリーは言いようのない苦笑いをした。

「詩はね・・・んー、私も読んだことないからなんだかんだ言えないんだけど、詩の中身の方はあんまり有名じゃないのよ。有名なのは本人もちよつと云ってたけど、お父様ね。知らないかしら、ロメオ・オーギュスト・オルフェリウス・・・普通の人は知らないかな」

「ぜんぜん知らない、きいたこともない」

「古くから続いている家柄で、貿易会社の社長さんよ。というかもう何やってる人かわからないわね。最初は貿易会社の社長だったんだけど、今は新聞社も広告会社も劇場経営も飲食店もなんでもやってるはずよ。つまりどこにでも顔が利く大物なのね。ハロウ・ストームはそのオルフェリウス氏の次男で、オルフェリウス氏の斡旋と宣伝力で詩集を売り上げたのよ」

「すげえ。ひどい。ズルい。汚い。おぼっちゃまめ」

「・・・そうなの。そんな風にやっぱりね、世間も反応して、暫く各紙面でやりあってたのよ。親の七光りだって。本人は全然顔

出さないし、電話でさえ何も話してくれなかった。ハロウ・ストームの顔を知っている記者なんて、ウオラ・デイモンと今の私くらいじゃないかしら」

そうだったのかあ。

でもならなんであんな職人町の、まあ貧乏ではなさそうにしろごく一般的な家の、ただのおもちやを欲しがったりしたんだろう。

まあいいや。なんでも。とりあえずハロウとはもう合うこともないんだろう。町でもし見かけたってそんなボンボンに声を掛けられるもんか。

「ま、関係ないけどな」

その時いきなりがちゃんと大きな音がして、一面が暗闇になった。

「あつ・・・何？」

キャリーががたと木箱にぶつかりながら立ち上がる音がした。まさか

「おい！まずいぞキャリー、伏せるんだ」

ぱんと窓が開く。冷たい冬の風が小雪と一緒に吹き込んでくる。外の街灯の明かり、家々の明かりが

「何？だれか！アルフ！」

「ストライク、早く来るんだ。お前が暴れなければ何もしない」

明かりが黒い影を作っている。

足が

影が一步近づいてくる

足を庇いながらベッドを降りる

暗闇になかなか目が慣れないのでどこに何があるかわからない

「もう片方の足にも射て欲しいのか」

「キャリー、階段だ！速く逃げろ！」

俺は

俺はどうする？

もう一步。

キャリーがほとんど転げるように階段を降りていく

足は

大丈夫

動け

近くにあった何かよくわからないものを掴んで力任せに投げつけると、ストライクは階段の方に走った

「ルー！スウ！来るんじゃないっ」

ストライクはほんとうに階段を転げ落ちた。

アルフが拾い上げるみたいにひょいとストライクを起こし、そのまま横っ腹に抱えて

「ちょ！アルフ！どこに」

「あんたも面白えやなあ」

ルーがひらひらと手を振って見せたのが目の隅に映った。そのまま裏口から外に出るとアルフはストライクを車の後部座席に押し込んだ。ハロウがお行儀よくすでに座っていた。

「おう、待てよ！」

チップまで転がるように走ってきた。

「ストライク、その格好は犯罪だ」

「あ」

チップはストライクの服と、マントと、ベルトにつけていた道具一式を持ってきてくれていた。

「あんたは？彼女なんだろ？キャリーさんて！ルーとスウがやばいし」

「落ち着け落ち着け。あの階段は一階にドアがあって閉められるんだよ。なんだか知らないけどあの入ってきた変なやつはルーにもスウにもキャリーにも会えねえってこと。賢いやつなら諦めるね。屋根裏と二階にやなんもねえしな。窓からヤツが飛び出す頃には犬のおまわりさんが来てるって」

言うなりアルフはがんとアクセルを踏んで、雪がうつすらと積もっている夜の街の中に、ハロウとストライクとチップを乗せたまま飛び出した。

「さて。どこに行く？言っただと思うけど俺は」

ネズミよりこの町の道には詳しいんだぜ。

やれやれ。「どうしてまたこのメンツと一緒に逃げなきゃいけないんだ」

ストライクは思わず言うと、

「車が1台で済むじゃねーか。なんならもう一人乗せてもいいぜ5人乗りだ」

とアルフが言った。

## 夜に飛ぶ鳥

(1)

ストライクはハロウとチップに挟まれて、ちょうどフロントガラスの真正面にいたので、うつすらと雪の積もった、青い夜の中を、アルフの運転する車が潜り込むように進んでいくのがよくわかった。雪はガラスに迫っては次々に左右に逸れ、まるで次から次に白い大きな花が

暗闇に溶けていくみたいに見える。チクタクとワイパーが時計のように鳴っている。

「ところでストライク、その足はどうしたんだよ？」

アルフが不意に声を掛けた。

チップから手渡された服を着てみると、なんとアイロンが当たった上に、スボンの矢が刺さったはずの穴がきれいに縫ってあった。スウさんがやったんだろう。美人な上に器用なのか。ルーが羨ましい。

「刺さったんだよ。矢が」

「矢？あの弓矢の矢？アーチェリーとかの矢？」

「そう。その矢」

「間違つて的の前でも歩いてたのかよ」

アルフがバックミラーからニヤニヤしていた。くそ。

「なんか変なヤツが出てきてよ、いきなり撃ってきたんだよ」

チップは自分が射られたわけでもないのにプンプン怒りながら言った。

「こいつは知り合いとか言ってたけどさ。さつきルーの店に来たのもそいつなんだろ？一体なんなんだよ」

「ふーん」

ストライクが黙り込むとアルフは下にずれているサングラスにち

よつと触れた。夜なんだしずっとずらしてるなら外せばいいのに。  
「弓？で矢？ねえ。そいつはアレっぽいな。最近いわゆる裏街道の  
皆さんが矢で暗殺されてる話」

「なんだそれ？」

「今時さ、弓矢でアンサツなんて流行んねえだろー。でもここ1、  
2年かな。ナントカカントカの親玉とか、ウンタラカンタラの若様  
とか、そーゆー怖いお兄さんたちが矢でボツクリ殺されて道に転が  
るつてのが何件かあつてな。ま、そういう世界じゃ珍しい話じゃな  
いんだろつよ。でもなかなか弓矢使つやついないだろ。だからその  
『魔弾の射手』は誰なのかってウワサになってるんだ」

「へー、そつえばそんな事件あつたような気もするな」

「あつたんだよ。キヤリーが特集記事組んだよ。なんもわかんなか  
つたらしいけどな。わかつたのは異様にウデがいい射手だつてこと  
くらい。ぜんぶ一撃必殺だつたらしい。な、ストライク、知り合い  
？」

「知り合い」

フロントガラスのほかの窓はすっかり曇つてしまつていた。ワイ  
パーの動く音が聞こえる。

「俺を追いかけてきてるのはその魔弾の射手だ。降ろしてくれても  
いいぜ」

すれ違う車のヘッドライトが車の中をなめるように照らしていく。  
アルフが方向指示器を付けながら言った。

「チップは本当に面白いの拾つてくるようになったよなあ」

「なんでそんなヤツに追われてんだ？」

ストライクは言いたくなかつたので黙つていた。全然会話に参加し  
ないハロウを見ると、ハロウはハロウで箱を一心に見つめて何  
か考えているようだった。

「ま、殺されないうちにどっか行こうぜ。どこに行く？」



「どこかのおもちゃ工場に」

いきなりハロウがとてもはつきりとした声で言った。

「できればパンドラ・ボックスを作っているような所に。お願いします」

ストライクは「降ろしてくれ」と言いそびれた。

(2)

おもちゃの工場ねえ、と言ってアルフはちよつと首を回した。

「あるよ。あるけど、なんでそんなところなんだ？なんかあんの？」

「こいつ箱開けたいんだよ」とチップが言った。

「箱？」

「パンドラ・ボックス。こいつ隣町でかつぱらってきたんだよ。しかも自分で開けられねーの」

「ははははは。お坊ちゃまっぽいのに泥棒とは大胆だね。中身入りか。ちよつと見せてみな」

ハロウがパンドラ・ボックスをシートごしに渡すと、アルフは片手できゅつとハンドルを切り、車を脇に寄せて止めた。

「なんかずいぶん何にももないか？」

ストライクも覗き込んでみた。確かにその箱には何もない。スイッチが一つだけ。あとはただの、金属のつぎのあたった銀色の箱だ。「メーカー名もないぞ。なんだこれ」

アルフがぼちつとスイッチを押す。車の中が一瞬白い光に満たされる。

「パスワードをどうぞ」

「うーん、メーカーがわかればな。どっかおもちゃ屋にでも寄って聞いてみるか？」

アルフの手の中で箱は赤く光って黙った。パスワードエラー。

「お願いします」

ハロウはとても真剣な顔をしていた。

車は10分もしないうちにわりと大きめのおもちゃ屋に着いた。

おもちゃ屋は大きめとはいえ、外からでも十分に、棚にあふれんばかりにあらゆるおもちゃが載っているのが見えた。箱がたくさん並んでいるブースもある。きつとあれがパンドラ・ボックスなんだろう。ぜんぶ。

ストライクは歩くのが面倒だったので、みんなの帰りを車の中で待つことにした。

店員らしい男が見えた。メガネをかけている。アルフと何事か話した後、ハロウのハンドラ・ボックスを手にとって、つくづく眺めていた。メガネを付けたりはずしたりせわしない。10分ほどそんなことをしていて、車の中が寒くなってきたころ、3人が戻ってきた。

「すげえよ。メーカー製じゃないとよ」

アルフがにやにや笑いながら言った。

「困ったな」

ハロウがはつきりとため息をついた。よほど期待していたのか。

「まあ、盗みに入った家がからくり師の家だもんなあ。からくり師が作ったのか・・・」

チップまで残念そうにしている。

「もう壊して無理に開けちまえば？」

「ダメなんだと。やっぱさ、おもちゃなわけじゃん。入ってる記録装置がちやちいから、開けてる間に壊れて記録は消えちまうだろうって。まあこれ手作りだとしたらどんな記録装置が入ってるのかわかんないから、もしかしたら大丈夫かもしれないけど」

「あのからくり師の家に訪ねていつて聞くか。『どうやって開けるんですか』」

チップが言つてカカカと笑つた。

「行つてもたぶん開けてくれないですし、恐らくこれを作つたのはリシユリユー・エウリデイクでしょうが、彼もパスワードをご存知ないと思います」

「開けてくれないつてのはドアを？箱を？」

「両方です」

まあ、盗んだ家に玄関から入りなおして頭下げるつてのは無しだろうよ。

「パスワードを誰か知らないのか？この箱を閉じたヤツはからくり師とは別なんだろ？」

ストライクが聞くと、ハロウは感情が蒸発してしまったようにしゅつと無表情になつた。「困つた」も「残念」もなかった。

「……その人はパスワードそのものは教えてくれませんでした。パスワードは『私のお気に入り』だと」

ひまわり。ゆりの花、キャンデイ、チヨコレート。オリオン座。そういうことか。

「『私のお気に入り』って一回言つてみたら？」

チップが言つたので、ハロウはスイッチを押して言つてみた。「パスワードをどうぞ」

「私のお気に入り」

次の瞬間、

車がふらつと右に大きく揺れたので、ハロウはストライクとチップに潰されることになつた。

「あぶねえあぶねえ」

アルフは運転席から飛び出して車の後ろに走つていった。誰かを轢きかけたらしい。

箱は赤く光つた。パスワードエラー。

「おい、怪我してねえか？」

ちょうど後部座席の真後ろにいたのでアルフの声はよく聞こえた。「いや、あのね、俺は怖くないから。な、大丈夫？立てる？」

チップが外に飛び出して行った。「どうしたんだ？」

「ごにやごにやと二人で話しこんですぐにチップは小さな女の子？を助手席に連れて来た。女の子？はその体にしてはでかい袋を抱えてひどく震えている。ハロウがまたえらく面倒な手順を踏んで、アメ玉やら紙ふぶきやらを散乱させながら（「それ片付けろよ」とアルフが釘をさした）毛布を取り出して渡してやった。

「そのトランク使いにくくね？」

「でもものがたくさん入るんです」

「そうだね。とりあえず紙ふぶきとかを入れておくのをやめろよ。」

ついでにハロウは出てきたアメ玉を女の子とチップにあげた。チップは「こんなもんいらねーよ子供じゃねーんだから」と言いつつぽんと口に放り込んだ。

「急に飛び出してきたもんで。轢いちまうかと思ったよ」

女の子は毛布にくるまってもまだぶるぶると震えていた。すごく小さい。人間の子供くらいの大きさしかないチップよりもまだ一回り小さい。何かの獣人の子なんだろう。けど、全然種類がわからない。

「ネコ？ネズミ？」

「こそつとチップに聞くと、チップも首をひねった。」

「ネコ・・・にしちゃあ鼻が長いよな。耳のでかい犬系・・・？でも犬系って二オイじゃないんだよな・・・」

毛布からちよつと出た耳は赤みがかった茶色で、ネコの耳のようにぴんと三角だった。

「・・・わ、わたし・・・南の教会の・・・かいもの、しなといけなくて」

「南の教会？」

「南の教会？」アルフはもう一度繰り返した。「この俺に心当たりがない！」

「この、街じゃないの。街のそと、の、コロニーの、きょうかい」

「コロニー？あの辺はもう無人の荒野じゃねーか。スゴいな、そん

な所に住んでるのかい」

「わたしと、牧師さまで、ふたりで住んでるの。前の牧師さまが、死んだから、去年来たの」

「どうする？」

アルフがストライクとハロウに向かって言った。

「どうでも」とストライクが言うと、ハロウも微妙にうなずいた。

「じゃさ、お嬢ちゃん、買い物は終わったのか？」

うん、と言って小さな彼女は持っていた袋を大事そうに抱えなおした。

「うん、でもね、暗くなっちゃって、道、わかんなくなつたの」

「じゃあコロニーの教会まで送ろうか。後ろのお兄ちゃんたちは怖い人だけど、俺は優しい一般人だから安心しなさい」

「おめーの外見が一番おかしくせによ」

チップがフンとハナを鳴らした。

(3)

コロニーはチップたちの町から東に10キロほどのところにうち捨てられていた。

かつてはドーム状の巨大な居住区だったはずであり、何万人という人間が暮らしていたはずだったところだ。でもいまはだれもいない。

ドーム（だったはずの部分）に踏み込むと（車は入れなかった）、遺跡が豪華な墓場のように見える瓦礫の山が薄く雪を被っていた。ところどころ雪が下から発光している。

「あれは何が光ってるんだ？」

チップが聞くと、女の子は得意げに

「遺跡の、チクコウタイが光ってるのよ！」と言った。

チクコウタイってなんだろう。

「昼の、おひさまの光を溜めて、夜光るものよ」

ストライクもハロウに肩を貸してもらって、獣道のような、やつと人一人が通れる分だけ瓦礫が避けてある道を、とことこと歩いていった。

アルフに肩を貸してもらおうとしたら身長に差がありすぎたのだ。  
「街にはどうやって行ってるの？歩き？」

「そうよ。今日も、お昼から、街にいったの。でも、帰るときは、暗かったの」

こんな小さい体では街までは相当だろう。

「くるま、のつたの一年ぶりなの。楽しかった！」

「そりゃよかった」

アルフは女の子の買い物袋を持ってやっていた。アルフが持つと買い物袋はまるでアメ玉の袋みたいだった。

20分ほど歩くと正面にとても大きな教会が浮かび上がった。チクコウタイとやらが外壁に埋め込まれているらしく、本当に暗闇の中に薄緑色の細かい模様が光っているのだ。

「すごい」

「すごいなあ」

「綺麗ですね」

「でかい」

小さな女の子はとても嬉しそうにうふふふ、と声を上げて笑った。

「きれいでしょ。私も大好きなの。牧師さまが、いるはずだから、みんな、あがっていった」

教会の中は見た目ほど荘厳とは思えなかった。

外と同じくらい寒い。それに暗い。

「おかしいわ？牧師さまが、いるはずなのに」

女の子がたたと奥に走っていった。何かにぶつかって転ぶ音が

した。

「いたた・・・」

「明かりつけてやろうか。マッチは？」チップが見かねて声を掛けた。

「右奥に、とびら、見える？」

「見えるよ。」

「その、とびらの、横の、棚のなか」

チップがまずその奥の扉の横のランプに火を灯した。小さな劇場みたいな、でかい教室みたいな部屋だった。正面はひらけていて、突き当りが舞台のように一段高く、両側に背の高い燭台が左右対称に置かれている。そしてその舞台までまっすぐに続く道の左右に、長く質素な机とベンチが何列も並んでいた。

天井が高い。上には何か装飾が施されているようだが、そこまで蠟燭の明かりは届かなかった。女の子はいっしょうけんめい走って奥のドアに辿り着き、

「こっちょ」とアルフたちを促した。

ドアの向こうは短い廊下になっており、女の子はすぐ左の部屋に入った。

あの舞台のようなところの真裏だな、とストライクは思った。その部屋は実に生活感あふれるこじんまりとした部屋だった。でもその部屋の壁には大きなタペストリーがかけられ、それもまた薄緑色に発光していた。六芒星が円に囲まれ、さらにそれを見たこともない文字が複雑に絡んで取り巻いている。女の子はその光を頼りに今度は自分で明かりを付けた。

部屋に手作りらしい小さな暖炉があって、そこにも火を入れる。

「さむい、ね。牧師さま、どこに、いっちゃったのかな」

チップが勝手にそこにあったソファに座ると、女の子はよちよちとその横に腰を下ろし、チップの尻尾に埋もれた。

「あったかい」

チップも全く気にしない様子でソファにころりと転がった。すぐ

に眠ってしまいそうな勢いだ。ハロウはストライクを、近くのふかふかとしたクッションが置いてあるいすに、こわれものみたいにそつと下ろした。

「すまねえ」

「牧師さまとやらは留守かあ」

「そうみたい。どうしたのかしら」

「アルフ、お前明日も仕事だろ。それに」

「それに？」

チップが伸びをしながら言ったので、まるで寝言のように聞こえた。

「キャリアとかほつたらかしはまずいんじゃない？さすがに。」

「そつえばそうかもね」

「まあ、お前は帰れよ。牧師さんが来たら『緑の頭の変なヤツがこのお嬢さんをひき殺そうとしたので保護しました』ってちゃんと云つておくよ」

「お前はどうするんだよ？あとストライクもハロウもどうする？戻るんなら乗せていくけどまずいかね？」

ハロウは少しだけ首をかしげた。

「だめ。俺は一人でなんとかするから行けよ」

ストライクが言つとアルフとチップが二人そろってハナで笑った。

「できるもんならやつてみな」

「う・・・」

「まあ、俺は拾ってきた責任者だから残るよ」チップがべろりと右手をなめながら言った。

「アルフはもう行きな。ルーとスウにヨロシク言つといて」

「まあそつするわ。何かあったら電話しな。車で来られる範囲なら来てやるよ」

そう言つて、アルフはアルフの名前と電話番号の入った名刺を一人に一枚ずつ配った。

「名刺なんかもらったの初めてだ」とストライクが言つと



「5枚くらいやるよ」とアルフが言った。  
そして本当にあと5枚くれた。

(4)

足は熱を持つているようだった。

化膿したら面倒だな、とストライクは思いながら軽く服の上から傷口にふれた。熱い。自分の手がとても冷たい。

「この部屋寒いな」

ストライクが言うと、チップがめんどくさそうに目をあけて、

「そうか?」と言った。「お前は猫だからわかんねーだろうけどさ」  
マントを羽織って丸まっていても寒気は一向に収まらない。ハロウはコートを脱いで箱をいじくりまわしていた。

「ハロウ、寒くねーの?」

暖炉は確かにちゃんと燃えて、部屋は暖まりにくいほど広くはない。むしろ狭い部屋に、二人掛けのソファとロッキングチェアと背もたれのない低いすと小さなテーブルがぎゅうぎゅうにつまっているという格好だ。ハロウがストライクが体を預けているロッキングチェアに近づいてきて、ふとストライクの額に手を当てた。

スウさんもこんなことをしてくれたな、と、少しストライクは目を細めた。今回は残念なことに相手がハロウだが。

「ストライクさん、熱があるんじゃないですか?」

どうやら面倒なことになったみたいだ。

ハロウはストライクの返事を待たずに、チップと女の子にソファを開けてもらい、ストライクに肩を貸して寝かせると、毛布とストライクのマントと自分のコートを上にかけた。

「おにいさん、病気なの?」

女の子が心配そうに覗き込んできた。

「そんな大した事じゃねえよ。大げさだ」

とは言うものの、寒い。

「水分を取った方がいいかもしれない。何か頂けますか？」

ハロウが女の子に言うつと、女の子は「こっちにきて」と言つてハロウをどこかに連れて行つた。

チップまで寄つてきて「上に寝てやろうか」と言つた。

「いらない」

さすがに笑つてしまふ。でもチップはすごく真剣そうだった。下水道を歩かせた責任を感じているのかもしれない。

「あとで包帯替えてやるよ」

「自分でやるよ。それに包帯の替えなんて持つてきてないだろ」

チップのしつぽが力なく床に落ちた。なんだかチップがかわいそうになった。ただの猫みたいだ。思わず頭に手を伸ばすと、チップは黙つて撫でられてくれた。やがてハロウが白いカップを持つて女の子と戻つてきた。

「コップに中身は入つたままなんだろうな？」

チップが言うつとハロウは

「おかげさまで」と言つて、チップに見えるようにそつとお盆を下に下ろした。中身は紅茶だった。たつぷり入っている。

ストライクがちよつと体を起こすと、ハロウはその熱いカップを手元まで持つてきてくれた。

体にじんと温かいものが入つてきた。ハロウは背もたれのないいすをソファの脇まで引きずつてきて腰を下ろし、また箱をいじくりだした。

「痛いとか、辛いとか、何か欲しいものがあつたら言つて下さい」

おぼつちやまのくせにずいぶん気を回すじゃないか、とストライクは少し感心した。

その時、廊下を誰かが走つてくる音がした。

「ジョー？」

目を向けると、えらく綺麗な人間が息を弾ませて部屋に走りこんできた。ストライクと同じ黒い髪だが、背中まであるようだ。なん

というか輝きが違う。色が白くて目も黒く、金糸で縁取りされた、重そうな濃い紫色の法衣が雪のしずくできらきらしている。まるでつくりものの人形みたいに綺麗だ。

「牧師さま！」

小さな女の子がててと走って行ってその足元にしがみついた。

「ジョー、心配したのですよ。どこに行っていたのですか」

「街に、いったの。そしたら、日が暮れちゃったの」

「そちらの皆さんは？」

「あたしを、送ってくれたの」

どうやらこれが女の子の言っていた「牧師さま」らしい。頭のとっぺんがハゲたおっさんを想像していたのでかなり驚いた。

「そうでしたか。どうもありがとうございます。私はイグナシオ。この教会で神にお仕えしているものです。ジョーがお世話になりました」

そしてにつこりと笑った。まるで彫刻だ。絵だ。

熱が高くて冷静に見えてねえのかも

「そちらの方は具合が悪いようですが？」

牧師はストライクに近づいて屈みこむと、ストライクの頬にそつと触れた。

髪がさらさらとストライクのあごをくすぐっていく。

「熱がおありのようですね」

間近で見てもやはり綺麗だった。ぜんぜん見間違いない。むしろ肌のきめ細かさだとか

まつげの長さだとかまで見えた。世の中にはこんなのがいるのかよ。

チップは、牧師とハロウとストライクを順番に見て、

「同じ人間とは思えない」

とつぶやいた。

(5)

イグナシオは、ストライクの具合がよくないと見て、すぐに女の子(ジョーという子だったらしい)と一緒にベッドを作りに行ってしまった。

「昔はかなり大規模な教会で、牧師もたくさんおりましたので、部屋はたくさんあるのです」

ハロウにはなんだか甘える気もなかったというか、箱を手に入れたからその先のことを全く考えていなかったで、不思議な気持ちでした。そもそもこの箱が開かないなんて思っていなかった。確かにヒントはあいまいだったけど、きっとその箱を目の前にすれば、なんとなくわかるんじゃないかと思っていたのだ。

ぜんぜんわからなかった。

僕はきみと一緒にいて一体何を聞いて何を見ていたんだろう。

ストライクがハロウの横でぼんやりとしていた。

「眠いですか？」

「だるい」

何かお話でもしましうかと言うと、ストライクははははと笑った。「どいつもこいつも何考えてんだよ」

でもそう言いながらもストライクの前髪は汗で湿り、顔は赤くて苦しそうだった。

辛そう。

ハロウはストライクの顔をきちんとはじめて見た。三日間も一緒にいたのになんだか全然わからなかった。ずっと夢の中にいる。

ストライクは熱のせいかもしれないけどえらく幼く見えた。

もしかして17, 8くらいかもしれない。それでもしっかりしてる。僕なんかよりずっとしっかりしてる。

「まだ寒いですか？」

ストライクはちよつとだけ頭を横に振った。

「頭痛くありませんか？」

「だいじょうぶ」

あの子もよく熱を出していた。

最初の頃は熱が出たからと言われると、今日のお見舞いはまた今度、ということになったけど、だんだん熱が出ても、ちよつと具合が悪くても点滴の管がついていても、僕にそのままお見舞いを許してくれるようになった。

「なあ」

ストライクが真つ黒な目でハロウを見上げた。

「なんでそんな親切なの？」

「親切かな」

僕は親切じゃないよ。

「親切なんでしょうか」

チップはロッキング・チェアの上で丸くなっていた。寝ているのかどうかはわからない。

「なんかいろいろしてくれるだろ。紅茶とか。寝かしてくれたり」  
箱を手にとってスイッチを押してみる。「パスワードをどうぞ」  
女の声が響く。

やっぱりわからない。

何も思いつかないまま赤い光がもうおしまいだと言う。

「半年前まで、病人の女の子のところによく行ってたから」

もう何もかもおしまいです。あなたは何一つわかっていない。

「それだけです。慣れてるだけ」

「最近は行ってないのか？」

「もう行きません」

はやくイグナシオとジョーが帰ってきてくれればいいのに

「どうして？」

どうして来てくれなかったの、ハロウ・ストーム

「……………どうしても」

ハロウがストライクから目をそらすと、ストライクはまずいことを言っただけだと思っただけでなく、「ごめん」と言っただけで背を向けた。

暖炉の薪がはぜる音と、雪が屋根から落ちる軽い音だけが、暫くその狭い部屋の空気を震わせていた。

こちらこそ謝らなければいけない。

僕はこんなところで箱を開けることもできず何をしているんだろう。こんなちゃんとした人たちにいろんなことをやらせて。

そしてドアが場違いに朗らかに開き、天使のような笑顔でイグナシオとジョーが戻ってきて

「ベッドの用意ができましたよ」と言った。

ハロウがストライクに手を伸ばすと、ストライクはばつが悪そうにその手を取った。

「ありがとう」

ハロウが「ありがとう」と返すと、ストライクはとても不思議そうな顔をした。

(6)

ストライクが目を開くと、辺りには誰もおらず、ただ質素な木の枠の窓から光がさんと降り注いでいた。ぼたぼたと氷が溶けて流れる音が聞こえる。のどがとても渴いていた。

窓と同じように質素なベッド（少しほこりっぽい）から降りてみる。頭がくらくらしたが、なんとか壁に手を付いて立つと、今度は右の足がぎくりと痛んだ。やれやれ。

部屋は昨日通された暖炉の部屋のもう半分くらいの大きさで、小綺麗な牢屋みだった。檻が付いてないだけだ。

壁を伝って廊下に出たら、牧師のイグナシオにばったり出くわして、そのままベッドに連れ戻されてしまったので、仕方なくもう一度寝ることにした。

暫くするとジョーが、コップに一杯の水と着替えを持ってきてくれて、なんとストライクの服を（果敢にも）脱がしにかかったので、さすがにチップかハロウに頼むからと押し止めた。

やれやれ。

今度はチップがやってきて熱いタオルをくれた。

体を拭き終わった頃にハロウがやって来て、足の傷にわけのわからないなんか青緑色の薬を塗って包帯を巻きなおしてくれた。

ハロウが出て行ったらイグナシオがオートミールを持ってやって来た。

次から次へとまるでパレードだ。

「今何時？」

まだ熱いオートミールをもぐもぐやりながら聞くと、イグナシオは「飲み込んでからになさい」と牧師くさいことを言った。牧師だけど。

ストライクが渡された着替えは、いかにも牧師が着ていそうな紺色のローブだった。イグナシオがまるで岩窟の聖母みたいな優しい顔をして

「よくお似合いですよ」と言った。

やれやれ。

「まだ熱があまりのようです。治るまでここでごゆっくりなさってください。部屋は余っていますし、ジョーも私も、このようなところで退屈しておりましたので」

確かにまだ熱はあるしかった。

こんな部屋に一人で閉じ込められていたら、退屈で死んでしまうと思っていたが、いざイグナシオがオートミールの空になったボウ

ルを持って部屋を出てしまうと、何も考えられなくなつてすぐにまた眠ってしまった。まだ日があるうちにもう一度起こされて水を飲まされ、粥か何かを食べさせられた気がする。でもだれがそうしてくれたんだろう？イグナシオだったようでもあるし、ハロウだったようにも思えた。誰かの手が額にそつと触れていった。冷たい乾いた手だった。夜になるともつと熱が上がつてうまく眠ることもできなくなった。誰かが明かりのついたランプを持って部屋に入ってきた。苦しくてふつと浮き上がるみたいに目が覚め、何かに引きずり込まれるみたいにまた眠った。誰かが顔の汗を拭ってくれた。起きるたびに。

明け方、それがハロウだとわかった。

「ハロウ？」

ハロウはとても驚いたようで、手に持っていた箱をからからと取り落とした。顔色がもう青白くて（明け方の頼りない光のせいかもしれない）、ハロウのほうが病人みたいだった。

まだ辺りがやっと薄明るくなって来たというくらいだったが、ランプの明かりは消えていた。

「おはよう、ストライク」

「おはよう・・・」

「何か飲みますか。イグナシオもジョーも寝ているので、お湯を沸かしたりはできないけど」

水でいいよ、と言うと、ハロウは水差しからコップに水をついで渡してくれた。冷たい水が気持ちよかった。

「チップは？」

「彼は夜も昼も関係ないみたいで、2、3時間前に起きて廃墟を見に行きました」

猫だからなあ。

でもハロウはチップと違って夜行性じゃないはずなので、寝てい



ないのは気の毒だった。

「寝てないだろう」

ハロウに言うと、ハロウはとてもそっけなく「気にしないで下さい」と言った。

「僕には何もできませんから」

「でもさ」

俺は助かったよ、とストライクが言っていると、ハロウは窓を少しだけ開けて空気を入れた。

空気は新しく、冷たくてとても攻撃的だった。風の音がひょうと鳴って、ハロウは窓を閉めた。

「僕は以前やり損なったことを今やってみただけなんです」

ぜんぜんあなたのためにやったのではないのです、ごめんなさいとハロウは続けた。

やっぱりハロウはとても変なやつだ、とストライクはつくづく思った。

まだ東の空から太陽の気配がなくて、おまけに曇っていたので、窓際のハロウはモノクロームの写真のように見えた。

(7)

天井には予想通り豪華な細工がなされていた。天使や聖者の白い彫刻がぐるりと礼拝堂を見下ろし、そのさらに上には創世のものがたりが遠く描かれている。

「すごい」

ストライクは漸くひとりでも歩くのには困らなくなった足で礼拝堂を一周した。

「この教会は第4次大戦のすぐ後に建てられたものです。コロニーから人が絶えてもこの教会にだけは絶えず牧師が送られ、ずっと守ってきました」

「築500年ということですか」

ハロウは礼拝堂の中央に立って天井を見ていた。イグナシオが長いベンチの向こうから「そのとおりです」と頷いた。

ストライクとハロウとチップは、結局あれから一週間、ストライクの熱がすっかり引いてしまうまでずっとこの教会にいた。なにしろチップはともかくあとの二人には行くところがなかったのだ。

「でもどうしてそんな無駄なことをするんだ？無駄って言うか・・・だって誰も礼拝にこないだろ」

ストライクが説明しているイグナシオを振り向くと、それでもイグナシオはやさしく微笑んだ。

「そう。もうここに礼拝にいらっしゃる方はおられません。でもここには『聖なる枢』が安置されているので、私たちは神のしもべとしてそれを永遠に管理し、守らなければならないのです」

「せいなるひつぎ？」

「ストライクさん、この教会は『ミステリオン』と呼ばれているのです。その意味は」

イグナシオが長いロープのすそを優雅に滑らせながら、まだ午前のやわらかい日差しの中に収まった。

「神の恵みを人が手にし身に受けるということです。『聖なる枢』はその『人が手にした神の恵み』そのものであると伝えられています」

何言っただかぜんぜんわからないけど、イグナシオはまるでその天井から覗いている聖者の彫刻がひとつ降りてきたみたいだった。「だからこの教会はとくべつな教会なのです。礼拝に訪れる方がどなたもいらっしゃらなくても、たとえば私が神のみもとに召されても、また次のしもべがこの教会を守るでしょう。『聖なる枢』をご覧くださいますか？」

「へ？」

「こちらへどうぞ」

イグナシオは、舞台のように一段高くなっている祭壇の燭台よりもさらに奥に二人を手で招いた。

初めて来た日に行き止まりの壁だと思っていたそこは白いカーテンで、3重のカーテンをぐぐり抜けると、墓所のような狭い、天井がアーチ型をした部屋があり、その真ん中の台の上に、ちょうどハロウのトランクと同じくらいの、何か金属でできた箱が置かれていた。

(8)

箱はのっぺりとして、ただの金属のかたまりに見えた。よく見ると、薄い金属でまる一周封印されていることがわかった。

「これが？ せいなるひつぎ？」

「そうです」

「何か入っているんですか？」

「神の恵みが入っていると伝えられています。その箱を開けば海が割れ、罪びとを焼き、天への階段が姿を現すそうです」

ストライクが恐る恐る触れてみても、それは本当にただのつるりとした箱だった。ただ、金属だと思っていたら何かもう少し違う。手に吸い付いてくるような感じがする。

「誰か開けてみた？」

イグナシオは黙って首を横に振った。

「それを開けることは禁じられています。それは神の力を疑う行いだからです。この聖なる枢についての記録は、この教会の建立と同時に始まり、ずっとここにあります。その来歴は伝えられています」

「ふうん・・・」

ストライクがもう少し詳しく見ようと手を伸ばしたとき、教会の扉が開いて誰かが入ってきた気配がした。

3人で礼拝堂に戻ると、見慣れた緑の頭と、その横に黒いかちつとした上着と、計ったみたいにぴたりと膝の丈の高さ（計ったんだろうけど）のタイトスカートの女性がいた。

女性はしつとりとした上品なこげ茶色の髪で、服に合わせて顔を作ったんじゃないかと思うくらいきりつとした顔をしていた。

「アルフー！」

チップがジョーと一緒に駆け込んできた。

アルフはハロウに向かって「ぱん」と両手を合わせると、「ごめん！」と言った。

ハロウの方は糊付けされたみたいに固まっていた。もういちど洗濯したらいいかもしれない。

「お久しぶりね、ハロウ・ストーム」

女性はこつこつとハイヒールの音を響かせてハロウに近寄り、上から下まで眺め回した。

「あなた自宅の窓をぶち割ってどこに消えたのかと思っていたのよ。隣のカフェに追いかけたのに、もういなくなってるし、一体何やってるの？」

「ウオラ」

ハロウはやつと自分を取り戻したようだった。

「とりあえず、今はこの・・・教会にお世話になっているので、あまり騒ぎ立てないでほしい。僕がお願いできる立場でないことはわかっているのだけど、たくさんの人にご迷惑がかかるのは一般的によくはないと思う」

「あなたいまさら何を言っているのよ」

ウオラという女性はよく見れば割と美人だったのだが、言い方に非常にとげがあるので、ハロウが取って食われそうに見えた。

「あなたがカフェにいるって連絡を受けてから、会社のカメラマンと車を借りて雪の中飛ばしてきたのにもういない！そもそもあなたは半年前から音信不通！今回だってキャリエッタ・スワンクに何回電話したと思ってるの。あなたが勝手をしているおかげでどれだけ

巻き込まれていると思っっているのよ」

ハロウは両手で顔を覆ってがっくりとベンチに腰を下ろした。イグナシオは所在なげに様子を見守り、チップはそ知らぬ顔をして礼拝堂の隅で立ち聞きしていて、ジヨーはイグナシオの足元で小さくなっている。アルフは開けっ放しの礼拝堂の扉に身を隠している。隠れてないけど。

「あなたのお父様にも連絡したわよ。お父様の代理人が『無関係なのでコメントは控えさせていただきます』としか言わなかったわ。勘当されたって聞いたけど本当なのね？」

「……本当ですよ。父と僕はもう関係ありません。僕はオルフエリウス家の次男ではなく、ただのハロウ・ストームです」  
ウオラはさらさらと真つ赤な手帳に何かを書き付けると、それをぱたんと閉じ、「そう！」と言った。

「もう一つ聞きたいことがあるのよハロウ・ストーム。あなた箱を知らないかしら？」

ハロウは少しだけ顔を上げてウオラ・デイモンを睨みつけた。

「知りませんよ」

そこはこのお坊ちゃまでも嘘をつくんだ。と、ストライクはなんとなく感心した。

(9)

さらにウオラ・デイモンは、顔を背けたまま石みたいに動かなくなってしまったハロウに、

ハロウの母親の女優のなんとかか（とても長くて発音しにくい名前だったのでストライクにはさっぱり覚えられなかった）にも電話してみたが、あなたなんて知らないの一点張りだったわよ、と言いつけてアルフをドアの陰から引きずり出し、かかとの音も高らかに帰って行った。ハロウは彼女が帰ってしまったあととぴくりとも動かず、頭を抱えたままベンチに固定されていたので、ストライクはそのまま教会のあちこちをひとりで見回った。

教会はかつてかなり大規模なものだったというのがうそみたいに、ほこりまみれで蜘蛛の巣だらけで半分廃墟みたいになっていたが、そのほこりをちよつとはたいてみると、見事な細工ものの燭台やお祈りに使ったらしい杯やらどうやって作ったんだかわからないような複雑な色味のガラスの器やらがごろごろ転がっていた。

チップはジョーとかなり仲良くなって、二人で教会の裏にある畑で、冬でも取れる葉っぱの大きな野菜を取りに行つてきやあきやあやっている。結局ジョーはなんの獣人なのかまだわからない。

一周してもとの礼拝堂に戻ると、ハロウはまだ固まっついていて、イグナシオが正面に腰掛けてハロウを見守っていた。

どんな気持ちなんだろうな。

ストライクはハロウの後姿を見て少し同情した。

勘当されたつてどういう事なんだろうか。

親に知らないつて言われるのはどんな気持ちなんだろうか。

ストライクは親のことなんか覚えてなかったけど、それでもずっと一緒にいる兄弟がいた。

こいつ次男で言うけど兄貴の話はぜんぜん出てこない。お金持ちで家柄とやらもよろしくて

世間知らずでオシアワセに見えたとしても、こいつはきつつい美人に追い掛け回されて、帰る場所もなくここでこうして頭を抱えている。

俺は帰る場所なんかなくなつて困らない。

俺は自分が根無し草みたいに、野良犬みたいにどこでどうなつた

って仕方ねえと思って生きていて、たまに食えないことも眠れないこともあったってどうにかしていけるけど、こいつはどうするのかな。

どっちが不幸せなんだろう。よくわからない。

イグナシオは静かに立ち上がってストライクを手招きし、奥の部屋に入った。

「そつとしておきましょう」

暖炉の部屋にも陽光がたっぷり降り注いで、そこにだけ春が来たみたいに暖かった。ストライクはロッキングチェアに座って、ハロウがまだいるであろう壁の向こうに目を向けた。

「あいつもなんだか難しいことになってるみたいだね」

ストライクが言くと、イグナシオはソファに腰を下ろして頷いた。「ハロウさんは善き人だと思います。でも何かからお逃げになつているようですね。向き合われた方がよろしいでしょう」

「でもさ、それはハロウのせいなのかな。俺ならあんな風にどこまでも赤の他人がケツを追いかけてきたら逃げるぜ、あんなのとも向き合わなくちゃいけないのか」

イグナシオは暫くのあいだ目をつぶって何か考えていたが、やがて蝶が羽の具合を確かめるみたいにゆっくりとその目を開いて、ストライクを真正面から見つめた。

「ハロウさんが逃げているのはもつとほかのものからだと思います。そしてそれはたぶん」

次の言葉を待ったが、イグナシオはふつとストライクから視線を外し、思いついたように話を変えた。

「お昼になりますから、お昼ご飯の支度をしましょう。手伝っていただけますか」

でもストライクの耳にはイグナシオの声が聞こえたような気がした。

あなたもね。

(10)

ひさしぶりのような気がした。

真っ暗な中を歩く。そつと。

俺は存在なんかしていない。ただの暗闇の一部。

夜の冷たい空気と、俺は同じ温度。

目はすっかり闇に慣れていた。

窓から月と蓄光体の薄緑色の光とが、教会の中のをぼんやりと形作っている。

不用意に左の足に体重を掛けると、やはりまだぎくりと痛んだ。でも走れないほどではない。たぶん。

ハロウはあの後やっとネジを巻かれたブリキの兵隊みたいにぎくしゃくと立ちあがり、

「長くお世話になりました。僕はもう行きます」と突然言った。

イグナシオはそれでも「今夜くらいは」と言ってハロウをなだめ、二人で何か暫く話していた。

ストライクはそれを見て、ああ、俺もそろそろ行かなくちゃと思った。

矢がここまで飛んでくることはないかもしれない。だってここは、はるか昔に投げ捨てられて誰も住んでないと思われている廃墟なのだ。ジョーを拾わなかったら、こんなところに教会があつてしかも



人が住めるだなんてだれだって思わなかったろう。だれも俺がここに  
にいることなんか知らない。でもだからっていつまでここにいれば  
いいんだ。こんな不似合いな場所はない。それに俺はもっと違ふと  
ころへ逃げなくちゃいけない。

もつと遠くへ。もつと、俺のあしあとが見えるようなところへ。

礼拝堂にたどり着くと何かが息を殺している気配があつた。気配  
を消し、足音を立てずに歩くストライクを、何かが同じように息を  
つめて見ている。

あまりの威圧感にストライクが思い切つて天井を仰ぐと、天井か  
らはおびただしい視線が降り注いでいた。

「・・・・・・・・！」

月の光が、外に続く大きな扉の上の、丸い大きな窓からくつきり  
と礼拝堂の床を照らしていた。その光は灰色で、高い天井にさらに  
弱く不機嫌に照り返し、闇によく慣れたストライクの目には、そん  
な死んだ光の中でも、天使や聖者の群れが奇妙な微笑をたたえて自  
分を見つめているのがわかつた。

どん　と心臓が鳴つた。

ちがう。そんなじゃない。こいつらはただの彫像だ。昼間見た  
じゃないか。でも

ぞつとしてドアに走り夢中で飛び出すと

今度は頭の上から何かがどんと背中に乗つた。

「ぎゃ」

「・・・・・・・・ストライクじゃん・・・何やってんの？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ストライクが、思わず顔を庇つた腕を下げると、目の前に緑色の

大きな目が見えた。お前こそこんなとこで何やってんだよチップ・

驚きすぎたので暫く声を出すことができなかった。ほんの一時  
前まで、チップは確かに暖炉の部屋のロッキングチェアの上に丸  
まって気持ちよさそうに眠っていたくせに、本当に猫なんて信用でき  
たものではない。

一瞬今すぐにこの猫の手を振り切って逃げるかと思ったが、右足  
のことで、猫系獣人の敏捷さを考えてみたらばかしくなった。  
逃げられるわけがないんだ。

開けっぱなしになった扉が、風のない夜の空気の中で、白く浮き  
上がって見える。

「どうしました」

そして人影もまた、冬の月の光に白く浮き上がってこちらに近づ  
いてきた。

リンネルのローブを着たイグナシオだった。

( 1 1 )

「よん、ご。」

ストライクの腰に付いていた小物入れの中からは、その入れ物の  
サイズからでは考えられないくらいさまざなものが出てきた。

金細工の望遠鏡。銀細工の燭台。宗教的な模様が彫り抜いてある  
首飾り、遠い国で作られたのが一目でわかる鮮やかな杯。指輪。溶  
けて消えてしまっような硝子の小瓶。

「だからゆるいってんだよ」

チップが、全部袋の中身を引っ張り出してしまってから吐き捨て  
るように言った。

「お前イグナシオがどんなにお前に親切だったか忘れたのかよ？どれくらいここで世話になったのかわからないのか？それなのにこんなことするのかよ」

最低だよ。とチップは、ストライクがふてぶてしく座っているベソンの足を蹴っ飛ばした。

うぜえ。

なんでチップに怒られなきゃあいけないんだよ。うるせえ猫だな。お前からは何も盗ってないじゃないか。

イグナシオはストライクの正面に腰を掛けて、じっとストライクの目を見ていた。

ランプの光を左側から受けてイグナシオの表情は読み取れなかった。

ただ黙ってチップの声を聞き、ストライクの顔を見ているようだった。

「お前、ルーやスウたちからまでなんか持つて行っていないだろうな？ゆるさないぞ」

ストライクはフンとハナで笑った。「そんなヒマはねーよ」

大体めばしいもんがなかったじゃねえかと言いつつ終わるか終わらないかのうちに、ざっくりとチップの爪がストライクの頬を切り裂いた。  
「・・・・・・・・」

下水道の中でやられた猫パンチなんてかわいいもんだ。

綺麗にぱっくりと頬は割け、ぱたぱたと血のしずくが長い机に零れ落ちた。イグナシオがさっと立ち上がってどこかに行ってしまった。チップの毛は逆立ってしっぽが倍くらいに太くなっている。

なんでだからこいつが怒るんだよ

頬に手をやると手が一瞬で真っ赤になった。

「お前みたいなやつは最低だよ」

チップがもう一度言った。

チップの話を聞きたくなくて上を見ると、やはり天使たちがストライクのことを見ていた。やっぱりただの彫刻だ。なんでさっきは

びびっちまったんだろう。あんなに。

やがてイグナシオが戻ってきて、何も言わずにストライクの頬を消毒し、ガーゼをあてて絆創膏をはった。

「い……」

「痛かったですか。ごめんなさい」

最後に冷たく搾った布でそっと、ストライクの血まみれになった顔と手を拭いてくれた。

「……そんなやつ、放り出しちまえばいいんだ」

チップがイグナシオにつぶやくと、イグナシオはストライクの正面に座りなおし、顔だけチップに向けて言った。

「こちらのお品物は、私がストライクさんに差し上げたものです。ですから、いいんですよ。チップさん」

チップはそれを聞くとぎゅっと眉間にしわをよせ耳を伏せた。

「あんななあ」

そしてもう一度ベンチの足を蹴った。

「あんなそれでいいのか？こいつがやったのは悪いことなんだ。そんな風にあんなが許しちまってどうなるっていうんだよ」

そうですね、とイグナシオは応えた。

「でも責めてもどうにもならないと思いませんか」

「許すのと同じように、責めることにも意味がないのなら、私は彼のこの罪を一つなかったことにしたい」

ストライクはイグナシオが自分の顔を見ているのがわかっていただけでイグナシオの顔を見ることがどうしてもできなかった。

ランプの明かりが左の壁にイグナシオと自分の影を作り、たまに芯が燃えるじりっという音にあわせて、ほんの少しだけ揺れるのを見ていた。目の端に、イグナシオの白いあごと軽く組まれた手と口ーブ、そしてローブに包まれた右の肩が少し映っていた。

「……あんながそれでいいってんならいいけどさ。」

言っておくけどそいつそれが初めてじゃないからな」  
チップはしつぽを一度だけ大きく振ると、奥の部屋に足音も立てず行ってしまった。

(12)

「お休みになりますか？」

イグナシオの声はいつもと同じだった。それどころか、普段より優しいようにさえ感じられた。なんでそんなに俺に気を使うんだよ。  
「何が悪いんだ」

イグナシオが首をかしげたのが視線を動かさなくてもわかった。

「あるところから取って何が悪いんだよ」

どうして俺はこんなことを言っているんだろう。

「なくなっただってあんたは困らないだろう。なんだってそうだ。余  
つてるところから盗って生きて、その何が悪いんだ」

どうせ次の町でもその次の町でも誰かから盗んで生きていくんだよ。

これまでだつてずっとそうしてきたんだよ。ずっとずっとだ。

「・・・・・・・・」

まるで盗み見るみたいに横目でイグナシオを見ると、イグナシオは綺麗な顔を曇らせて、ほとんど泣き出しそうなとても悲しい顔をしていた。

なんでそんな顔をするんだろう。俺まで悲しくなってしまう。

天使の彫像が、聖者の彫像が自分の背中を見ていた。

人間につばさなんか生えない。あれはただのつくりものだ。

「一つくらい盗んだことが無かったことになっても変わらない。これからも俺は何か盗むし、これまでだつて数え切れないくらい盗んできた。それは無かったことにはならない。でもそれは悪いことなのかよ？裕福なヤツは財布に金を余らせてぬくぬくと暮らしてやが

るんだ。俺たちには家も親も金もないのにさ。お前らの持っているもの、一個でもあれば俺たちは生きていけるんだよ。どうして盗っちゃいけないんだ。欲しいって言ったらくれるのか？相手にもしないくせに」

なんでこんなことを言ってるんだろ。

「もう行くよ」

もうこれ以上天使や聖人たちやイグナシオに見られなくなかった。教会なんてところにこんなに長く留まるべきじゃなかったんだ。

「待ってください」

立ち上がろうとして机についた手を、イグナシオがその華奢で綺麗な見掛けによらないすごい力で掴んだ。ストライクは驚いて、思わず思い切りイグナシオの顔を見てしまった。

目の前で自分の顔を見つめているのもまた彫刻のような顔だった。でもそれは悲痛で今にも泣き出しそうだ。

「これまでもたくさん罪を犯した人が私の元を訪れました。私はどうすればいいのかわかりませんでした。でも今わかりました」

落ち着いた声だった。

「私の持ち物で、あなたが欲しいものは全部差し上げます」

「・・・・・・・・え？」

イグナシオは手の力を緩め、もう一方の手もそつとストライクの手に重ねた。その手はすっかり冷えて、とても冷たかった。

「あなたは何が欲しいですか？」

「・・・・・・・・」

イグナシオは、ストライクが持ち出そうとしたもののなかから、聖印の首飾りを取り、ストライクの首に掛けた。

「私に差し上げられるもので、あなたが欲しいもの、何もかも差し上げます。それであなたの心が満たされるのなら。あなたにそれが必要なら」

もう夜明けが近いだろう。きっとイグナシオは、あと2時間もしたら朝の支度をはじめめる。俺とハロウとチップのために。

「……イグナシオ。どうして何もかも持っているヤツと、そうでないヤツがいるんだ」

「何もかも持っているように見える人にも、必ず持っていないものがあります。何も持っていない人も、何かしら持っています。そうではないですか？あなたは何も持っていないませんか？どんなに何もかも持っている人でも、この世界のすべてのものを自分のものにすることができると思いますか？」

「不公平じゃないか。俺は俺の持っているものだけでは生きていけない」

「誰でもそうですよ。どんな人も一様に、自分の持っているものだけでは生きてはいけません。みな、誰かに自分の持っているものを差し上げ、誰かの持っているものを受け取っているのです。それがこの世界の成り立ちであり、神の定めた原則なのです。なぜ盗みが罪と言われるのかというと、何一つ自分がその身を削らずに、誰かから奪うだけ奪っているからです」

「俺には何も誰かに『差し上げ』られるものなんてない。何も持っていないやつはそれじゃあ死ぬしかないじゃないか」

「そうでしょうか、ストライクさん。私は今、あなたに一つの答えを頂いたのですよ。だから私は、あなたにすべてを差し上げようと思ったのです。私が持っているもの、どれ一つとして、あなたから頂いた答えに勝るものはなかったのです。あなたの苦しみに勝る持ち物などなかったのです」

イグナシオの手がランプの明かりに照らされてよく見えた。

その手は白く、細い指はひび割れてあかぎれができていた。イグナシオはその手でストライクが盗もうとした品々をきれいに並べなおした。

何が欲しいですか？

ストライクには手を伸ばすことができなかった。どれ一つとしてほんとうに必要な、それがあるだけで満たされるようなものなんかなかった。例えばこの教会をまるごともらったってだめだ。それだけはわかった。何が欲しかったんだろう。自分がからっぽになつたような気がした。なんだか泣き出しそうだった。苦しかった。俺には何も無い。答え？ 苦しみ？

持ち物とはそんなものも含まれるのか。

「・・・・・・・・どうしたらいい？」

「あなたが知っている、一番多くのものを持っている人を思い浮かべてみなさい。あなたはその人と同じだけ持っているのです。神は公平なのですから。誰かは喜びと愛を持っているかもしれない。誰かは貧しさと悲しみを持っているかもしれない。しかし神の目から見れば、きつとそれらは同じだけ価値のあるものなのでしょう。あなたはこれからあなたの苦しみを差し出し、安らぎを受け取ればいいと思います。あなたの悲しみや寂しさを差し出し、喜びと楽しみを受け取ればいいと思います。今私にあなたが差し出してくださいませんかように」

「最初から何もかも欲しいものだけ持つていられないのは不公平じゃないのか」

「生まれながらに喜びと安心を得た人は、成長するにしたがつてそれらを誰かに差し出さなければいけないのではないのでしょうか。あなたはこれからそれを得ることができるでしょう」

「・・・・・・・・」

「今日はもうおやすみなさい」

イグナシオは天井の天使たちと同じように柔らかく微笑んだ。



ふらふらと奥の部屋に続くドアを開けると、ハロウがそこに立っていた。

「うわ」

「・・・・・・おはよう、ストライク」

なんでみんなよってたかって俺を驚かせるんだろう。

「いつからここにいたんだよ」

ハロウは首をかしげて、いつものしれっとした顔で

「一週間くらい前からでしょうか」

と言った。

やっぱりこいつ一回死ねよ と思ったが、ストライクはなんとなく笑ってしまった。

## 箱のなかみ(1)

(1)

騒がしい声にストライクは目を覚ました。すでに昼をまわっているようだった。でも窓から見える景色は雪で、実際に何時なのかさっぱり見当がつかない。

「研究に必要なのです」

「ですから、これは動かしてはいけないものなのです。お渡しすることはできません」

珍しく厳しいイグナシオの声が聞こえた。

「もー！帰ってって、いつてるじゃない。変なひとね」

礼拝堂ではジョーまでが小さなこぶしを振り回して怒っていた。

「何・・・」

ストライクのねばけた頭でも、誰だか知らない変なのが紛れ込んでいるのがわかった。ハロウはイグナシオとジョーと変なのが言い争っているのを少し離れたところから腕を組んで眺めている。もうすっかり旅の支度を整えて、例の黒いコートにシルク・ハットだった。ストライクはとりあえずハロウの隣に言って声を掛けた。

「何あれ？」

「なんだか、先ほどあの人に来て、聖なる柩を渡してほしいとイグナシオに言っているんですよ」

改めてその誰だか知らないへんなのを見てみた。

それは一人の少年だった。少年にしか見えない。13、4か。もう少し大きい。明るい栗色の髪で、左の目にモノクルをつけている。なんだってあんな役にたたなそうなもんをつけているんだろう。左目だけ近眼なんだろうか。わかんないけど。目の色も髪の色に合わせたみたいな栗色だった。あまりにその瞳が透き通っているので非人間的なくらいだ。何よりストライクがその人物を不信に思った

のが、白衣を着ていることだった。学校じゃないんだぜ。それとも学校のお勉強で聖なる枢とやらを借りに来たんだろうか。

「どうしても貸して頂けないのですか」

「いけません。それは決まったことなのです」

「ピピッこれだから宗教などと言う愚にもつかぬ妄想に従事している輩は頭が固くて困る」

「ちょーっとお！あなた、失礼よ！牧師さまに、どうして、そんなこと言うの！」

「ピピッ何か条件があるなら提示してください。それが実現可能なものであれば検討いたします」

ストライクは隣のハロウに小さな声でこっそりと言った。

「なんかあいつ本当におかしくね？」

「条件も何もありません。できません。お引取り下さい」

「ピピッ研究のために暫く貸してくればそれでよいのだ。こんなところにそれを置いていたところで何の役にも立たない」

「ピピッそれを貸していただくことが科学の発展に繋がるのです」

イグナシオは頑として首を縦に振らない。

「駄目です。本当に駄目です。何と言われましてもお貸しすることはできません」

「帰ってちょうだいー」

「ピピッDr・A・A、交渉は不成立」

「ピピッ仕方がない。別な方法を取ろう。帰るぞP・P」

「ピピッ了解しました」

「ちょっと変わってますよね」

ハロウが応えた。

「ちょっとじゃないだろあれは。」

どこから出ているのか、発話のたびに「ピピッ」という軽い機械音が聞こえて、まるで二人で会話しているようにその少年は一人話している。

「おかしいって。気味わりいよ」

白衣の少年は扉から出ようとしてはたと足を止め、真っ直ぐにストライクを見た。

「げ」

「ピピッ複数の街で軽犯罪者リストに載っている少年を発見。Dr・A・A、どうしますか」

「ピピッデータを開示せよ」

「ピピッ了解しました。登録名はストライク。北東部ケットローグで窃盗2件、同じく北東部ヴァンダルグ不法侵入一件、中央部ネインズメント窃盗一件。ヴァンダルグまでは3人の共犯者と共に逮捕されていますが、ネインズメントでは単独です」

「ピピッ他に情報は」

「ピピッストライクとはリンクが不明ですが、隣にいる黒尽くめの青年は現在、ロメオ・オーギュスト・オルフェリウス氏の部下のナニー・マーガレット・スミスから搜索願を出されている詩人のハロウ・ストームです」

「ピピッ興味深い取り合わせだ、P・P。他に」

「ピピッ窃盗犯ストライクの右足に刺創。増殖期に入っていますが、完治していません。また、左頬に切創が見られます。こちらは痂皮を形成」

「ピピッ他に」

「ピピッご報告すべきことはありません」

「ピピッよしわかった。サンプルがほしい。確保せよ」

「ピピッ了解しました。交渉を試みます」

変態だ。

でもその変態はつかつかと歩み寄ってストライクに向かって言っ

た。

「あなたのその傷を完治させることができます。復元率は99.9%です。その代わりに体細胞組織を提供して頂きます。あなたのデメリットは0です」

「はあ？」

少年は間近で見るとハロウみたいに無表情だったが、ハロウよりもずっと無機質な感じがした。機械仕掛けみたいにストライクの腕を掴んだ。

「行きましょう」

「ピピッ待て、サンプルは多いほうがいい。そのメフィースト・フェーレスにもご同行願おう」

「ピピッ了解しました。ハロウ・ストームさん、ご同行願います」  
ハロウはちよつとだけ考えたようだった。

でもストライクにとつてはほとんど即答だった。

「わかりました。一緒にしましょう」

「まっ・・・」

「俺も行くわ」

そして天井からチップが飛び降りてきた。

なんで猫はいつも高いところにいるんだろう。

(2)

雪がぐんぐん後ろに流れて行った。

速い。すごい。アルフの車より速い。(でも彼には秘密にしておいてやるう)

「ピピッ猫系獣人とはいい収穫だな。欲を言えば、あの奇形の疑いのある獣人も連れてきたかった」

「ピピッあの獣人は齧歯目に近い骨格をしています。奇形ではない

「かもしれません」

車（じゃないけど）はどちらかというと船のような形をしていた。車輪がなく、どういう仕組みなのか、地面すれすれを浮かんで滑るように進んでいる。中は広く、小さな部屋といった方が近いくらいだ。テーブルまであって、硬いが布ばりのベンチがそれを囲んでいた。なんだかしらないけど暖かくて、やけに居心地はよかったが、さつきからずっと白衣の少年が運転席で一人で不愉快な会話をしているの、ストライクは隣に座って外を眺めているハロウの首を絞めてやりたくなっていた。

「……………とつとと逃げてりやよかったな」

「すみませんね。お付き合いいただいてしまつて」

「なんでこんな変態のところにお前は行きたかつたんだ？」

「僕には特に行くところなかったの。イグナシオさんにはだいぶお世話になりましたし、ウオラにも追いかけてしまつて、そろそろ移動しないとな、という時にどこか連れて行ってくれそうな人が来たのでつい」

つい じゃねえよこのクソぼんぼんめ。人を巻き込むのもいい加減にしる。おかげでイグナシオとジョーに満足に挨拶ができなかった。なにか彼らには言わなくちゃいけないことがあつた気がするのに。

チップは相変わらずマイペースに眠ったり起きたりしていた。景色は全くの真っ白でどこらへんを進んでいるのかわからない。

「今どのあたりなんだろうなあ」

はめ込みの窓の外を見ながらつぶやくと、チップが「教会から西に100キロつてとこかな」とあくび交じりに言った。

「わかんのか？」

「わかる」

そしてまた眠りだした。猫は便利だ。それにしてもこの車（船？）は一体どこに向かっているんだろう。教会のあつたコロニーから100キロあたりだとすると、そこもまた不毛の荒野のはずだ。薬物

汚染や重金属汚染で立ち入りが禁止されているのはどの辺りだった  
だろうか。そんなところに行こうとしているのだろうか？あるいは  
そこをこえて、もっと遠くに？

少年に聞いてみたかったが、何しろ彼はご自分の脳みそと会話中  
なので、とても話しかけづらかった。やけくそになって寝ようと思  
ったら、すでにハロウはすやすやと眠っていた。ハロウもその白衣  
のガキも変態だ、とストライクは思った。

やがて乗り物はとても大きな、灰色の門の前に止まった。門はよ  
く見ると何かの金属でできていて、幾何学的に絡まりあって施設を  
封印していた。

「ここは？」

「こりゃあ危険区域指定の旧プラント・コンプレクスじゃないか」  
チップが言うなりひらりとゆうに3メートルはある門の上に飛び  
乗り、

「ぎゃー」

前足が触れたところでボツタリと落ちてきた。しかも背中から。

「チップ！」「チップさん」

チップはぐったりと動かない。

「おいチップ！」

「ピピッ大丈夫です。侵入者を排除するため電流を流してあります  
が、数mAですので気絶でしょう」

「ピピッふん、たかが愛玩用動物の分際で、わしの城に断りもなく  
入ろうなどするからだ。馬鹿め」

ストライクがチップの体を抱き上げようとすると、ハロウがそれ  
を押しとどめ、代わりに自分のトランクをくれた。

「足がまだ辛いでしょう。僕がチップさんを」

白衣の少年はそれに目もくれずにカードをリーダーに通して門を  
開け、かつかつと中に入っていた。

「なんだよあいつはよ」

ストライクが遠くなっていく背中を睨んでつぶやくと、ハロウは

「とても変わった人だったようですね」と言った。

気づくのおせえよ　とストライクは思った。

(3)

長い白い廊下を抜けると、病院のような部屋がどんと開いた。だけれどやたらに広い。ものすごく広い空間がついたてのようなものに区切られ、ちらほらと太い柱が天井に向かって伸びていた。

「ピピッその猫系獣人をそちらのベッドに置いてください」

ぐちゃぐちゃに配線が絡んだ床をなんとか通り、言われたとおりハロウがチップをベッドにそつと寝かせた。少年はそれはそれで終わりというように、ストライクに向かって

「口を開けてください」と言った。

背もたれのないキャスターのついたスツールに座らせられ、仕方なくストライクが口を開くと、少年はいきなり何か銀色の柄の長い小さなスプーンのようなものをストライクの口にいれ、ぐりぐりとかき回し始めた。

「ひはい！ひよ・・・」

「痛覚神経が刺激されるはずですよ。動くとき余計な刺激が加わります」  
「・・・くう・・・」

口から出てきたスプーンの先には、ピンク色をした肉の破片のようなもの、ちょこんとかわいらしく乗っていた。

「・・・いてーよ・・・口の中に穴開けたたるお前」

「活発な細胞を採取したのです」

少年はそれを手際よくシャーレに移すと、何か薄い黄色の液体をたらし、銀色でぴかぴかのオープンミtaiなものの中にしまいこんだ。

「移植可能予定時刻まで2時間13分。少々お待ちください」



少々お待ちください、と言ったきり少年は身動きをしなっていました。

あと2時間こうしてるつもりか？

ストライクは少年の顔をじろじろと眺めてみた。  
なんだこいつは？

よく見てみると、モノクルは左のこめかみに突き刺さった針金（のようなもの）にくつついていた。どう見ても針金は皮膚にめり込んでいる。でも血は出ていない。すごくきもちわるい。

そしてこの広い部屋には他に誰の気配もない。モーターの回るよなぶうんという音がずっとし続けているだけだ。

「……ここはなんなんだよ？」

「ピピッただの検体は知る必要もないわ」

少年は視線を動かすこともなく、ただそう言い放った。

「まあ細胞だけではなくお前は役に立ちそうだ。暫くここにいてもらおうか」

「ピピッではラボの準備を開始します」

「ピピッブースは4個作っておくことだ、P・P。」

「ピピッ了解しました」

そして少年はすつくと立ち上がると、3人をその部屋に残したままどこかに行ってしまった。

「逃げるかハロウ」

ストライクが言うところハロウは「その方がいいかもしれませんね」と言った。

すごく悪い予感がする。

ストライクはとつさに側にあった（何で作られているのか）真っ白なメスを取った。

「ハロウ」

ハロウはそれを受け取ると、トランクのどこだかわからないところにスポット入れた。

「お前それとつさの時に取り出せるのか？」

「無理ですね」

文句はいろいろとあったが、とりあえず逃げることに集中することにした。チップを置き去りにするわけにいけないので、試しにしっぽを思い切り握り締めてみたら、チップは条件反射的に噛み付きながら目を覚ました。「逃げるぞ」と声を掛けると、黙って足音を立てずにベッドから飛び降りて付いてきた。

もとの廊下をひたひたと走る。廊下も長い。廊下はやけにしんとしていて、所々にあるライトが目にはまぶしい。まるで悪夢の中みたいだった。

でも廊下を半分くらい戻ったところでいきなり空中から少年が現れた。

「ひ」

「ここから出るには認証カードと生体データが必要です。戻って検査を受けてください」

「ストライク、そこに人なんかいない」

チップがとんと飛び出した。少年の胸の辺りをするりと通過する「なんだこいつ」

「この映像は3次元映像です。ここに私は存在していません。ですがこの研究所内は私の管轄下です。あなたたちの言動はすべて捕捉されています。脱走行為や破壊行為も無意味です」

知るかよ

ストライクは少年の体を通り抜けて（それはただの空気と同じ感触だった）、自分たちを飲み込んだ幾何学模様の扉に辿り着いた。

「認識してください。あなたたちが外に出るすべは現在ありません」少年はストライクの方にその場で振り向いて言った。

そしてその通りだった。鍵穴はもちろん、扉がどのようにかみ合っているのかすらわからなかった。

(4)

チップとストライクが仲良さそうに並び、狭いベッドを横に使って上半身を投げ出していた。チップはそれでも全身がベッドにかろうじて乗っている。

二人ともふてくされているのだ。

ハロウはさつきストライクが座ったスツールに座り、変な器具で口の中をほじくられながら

かなり反省していた。「いたっ・・・」

「撮取完了」

思っていたよりも融通の利かない、わけのわからないところに来てしまった。しかもストライクとチップまで巻き添えにして。

「検体1号の細胞移植が可能になるまであと1時間7分あります。どうしますか」

「検体1号・・・」

あのあと3人が仕方なく廊下を戻ると、すでに白衣の少年はもとの椅子に腰を下ろして、無表情にハロウたちを待っていたのだった。「まず、ここはどこで、あなたは誰ですか」

ハロウが試しに聞いてみた。さすがにハロウにもあまりまともの反応が返ってこなさそうだということがわかってきていた。

「南東部ニンヘレン、北緯52度西経127度、旧カンクターコンプレクスです」

「工業地帯跡地なんですね？」

「工業都市として稼動していたのは134年前までです、検体2号。その後は生物学者アレックス・アンテノワ博士の研究施設として利用されています」

「生物学者アレックス・アンテノワ博士の研究施設。この広い建物が全部ですか？」

「はい」

ストライクをちらりと見ると半分寝そうな顔をしていた。

「この建物のことはわかりました。（わかってないけど。）ではあなたは誰ですか？」

「私はフィリップ・プロトタイプ3062号です。アレックス・アンテノワ博士の助手をしています」

「では、アレックス・アンテノワ博士はどこにいらっしゃるんですか」

「ピピッ ここだよメフィースト・フェーレス」

フィリップ・プロトタイプ3062号の顔がぐにやりと奇妙に歪んだ。それまであどけないとすら表現できた少年の顔は、今や邪悪と言ってもいいほどに不気味に笑っていた。ハロウはその変わりように息をのんだ。

「わしがアレックス・アンテノワ。Dr・A・Aだ。よく来てくれた。せいぜい楽しむがいい」

「ピピッ」

「Dr・A・A、メンテナンスの時間です。回路をシャット・ダウンします」

「ピピッ了解。また合おう」

「ピピッシャットダウンピッ完了ピピッ」

フィリップ・プロトタイプ3062号は一瞬目を見開き、ぴたりと静止すると、2度ゆっくりと瞬きをした。

「今がDr・A・Aです。毎日15時から17時までメンテナンスを行いますので、Dr・A・Aの稼働は2時間後になります。他に何か？」

ハロウは聞きたいことがありすぎてなんだか疲れてしまった。

ストライクはすでにうつらうつらと舟をこいでいて、チップも同様だった。

「ど・・・どうして・・・Dr・A・Aのメンテナンスとは何です

か？Dr．A．Aは何かその・・・ご病気で治療をなさっているということですか？」

「文法が間違っています、検体2号。翻訳します。Dr．A．Aのメンテナンスとは病気治療のことであるか、ということでしょうか？」

「（とりあえずは）よろしいです」

「Dr．A．Aは高齢のため、一日に2時間肉体をケアする必要があります。特に感染症、腫瘍の形成を含む肉体の損壊がない場合も、代謝によって発生する老廃物の除去のため、同様の処置が必要です。それらの処置を正常に行うことを私たちは『メンテナンス』と呼んでいます」

「はあ・・・。高齢のため？失礼ですが、あなたはおいくつですか？」

「私は14年前に心肺機能の活動を開始しました」

「それはわかりやすく言うと14歳ということでしょうか？」

「一般的な生物にあてはめるとそういうことになります」

「一般的な生物に当てはめると、14歳という年齢はその・・・『メンテナンス』をしなければならぬほど高齢ではないと思うのですが」

「Dr．A．Aは2545年生まれです。183歳です。十分に高齢です。参考までに現在の人間男性の平均寿命は57．6歳です」

「でもあなたは14歳ですよね？」

「はい。Dr．A．Aは183歳です」

ハロウが頭を抱えると、フィリップ・プロトタイプ3062号は、助け舟を出すように言った。

「認識に齟齬があるようです。Dr．A．Aは一時的に私の身体機能を支配しますが、Dr．A．Aの肉体と私は別です」

「いちじてきに？あなたの身体機能を支配するというのは？」

「私の脳にはチップが埋め込まれており、そのチップでDr．A．

Aの意思を受信し反映させます。メンテナンス中にDr・A・Aの意識は睡眠状態となるため、受信機能を停止します」

「そうですか。（何がそうなんだかわからないけど）」

「だって、睡眠状態の意識を反映させたらどうなるかわかりませんかね」

フィリップ・プロトタイプ3062号はそう言うてにこつと笑った。できのいい子役がやってみせるような角度まで決まってるみたいな笑顔だった。

ハロウはそのベッドの上で寝ている猫のチップが頭の中にいるのを想像した。受信機能付きのチップよりも、そっちのほうがずっとすてきなような気がした。

(5)

このままここにいたら寝るばかりだとストライクが言って起き上がったので、フィリップ・プロトタイプ3062号が施設を案内してくれることになった。

まず自分たちがいた検査室。「主に検体の検査をするところです。精密な機械が設置されていますので暴力行為などは慎んでください」

次に通されたのは小部屋がたくさん並んだ通路だった。（ここでチップが合流した）

「こちらは研究対象の生物を入れておくコンパートメントです」

小部屋は8個ほど横一列に並んでいて、一つ一つはとても狭い。

手前の4つには病院にあるような白くシンプルなパイプベッドが一つと洗面台とトイレット（ストライクは本当に牢獄だと思った）、奥の4つは本当のただの白い部屋だった。それらの部屋の通路に面した壁はガラスばりで、その向かい側の部屋もまたガラスばりだったが、こちらは大きな一部屋になっていた。

「ここにぶちこんだ研究用の生き物を向かいのガラスの向こうから眺めるわけか？」

ストライクが吐き捨てるように言うと、フィリップ・プロトタイプ3062号は「その通りです」とまゆ一つ動かさずに応えた。

「手前の4部屋は人間と獣人用です。あなた方のコンパートメントになります」

ストライクは思い切り舌打ちした。

廊下はそこで直角に左に曲がった。

曲がりきつてすぐに右に渡り廊下が見えた。でもフィリップ・プロトタイプ3062号はその渡り廊下をまったく無視して真っ直ぐに歩いていったので、ハロウたちもそれに従った。いくらも歩かないうちにまた廊下は左に折れた。どうやらさつきまでいた広い部屋の柱の向こうあたり、おそらく中央部にぐるりと回りこんだのだろうと推測された。

「Dr．A．Aの部屋です」

フィリップ・プロトタイプ3062号は突き当たりで立ち止まるととても高い金属性の扉を見上げた。

「ピピッP．P3062。認証を開始」

「ピピッ認証完了。扉が開きます」

扉は異常にゆっくりと開いた。

まず「プールだ」とハロウは思った。

部屋の中は液体の反射光で青く光り、ゆらめいていた。たくさん太く透明なパイプが天井に向かって伸びていた。床の7割に液体が張られ、かなり深いのがわかった。パイプと同じくらい太いコードがその床をくりぬいたプールの中から伸び、壁やパイプやあらゆるところに繋がれていた。右手の奥には、黒々と山のように大小の機材が積み重なっていた。

「・・・・・・Dr．A．Aはどこに？」

ハロウが恐る恐る尋ねると、フィリップ・プロトタイプ3062号は当然のようにプールを手で示した。

「こちらがDr・A・Aです。現在はメンテナンス中ですが」

フィリップ・プロトタイプ3062号に続いて、3人がコードに足を取られないように気をつけて中に進み、プールの中を覗き込むと、そこにはまるで人間の干物のような老人が薄青い液体の中に浮かんでいた。

ハロウはもしかして悪い夢をみているのかな？とふと考え込んだが、チップがしつぽを太くして目にも止まらぬ速さで部屋を飛び出し、ストライクが「なんだこれ」と言いながら後ずさり、しかも老人が襲い掛かってくる気配もないので、ちゃんとした現実のようだなと思い直した。

水中の老人の皮膚は灰色のような黄色のような、ひどく不愉快な色をしていた。左目が半開きになっていたが、その瞳は白く濁りきって、きつともう何も見えないだろうと思われた。頭には細いコードがまるで髪の毛のように緊密に植えられ、手も足も骨と皮ばかりに細い。

「死んでる」ストライクがぼそつと言った。

「脳波も心拍数も血圧も正常です。生命活動に異常はありません」  
フィリップ・プロトタイプ3062号がストライクを否定した。

「183歳か」

ハロウは、その年齢の意味するところがどういことなのか、さつき話を聞いていてもぜんぜんわからなかった。でも今その現実が目の前にある。こういうことだ。

「本当はDr・A・Aの感覚器はすでに機能不全になっており、私の感覚を電気信号で送信し共有している状態なので、実際には脳しが必要ないのですが、前例がないので、すべての臓器を保存しています」

それがこの今ここにあるDr・A・Aの肉体に関することだと気が付くのに少し時間がかかったので、ハロウとストライクは先に行ってしまったフィリップ・プロトタイプ3062号を走って追いか



けなくてはならなかった。チップは物陰に隠れるようにして付いてきた。

次の部屋はシンプルだった。廊下の延長のようで、実際に扉もなく、通路がそのまま膨らんで部屋になったみたいだった。向こうにまた廊下が続いているのも見えた。

でも部屋の真ん中には太い柱が高い天井に向かって伸びていて、右手にまた渡り廊下が繋がっていた。やはりフィリップ・プロトタイプ3062号はさっきと同じように渡り廊下を無視した。

ハロウがフィリップ・プロトタイプ3062号を追いかけてまっすぐに部屋を突っ切ろうとした時、目の端にマネキンの腕が見えた。こんなところにマネキンが

ふつと振り向くと柱の半面が強化ガラスになっていて、中にマネキンがきれいに収まっていた。

しかもそのマネキンはフィリップ・プロトタイプ3062号にそっくりだった。

「これは・・・」

ストライクも足を止めてそれを見た。

「死体だ」

でもそれはそうだった。フィリップ・プロトタイプ3062号が何と言ったとしても、これはほんとうに死体だった。

よく見るとその柱は液体に満たされ、その体を包んでいた。Dr・A・Aの生きた肉体よりも肌は白く、柔らかそうで、瞳は今にも開きそうなくらいに穏やかに閉じられ、まるで微笑んでいるかのようにさえ見えただけでも、それはどうしても死体だった。そんなことは世間知らずのハロウにだってわかった。

そしてその死体はフィリップ・プロトタイプ3062号よりも年をとっていた。

「フィリップさん、お兄さんですか？」

「まずはじめに」

フィリップ・プロトタイプ3062号はすでに向こうの廊下に出ていてその場で立ち止まった。

「私は『フィリップ』ではありません。『フィリップ・プロトタイプ3062号』です。そのように呼んでください。もし何か別な呼称が必要な際は、『P・P』か『3062号』としてください」

フィリップ・プロトタイプ3062号 P・Pはゆつくりと柱の側にいるハロウたちを振り返った。

「次に、そのボディですが、兄ではありません」

「おやじだと言っくんじゃねーだろうな」

ストライクが、これ以上ありえないことが起きて困るといった調子で言った。なにしろパイプの中の遺体はどう見てもはたちかそこらなのだ。

「『オヤジ』が『父親』を意味する俗語という理解でよろしければ、わたしの父親でもありません。そのボディはフィリップ・オリジナルです。遺伝子的にはそれはわたし自身です」

やっぱり夢の中なのかもしれない、とハロウはもう一度思った。

それにしてもずいぶん悪趣味な夢だ。イグナシオの教会で見るような夢ではない。

じゃあ今僕はいつたいどこにいるんだろう？

僕は首吊り縄をぶら下げてみたあの部屋から、本当は一步も出ていないのかもしれないな。

## 箱のなかみ(2)

(1)

P・Pがあまりにも普通にズボンを脱がそうとしたので、ストライクは慌てて手を振り解いて椅子から転げ落ちた。

「あいな！お前・・・」

「そのままでは処置できません。脱ぐのが嫌なら着衣を切断します」  
「そうじゃなくて・・・もう・・・」

ハロウとチップは笑って検査室を出て行ってしまった。

医者と二人きりなんだと思えば恥ずかしくもなかったけど（というかそもそも人に脱がされるのが嫌だったのだけ）、あの二人が出て行ってしまふと別な方向で不安になった。

こんなガキに「処置」されて自分は無事でいられるんだろうかということだ。

さっき夢うつつに聞いていたところではこいつは14だ。14のガキに一体何ができるんだ？お医者さんごっこにお付き合いしてる場合じゃないんだよ。

「麻酔を打ちますか？」

「は？」

「これからあなたの右大腿部の刺創に、先ほどあなたから採取した活発な細胞を注入します。当然ですが痛覚神経への刺激を伴いますので、神経を麻痺、あるいは脳への信号を遮断しますか」

失敗されたら死にそうだったので（ものたえではなく）、ストライクは少しくらい痛くてもガマンすると言った。

「そうですか」とP・Pは、何か綺麗な桃色の液体が少し入った細い注射器を、逆手に構えてストライクの足、矢が刺さってからやつと傷口に薄い皮がはって、それでもまだ赤くじくじくと濡れている

直径1センチの丸いスポットに、ぶつすりと突き刺した。

「わああ」

「だから麻酔を打ちますかと言いました」

針はほとんど全部足に埋まった。

P・Pは一気にピストンを一番奥まで沈めてしまうと、左手のゆびで傷口の周りを申し訳程度に抑えながら、刺した時と同じように乱暴に注射器を引き抜いた。手には薄いゴムの手袋をはめていたが、その手袋は大人用だったので、指先の部分がまだ余っていた。14歳だって。何かわけのわからない生き物が足から生えてきたりしないだろうな。

なんだか体から何かを抜き取られたような妙な脱力感に襲われて、ストライクがぐったりと横のデスクに右ひじをつき、額を手のひらに載せると、P・Pはあらわになったストライクの左の頬から、昨日（今日の明け方）イグナシオが当ててくれた絆創膏をびりつと引き剥がした。

「ぎ」

「思ったとおり新しい傷でよかった。これから痂皮を剥がします」  
一声かけるとかなんとかなかったのか？と思ったけどもう声を出すのにもくたびれてきた。

どうせ言ったって無駄だ。

かひをはがしますってどういうことだ？

「かひ」ってな・・・い」

「動かないで下さい。器具で傷口を広げてしまう恐れがあります」  
「いでででで何!？」

「動かないで。痂皮とは出血した際に起こる、止血作用によって血小板とフィブリンが凝固し固まったものです。これです。痂皮がある状態ではデータが取れません」

「何それ！痛いって！また血出てきてるじゃん」

「かさぶたのことですよストライク、たぶんね」

ハロウとチップが頭だけ出して覗き込んでいた。

「ちょ・・・はがすなよむしろ！痛いって！」

P・Pは長い大きい先の細いピンセットのようなもので、少しずつかさぶたを剥がしていた。痛いばかりではない。冷たいピンセットの先が傷口に触れるたび不快さに怖気が立つ。

「困りましたね」

P・Pはいったん手を止め、ピンセットを銀色のそら豆みたいな形をした皿にかちゃんと放り込んだ。

「ただの刺激です。ショック症状が出るほどの刺激ではありません。そもそも我慢できると言ったのは」

「俺だよ！うるせえな！」

P・Pもうんざりしたようにデスクに左のひじをついた。

「今から局部麻酔を打ちますか？それとも一気に剥がしますか？」  
「一気にいこうぜ」

もうピンセットでつつかれるのは本気で嫌だった。でも麻酔なんか打たれたら、それこそどうなるかわかったものじゃない。二度と起きあがれなくなるかもしれない。

「わかりました」

P・Pは半透明のポリ容器を持ってくるとガーゼにたっぷりその中身を含ませた。それはただの水に見えた。かなりびちゃびちゃになったそのガーゼをストライクの頬の傷にぴたりと当てると、  
「暫くこのままにしてください」と言ってP・Pはどこかに行ってしまった。

しみるかと思ったら液体による痛みはほとんどないようだ。むしろほじくられて熱を持った傷口が休まるような気さえた。

やがて小さなへらのようなものを持ってP・Pが帰ってきた。

まさか

P・Pはスツールに戻るなりストライクの手をのけさせ、ガーゼをばかに丁寧に取った。そしてストライクの頭をデスクに押し付け

て、ゴム手袋をしたままの左手で押さえ、右手で銀色にきらきらと光るへらを傷口の最下部に当て、

なんの迷いもなく一息に、思いっきりストライクの頬をこそぎ上げた。

「あああああああああああ」

その後もなんか痛いことをされたけど、ストライクにはもう声を出す体力が残っていなかった。

(2)

何かやわらかそうで鮮やかなピンク色のゼリーが、たつぷり塗られている絆創膏を頬の傷に張られ、ストライクはとどめの一撃を喰らったみたいにくったりとしていた。

「痛かったですか？」

ハロウが聞いてみるとストライクは非常に不機嫌に

「痛いなんてもんじゃねーよやってみろってんだ」と言った。

「お前、これでひどいことになったらぶっ殺してやるからな」

そうだな、とハロウは思った。

本当に今ストライクの頬に張られていたり、足に注射されたものが危険なものだったとしたら、僕はストライクにどう謝っていいのかわからなくなる。僕の個人的な「どうなってもいい」という考えに、ストライクやチップさんを本来は巻き込んではいけないのだ。

「ピピッお前たちは自分の無能を棚に上げてP・Pに文句を言う。」

自分たちがどんなに高度な治療を施されたのか知ろうとすら思わない。向上心のない人間など虫けら以下だ。口を利くだけで脳細胞が

破壊されそうだ」

「なんだとこの」

ストライクがはねるように起き上がり、P・P（Dr・A・A）の白衣に手を伸ばし、襟を掴みあげたが、P・Pはまるで汚いものでも眺めるようにストライクの手を目をやっただけだった。

「ふん、暴力か。情報の処理速度が追いつかない、知性の劣る者は、自分の意見を瞬時に論理的に発言することができないために一種の身体言語として暴力を振るうのだ。そうやって短絡的に暴力を振るうのは、自らの知能に欠陥があると叫びながら歩いているようなものだぞ」

「あ」

ハロウが止めるまもなくストライクはP・Pを文字通りぶっ飛ばした。

「ピピッ回線を切断します。出血有り・・・検査・処置後すみやかに修復します」

「ピピッ了解した」

「ピピッシャツダウンピッ」

P・Pは左の頬をまともに殴られて椅子ごと床に転がっていた。そしてひじをついてよろよろと立ち上がると泣きながら氷嚢を頬に当てた。

「えっぐ・・・ひっく」

鼻水と鼻血と涙でP・Pはかなりかわいそうなことになっていた。ストライクのほうもうなだれて殴ってしまった右手を見ている。

どうしよう。

とりあえずストライクは大丈夫だろうと判断して、P・Pの顔を見てみた。椅子を元の位置に立て直してみたら、P・Pはすっとそれに腰を下ろした。

「何かお手伝いできることはありますか？」

P・Pは子どものように泣きじゃくりながら（子どもなんだけど）「び、びしゅっけ・・・びしゅっけつ、が見られるので・・・しょ、

処置します・・・ヒック、ひょうのう、を、持っていて、もらえ、ます、かヒック」

と言った。

ハロウが言われたとおり、氷嚢を支えると、P・Pは鼻のちよつと上あたりを、鼻血で真つ赤な手できゅつと押さえた。

「うつ・・・うええ・・・」

ハロウはそこらへんにあつた未使用らしいガーゼで涙や鼻血や鼻水を適当に拭ってやりながら思った。どうしてこんなことになっちゃってるんだろうなあ。

ストライクの隣にはチップが腰掛けていたが、ストライクは顔を腕で抱え込んでしまった。ストライクだってこんなはずじゃなかったのだ。

P・Pはやつと涙を流すのをやめて息を整え、咳払いをした。でもまだしゃっくりが止まっていなかった。ハロウが自然に背中をとんとんと叩いたら、P・Pからすごい目で睨まれた。まだ泣きべそをかいている上に、鼻をつまんだままの体勢で。

「せ、背中、や、ヒック背骨を、叩くヒック叩くというような、治療法は、根拠のないヒック迷信です。鼻出血の際は・・・」

「失礼しました。特に鼻血を止めたかったのではないのです、ただあなたが泣いていたのでつい」

ハロウはもう一度睨まれるはめになった。

「これは、涙腺から分泌、される、ただの体液、ですヒック・・・角膜や、眼球に、異常はみら、れませんので、ヒック」

「お前を殴るつもりじゃなかったんだ」

ストライクがぼつと言った。

「痛かつたら」

「・・・つ、痛覚神経、が、こんなにはげ・・・ヒック激しく刺激されるのは、ヒック実際に経験して、ヒックいなかったの・・・驚き、ました」

「怪我とかしたことなかったんですか？」



「ヒック・・・怪我・・・7歳の時に、パパの・・・Dr・A・Aの研究室で、転んで、左ひじを、9針縫いました。担当医は、ヒューバート・レノート教授・・・2582年の、ことです」

「あとは、紙で、指に、切創、軽い打撲、裂創、熱傷も・・・19歳のとき、に、実験中に、289 まで加熱したミイグレット溶液を、倒して、左大腿部に、ⅠⅠ度熱傷を」

「21歳の時、市販の、鎮痛剤を飲んで、アレルギーせ、性、ヒック、ショックを起こして、死亡、しました。でも、それらは」

「すみません、ちょっと待ってください」

「・・・どうぞ」

「あなたは誰のことを話しているんですか？」

「わたし、私です。私の記憶です」

「あなたは14歳ですよね？」

「はい。一般的に言う」と

「でもお話では19歳や21歳の記憶が出てきた上に、おしまいはお亡くなりになってしまいましたが、その・・・ちょっと合わない不是吗？」

「あわなくない、ヒックとは『整合性がないのではないか』ヒックという、理解でよろしい、でしょうか」

「よろしいです」

P・Pは鼻からちよつと手を離してみ、鼻血が出てこないのを確かめ、氷嚢をハロウの手から取って自分で当てなおした。

「私は、先ほども申し上げました、とおり、フィリップ・オリジナルの、同一固体です。フィリップ・オリジナルの、クローン体のうちの、一体です。Dr・A・Aは、自分の、息子である、フィリップ・アンテノワ、が、2596年の、5月、に、死亡してしまったことを、受けて、脳、から、記憶を、複製し、私に、移植しました。ですから、私には、フィリップ・アンテノワの、21歳までの、記憶が・・・あります」

ハロウが自分の頭のなかを必死で片付けているあいだ、P・Pは検査室の隅にある（でもかなり大きな）流し台で顔を洗い、もう一度咳払いをして呼吸を整え、ついでに髪の毛も整えた。

「ピピッ処置が完了しました。接続を再開します」

「ピピッご苦労。必要なら検体1号には拘束服を」

「ピピッ了解しました。経過を観察します」

ストライクはベッドにごろりと横になって

「病気になるそう」

と言った。

「でも病気になるときつとますます出られなくなるぜ」

チップが言った。たぶんその通りだろう。

（3）

翌朝4面真っ白な部屋で目が覚めてみると、こここのところ毎日（射られてから毎日）感じていた、足が突っ張るような感じがいきなりなくなっていた。

「お？」

ためしに立ち上がってみても全く痛みがない。むしろ巻かれている包帯がくすぐったくて邪魔なくらいだ。

「おおお？」

まさかきれいさっぱり治ってるなんて言うんじゃないだろうな？  
と思つてズボンをおろすと、片方の壁が全面さつと透明になって  
向こう側にP・Pが立っていた。

「うはっ・・・」

「大胆ですね」

夕食もそうだったが、朝食もまた分厚いクッキーみたいな何かば

さばさとした食べ物だった。それに薬臭い飲み物がつく。こんなもんで腹が膨れるもんかと思ったが、食べてみると意外なほど満腹になってしまった。

P・Pが検査室に来てくれと言うので行ってみると、まず顔の絆創膏を剥がされた。今回は絆創膏の材質のせいかな、あまり痛くなかった。

「ふむ。上皮化していますね。良好です」

P・Pの頬は腫れてはいなかったが、赤黒いあざができていた。

「色素斑がでやすい状態になっていますので、暫く保護しておきます」

「それってどういうこと？」

「紫外線によるメラニン色素の生成と沈着が起こりやすいということですよ」

それってどういうこと。

ストライクがもう一度首をかしげると、ハロウが入ってきて「そこだけ日焼けしやすいってことだと思いますよ」と言った。

「ピピッどうして粗野で低脳な、口を利く価値もない者のレヴェルに合わせて話をしてやらねばならんだ。全く時間の無駄だ」

かちんと来たが殴ったらまた痛い思いをするのはP・Pだけなんだろう。ストライクは今回はこらえることにした。なんでこのDr・A・Aとやらはたまに出てきて嫌味ばかり言うんだらう。

「ピピッ足の方を見せてください」

足を出すと、P・Pは変な形のはさみで包帯を切ってしまった。

脚が剥きだしになる。朝の感じの通り、もう傷穴は塞がって、ほんの小さな桃色の跡を残すだけになっていた。

「すげえ」

「良好ですね。こちらは衣服に保護される部位なので、もう衛生材料で覆うこともないでしょう。細胞の状態を検査したいので大腿部の皮膚片を少し取りますが、それもすぐに治癒するはずです」

「なにこれ？俺ずつとこのまんま？怪我してもすぐ治るの？」

「いえ。顔の切創に関しては、あなたの活発な細胞と、細胞の活性化を促す薬剤をまぜてドレッシングしただけです。もうそういった治癒力はありません。右大腿部の刺創に関しては、その部分だけなら2週間ほど効果は持続すると思います。もしかしたらもっと長いかもしれません」

「顔はもう普通、足もちょっとしたら普通になるってこと？」

「そうです」

ストライクはでかい流し台まで歩いて行って鏡を見てみた。昨日の明け方にチップに引き裂かれてできた傷口は、ちよつと白いただの線になっていた。

うそだろ。昨日だぜ。あんなに血が出たのに

触れてみたけど傷口は嘘でしただなんて言わなかったし舌も出さなかった。ちゃんと繋がって、やわらかい新しい皮膚がすくすくと育っていた。

「すごい」

ふらふらとスツールに戻るとP・Pは、厚めでとても柔らかい白いテープを頬の傷に張ってくれた。子どものようにとても嬉しそうに笑っていた。

だけどその笑顔は長くは続かなかった。

「ピピツさて。ところで昨日わしは調べものをしていたのだが、興味深い事実が2、3あってね。まずハロウ・ストーム。君にはとても熱心な覗き屋がついているようだ。君に関してデータを取ったところ、あらゆる項目にウオラ・デモンという若き女性記者がついて回っている。そうだね？」

「そうです」

「そして君はその記者の紹介で、ある少女の家を定期的に訪れていた。そうだね？」

「そうです」

「そして君はスキャンダルを起こしているね。その件でだ。ところ

が肝心のスキヤンドルの中身が」

「消えているはずです。公式には」

「その通りだ。オルフェリウス氏の手際はよほどよかったようだ。スキヤンドルの中身に関するあらゆる情報が消されている！大したものだ」

「知っている人には消しても消さなくても知られていることです」

「わしはそういった文型の人間がよくやるような言葉遊びが大嫌いなんだよ、ハロウ・ストーム。単刀直入に聞くがね、これは何が起こったんだね？」

ストライクがハロウを見ると、ハロウはストライクとP・Pの両方からきっかり等間隔の場所に立って、はじめて見るような、挑戦的な（としか言いようがない）顔をしていた。単にむかっているだけかもしれない。何しろこのDr・A・Aの話し方といったら、内容がたとえ自分に無関係であつてもどこことなく神経を逆なでしてくれるので、ストライクはさっきからすでにうんざりしていたのだ。P・Pのほうはずっとかわいげがあるつてものだ。何言ってるのか6割くらいわからないけど。人間は年を取ると丸くなるんじゃないかな？

「何が起こったんでしょね？」

ハロウがそう言つて口角をちよつと上げると、Dr・A・AであるところのP・Pは、眉間にしわを寄せて椅子から立ち上がり、ハロウを「生意気な小僧が」と今にも言い出しそうな顔で見上げた（実際身長差が20センチほどあつた）。

「そついつつもりならいいだろう。こちらで勝手に調べさせてもらう」

「ピピッ 接続解除」

戻ってきたP・Pは、何事もなかったかのように、ストライクの

脚からピンセットでぴつとほんの少し皮を剥ぎ取ってうきうきとシヤレに入れ、そのまた断片でプレパートを作り出した。

「ハロウ、あのじい嫌いだろっ」

ストライクが言くとハロウは

「少しね」

と言った。絶対ウソだ。

(4)

チップがぎゃあと叫んでしっぽを太くして走ってきたのはその日の午後だった。また電気ショックでも受けたのかと思ったら、そうではなかった。

「ひと、ひとひとひとがいっぱいいる」

チップの大きな緑の目は8割が真つ黒な瞳孔になり、耳がぎゅつと伏せられている。

「ひと？」

「すげえきもちわるい人がいっぱいいる」

その時検査室にはハロウとストライクしかいなかったので、二人はチップについて白い廊下を歩いていった。

「ひとがいっぱいぎゅうぎゅうにつまってる」

「なんだそれ」

昨日案内してもらえなかった渡り廊下を下り、倉庫のような扉を開けると、中は灰色でひどく寒かった。目の前はいくらか開けていたが、両側に5、6メートルにもわたって何か大きな箱のようなものが積み上げられていた。ちょうど人が一人分入るくらいの大きさで、側面のガラスが白く曇っている。

「よく見てみな。この箱の中身」

ハロウがすつと右横の箱の腹を撫でて霜を払い、中を覗き込んだ。  
「ああ。本当だ。人間ですね」

「まさかこれ全部？」

ストライクが倉庫の中を走り回ると、倉庫はまるでどこかの劇場くらいあって、何列もガラスの棺おけが連なっていた。箱の中身はあらゆる人種の人間で、みな一様に若々しかった。

「うわあ。気持ちわりい・・・」

「獣人が一人もない」

「作り物ではありませんよね」

「それらは移植用のストックです、検体2号」

突然空中にまたしてもP・Pが現れた。

「気温調整が狂ってしまいますので検査室に戻ってください」

3人が検査室に戻ると、P・Pはぼかんと空中を見つめていた。

「結構です。温度・湿度ともに戻りました」

「わかるんですか？」

「昨日も申し上げましたが、この研究所は私の管轄です。この研究所のどこで何が起こっても、情報は速やかに私に伝達されますし、どこにでも私には3次元映像を中継して警告を与えることができます」

「なんでわかん」

「私の脳には2枚のチップが入っています。一枚はDr・A・Aの意識を受信するチップであり、もう一枚は、この研究所のメインコンピュータにデータを送受信するためのチップです。その2枚目のチップによって、私は常時メインコンピュータとそこから繋がるネットワークにアクセスすることができます」

「俺には入ってないね」

チップが体をまるめながら言った。

「それによってこの研究所中の出来事はすべて私の知るところとなりますし、私とメインコンピュータにアクセスできるDr・A・Aの知るところでもあります」

「ということは？この研究所のどこかで例えばハロウと二人きりで

話をしても、P・PやDr・A・Aにはつつぬけになるってことかな？」

「そうです。多少のタイムラグはあるかもしれませんが、基本的にすべてログを取っておりますので、数時間後には確実に伝達されます。まあ全てのログを長期保存するわけではありません。ログは保護されたもの以外は1ヶ月で破棄されます」

「気持ち悪いなあ。さっきの氷漬け？のニンゲンもさあ、そういう盗み聞きもさあ、気持ち悪いよここ。なんだよ」

チップはベッドの上で後足をぎゅーっと伸ばし、もう一度くるりと体を丸めた。文句を言いながらも寝ることにしたらしい。

「先ほどの倉庫にあるのは、申し上げましたとおり移植用の人体です。この研究所ではクローンでああいうものを作り、移植できるまでに成長し、異常が見られなければ倉庫に冷凍保存します」

「ピピッお前たちはこれほどの施設がわし一人の蓄財で130年も運営できると思うのか？お前たちがさっき見たものは金なる木だ。あれは各国の金持ちのクローン体だよ。あれを保存してやっている限り、奴らは無尽蔵にわしに金を払い続けるのだ。自分の新しい臓器の保存料金としてな。他ではクローン体すら満足に作ることはできないのだからな。ハロウ・ストーム、貴様の父上はまだクローンを作っていないようだ、これからの臓器不全に備えて作ってやってもいいぞ。無論高くつくがね。ははは」

「ピピッ」

P・Pが戻ってくると、心なしか悲しそうな顔をした。

「昨日ご案内しなかった、フィリップ・オリジナルの部屋から続いている倉庫の方は、私たちの倉庫です。あの倉庫には、私と同一の個体がストックされています」

「はあ？」

「私はP・P3062号です。3062体目のクローン体です。倉庫の中には、部分的に異常があつて私のようにには覚醒状態に入れないものと、No・3063から3100までの成長途上のクローン



体が合わせて300体ほどあります」

「どうしてそんなに？その・・・どうしてなんですか？」

P・Pは目を上げてちよつと正面を見た。ストライクはやつとそのしぐさが、P・Pの左の目にあるモノクルを見つめているのだとわかった。たぶんあれにいろいろなお知らせが写るんだろう。ただ今のお時間とか。明日のお天気とか。

「Dr・A・A、メンテナンスのお時間です。回線をシャットダウンします」

「ピピッ了解。また後ほど。ああ、ストライク、面白いことが起くるよ。楽しみにしておくといい」

「は？」

「ピピッシャットダウンピッ」

「何だ今のは？」

P・Pはストライクの言葉を無視して話を続けた。

「なぜ私と同一の個体が300もストックされているかという話でしたね。長い話になると思います」

P・Pは憂鬱そうにちよつとこめかみを触り、話し始めた。

「・・・Dr・A・Aが、フィリップ・オリジナルの死に際して最も重要視したことは、記憶の引継ぎという点でした。フィリップ・オリジナルが死亡した際、Dr・A・Aは直後に遺体を研究所に運び、記憶を複製しました。なぜならDr・A・Aには、新しい健康な肉体をいくらかでももう一度生み出すことができたからです。クローンでフィリップ・オリジナルの体を複製し、記憶を移植できれば、それはフィリップ・オリジナルそのものです。しかしこれまでクローンから臓器の移植を受けて若返り、あるいは長く生きた人はいても、記憶の移植を受けたものはいませんでした。また、フィリップ・オリジナルの死はあまりにも突然だったため、移植可能なクローン体を作られていなかったのです。だからDr・A・Aは記

憶の複製をデータ化して保存した一方で、クローン体を作り、移植可能になるまで成長を待ちました。

2616年に一体目のクローンが完成し、Dr. A. Aはまず、フィリップ・オリジナルの保存してあった脳そのものを移植しました。これが一番確実な方法と思われたからです。しかし手術は失敗に終わりました。正確に言うと手術の失敗ではありません。オペレーションは完璧でした。その頃はまだDr. A. Aはクローディア・ゲルアカデミーの教授でしたので、その時に成し得る最高の助手と外科医と機材によって、奇跡とも言える脳の移植が完成しました。その時のオペレーションの様子は、今でも国立情報博物館で映像データとして閲覧できます。閲覧には医師免許が必要ですが。

しかしフィリップ・プロトタイプ1は目覚めませんでした。

なぜなら移植された時にすでに脳は死んでいたからです。脳死状態の脳を移植しても、脳は生き返ることはありませんでした。術後3ヶ月でP. P1号の延命装置は切れ、肉体の方も生命活動を停止しました。その後Dr. A. Aは、残されたフィリップ・オリジナルの記憶データをクローン体に復元することを模索しました。時を同じくしてDr. A. Aは大学を離れ、クローン技術によって莫大な資金を得て、この研究所を立ち上げ、独自に研究を進めました。P. P2号〜1200号までは脳に記憶の一部なりを移植する練習代となりました。その段階で、脳にフィリップ・オリジナルの脳が生きていく間に受けた刺激を、そのまま電気信号に変換して複製する技術が確立されました。2000番台からはそれを本格的に取り入れて、実際にフィリップ・オリジナルを複製する段階に入りました。しかしやはりプロトタイプの脳にインプットされた記憶は完全なものではありませんでした。その頃にはこの研究所は、常時10人ほどのP. Pで管理されていたはずです。また、その時期にDr. A. Aは肉体の老化による衰弱を予防するため、現在のようにDr. A. A自身が2684年に開発した、代謝を極度に抑制

するティタン溶液の中で生活するようになりました。そして27年、私がフィリップ・オリジナルの記憶の複製を完了したのを受けて、その他のP・Pたちは分解されました」

P・Pはそこで一度話を区切った。遠くから生き物みたいにワゴンがコップを載せてやって来て、忠実な犬みたいにP・Pの横にぴたりと止まった。P・Pは疲れたようにコップを手に取り一口飲んだ。

「分解？」

「処分されたということです。彼らはやはり完全な記憶を持っていなかったのです」

「私は俗に言う11歳の時に、フィリップ・オリジナルの21歳までの記憶の移植を完了しました。私の記憶は、これまでのP・Pたちの記憶が比較的不安定で、整合性が保たれなかったのに比べれば完璧でした。私は何月何日にパパとどこで何をしたのか、例えば2582年の8月2日はどこにいてどんな授業を受けたのか、友達の名前は誰だったのか、全て答えることができました。またそういった出来事による刺激の強弱も正確に引き継いでいました。脳の刺激する部位の研究が進んだことと、フィリップ・オリジナルの記憶データだけによらない、客観的なデータ・・・例えばフィリップ・オリジナルの通っていた大学の外見や友人の写真など・・・を交えて移植したことが、より明確な引継ぎを可能にしたのです。ですからDr・A・Aはこの研究を終了し、それまでのP・Pたちすべてを破棄しようと思いました。しかし、Dr・A・Aと暮らすうちに、私がDr・A・Aが理想としていたような記憶の引継ぎには成功しなかったことが明らかになりました。

フィリップ・オリジナルと同じ反応を私は返すことができなかったのです。Dr・A・Aはもう一度研究を再開しました」

P・Pはもう一口液体を飲んだ。

「だから、倉庫にはまだたくさんのクローン体があるのです。ただ、私と作成日が近いクローン体がおらず、まだカプセルの外に出せるほど成長した個体がないので」

私が今のところは研究所を統括しているのです  
とP・Pは口を閉じた。P・Pは隈のできた不健康な顔をしてい  
た。

「つまり、息子さんをもう一度新しく作りだすために？」  
ハロウが聞くと

「私も遺伝子的には同一なのですけど」と言つて、P・Pは色素  
の薄い目を伏せた。

(5)

その時突然ポンポンと、耳慣れない高く澄んだ音が響いた。

「通信です」P・Pが言った。

「恐らく検体2号への通信だと思いますよ。回線を開きます」

P・Pはきつと顔を上げて虚空を見つめた。(モノクルを見ている  
んだらうけど。)

「接続しました。お名前とご用件をどうぞ」

「……ユージンという者です。そこにハロウ・ストーム  
はいますか」

「います。ハロウ・ストームとの通信をご希望ですか？」

「ええ。お願いします」

「どうぞ」

突然水を向けられて、ハロウは明らかに面食らったようだった。

「どうぞ？どうすればいいんですか？」

「そのままそこでしゃべってください。私の耳に入った音声が、そのままあちらの方に伝わります」

「あなたが受話器ということですか？」

「そうです。どうぞ」

「何をごちゃごちゃ言っているのよ、早く出てきなさいよハロウ・ストーム」

ストライクはその声でその電話の向こうの女のことを思い出した。ルーの家にいたときに電話をかけてきて、ハロウに死ねばよかったのにつて言った女だ。すごい。そんなにハロウがキライなら電話なんて掛けてこなければいいのに。

音は先ほどのポンポンという音がそうであったように、どこからともなく聞こえてきた。きっとこの研究所のどこにいたつて聞こえてくるんだらう。ひどい話だ。ここではひみつの電話もできそうにない。

ハロウはひとつため息をついて口をひらいた。

「久しぶりだね、ユージーン」

「久しぶりじゃないわよ、あなたやっぱ箱を盗んだでしょう？どうやったのか知らないけどあなたなんでしょう？どうしてそんなことをするの？これ以上うちの家族を傷つけてどうしようって言つたよ？あの箱があなたあての箱だつていう証拠でもあるの？あなたにはあの箱が開けられた？」

「……まだ開けられていませんよ」

「そうでしょうね？あなたはあの子のことなんて、なんとも思っていないかったんですものね？あの子は本当にあなたのことが好きだったわよ？それなのに、あなた妹が危篤のときに他の女の家に行っていたのよ？わかってるの？それはあなたが選んだことなのよ？わかってるの？」

いまさらあの子のことを理解してたふりするんじゃないわよ。あなたになんて絶対にその箱は開けられないから！」

ガラランガランのすごい音がしてストライクは耳を塞いだ。チップがうるさそうに耳を伏せて眉間にシワをよせた。まるでかみなりが落ちてきたみたいだった。暫く広い研究所にその音がこだまして、P・Pはこめかみの両側を指でさすった。

「回線切斷。相手が接続を切ったようです」

ハロウがもう一度ためいきをついた。

「それにしてもどうやってこのことがわかったんだろう」

「Dr・A・Aでしょう。あなたの『スキャンダル』に関して、かなり広範囲にアクセスしていましたから。次のP・Pたちが育つまでDr・A・Aは退屈しているのです」

ハロウは「それでああなたは平気なんですか」と言った。

でもストライクは「人の気持ちを考えている場合か」と思った。

「今のが『スキャンダル』の骨子ですか」

P・Pはとても単刀直入に聞いてきた。Dr・A・Aの息子だからなのか、単にハロウの気持ちを慮る気がないだけなのかわからなかった。

でもハロウは意外と気丈だった。

ストライクがここ2週間近くハロウと一緒に過ごして発見したのは、ハロウはちよつと（かなり）ズレてる部分があるにせよ、うるさいことは言わないし、とても辛抱強いタイプの人間であるということだった。金持ちの息子なんてみんなすぐに我俣を言っ泣き出すものだと思っていた。

「そうですね。『スキャンダル』の骨子です。むしろ今ので全部です。骨子どころの話ではありません」

「でも色々な想像の余地が残されていますよね？今のお話だけではそうではないですか？」

「そうですね」

ハロウは検査室のすみに置かれていたトランクから、例のパンドラ・ボックスを魔法のように取り出してデスクにことんと置いた。  
「僕は僕を慕ってくれていた少女が死のふちにあるのをわかった上で、他の女の家に行ったのです。それだけです。どこに想像の余地があるんでしょうか？」

P・Pは恐れを知らぬ瞳でまっすぐにハロウを見つめた。  
「例えば」

「現代がいかに情報を制限されているとしても、公式な記録に一度でも取り上げられた事件をすっかり消してしまうのは、一般的ではありません。あなたの父親がそれを行ったのには、何か理由があるはずです」

「では想像してください」

ハロウが箱に視線を落として言った。

「どうぞ想像してみてください。あなたたちが思うほど、複雑なことでとも面白いことでもありません」

ハロウの手がそつとパンドラ・ボックスのスイッチを押すと、箱からはいつものように「パスワードをどうぞ」という女の声が聞こえた。

その女の子の箱か。あの子ども部屋は、ハロウを好きだった女の子の部屋だったのか。

でもストライクは想像するのはやめようと思った。今のところは勝手に想像すればするほど、ハロウが傷つくような気がしたからだ。

(6)

P・Pは何気なくそのパンドラ・ボックスを手を取った。

「これが先ほどの通信に出てきた箱ですか？」

「そうですね」

「開けられないんですか？」

「パスワードがわからないので開かないのですよ」

P・Pはその箱をくるくると手の中で回しながらしげしげと眺めた。

「中身を見てみましょうか？」

「そんなことができますか？」

「X線映像を撮ることができます。ただし、X線に感応して中身によつては正常な状態が保たれないかもしれません。どういったものが入っているかわかりますか？」

ハロウは力なく首を横に振った。

「まるで見当もつきません」

P・Pがためしにスイッチを押してみると、やはり機械的な女の声が聞こえた。

「やめておいたほうがいいかもしれませんね」

軽く箱を振っても何の音も聞こえない。P・Pはもう一度手にしつかりと箱を持って、観察を始めた。やがてある一箇所をモノクル越しに見て何度か指でこすった。

「ここに微細な凹凸があります。人為的なものだと思います」

「わかるんですか？」

P・Pが注視しているところは、ハロウやストライクから見れば全くの平面だった。

「モノクルはサーモグラフィ機能もあります。ここだけ温度が違います」

「どこ？」

P・Pは、まるでキャンディ・スティックみたいに真っ白でつるりとしたペンを、デスクの中から取り出して、箱に直接注意深く薄く線を引いた。



「この部分です。こう直角に線が入っています。外れるのかもしれませんが」

「ちよつと貸してみな」

ストライクが腰の小物入れから出した古いナイフで、P・Pのペンの跡を丁寧になぞった。ナイフの刃が当たるたび、ペンのラインはペンキがはがれるみたいに落ち、3センチほどのふたが現れた。指を乗せるとふたはほんの少しだけめりこみ、しゅっと内側に滑って行ってしまった。

「なんだこれ」

「よく見つけました！スタート！」

そして箱は初めて言葉を話した。よく見つけました、スタート。

その声はこれまでのような女の機械音ではなくて、弾むような少女の声だった。

「リリイ」

ハロウはストライクから箱を奪い取ると、もう一度その新しく出てきたスイッチを押した。でももう箱は何も言わなかった。

「りりい？」

そしてハロウも何も言わなくなってしまった。

「何かの仕掛けがあるようですね。パスワードとは別の開ける方法があるのかもしれませんが」

P・Pは、デスクの上に直接さっきのペンで立方体を描いた。

「それは一種のジョークボックスのようですから、例えばからくり的な趣向を凝らしてある可能性があります。ある一定の手順を踏めば箱が開く、あるいは別な仕掛けが稼動するというような」

ハロウは一番最初に出会ったときのような、とても切羽詰った青白い顔で手の中の箱を見ていた。

P・Pが書きなぐった箱の絵は、薄青く光ってゆっくりと消えて

い  
っ  
た。

## それでは次のヒント(1)

(1)

そのまた次の日になると、もう傷は頬も足もほとんどなくなってしまっていた。しかしP・Pには頬にテープを張られた。

「なんで。もう治ってるじゃん」

「昨日もお伝えしたとおり、色素斑がでやすいんですよ。あと一月はこうやって保護しないと、この傷の形に一生色素が沈着してしまいますよ」

「一ヶ月も貼ってたらテープの形がほつぺたに付いちまうよ!」  
でもP・Pはテープを剥がしてくれなかった。

「テープによってかかる圧力、テープの素材、紫外線量、あなたのアレルギーの有無を考えても、そんなことはありません」

P・Pの診察が終わると例によって何もやることがなかったので、研究所の中を歩き回ることにした。P・PもDr・A・Aも止めないから問題ないのだろう。単にどこで何をしていても筒抜けだからかもしれない。

ハロウは昨日の夜に自分のコンパートメントに入ってから全く出てこなくなってしまった。

途中から見るからにヒマそうなチップも合流してきた。

「よ。めばしいものはあったのかよ」

「ばか。盗んでねーよ」

「いつまでもつかない」

やれやれ。この猫には最初から信用されていない。

ストライクは自分の首にかかったままの、イグナシオからつけられた聖印の首飾りに軽く触れた。とても古い銀細工の首飾りだった。いびつなトンボ玉がいくつか入っている。

箱を開けにかかっているハロウの邪魔をしないよう、コンパートメントを迂回して、P・Pのオリジナル　フィリップ・アンテノワの遺体の部屋を通る。

どうして死体をこんな風に飾っておくんだろう？

Dr・A・Aだっけ見ていて不気味だけど、あつちには少なくとも生きている。

渡り廊下の向こうで「ポン」と音が聞こえたので、チップと一緒に入ってみた。どうせだめだったらP・Pがゆうれいみたいにポツと出てくるんだ。こちらの部屋はP・Pが自分と同じ個体がストックされていると言っていた部屋だった。ストライクはちよつと想像してみた。部屋の一面を埋め尽くす死体みたいなP・Pが入った箱それが一体どういうことなのか考える前にチップが扉を開けてしまった。

中はストライクが想像していたようなものではなくて、ちよつとした実験室みたいになっていた。病院とそっくりな検査室に比べれば、ずっと本物の実験室に見える。でもやっぱりただの実験室ではなかった。入って2メートルばかり右手にガラスの壁があり、その壁で部屋は二分されていた。ガラスの奥にはやはり昨日の「ストック」たちのように、ガラスの棺おけがずらりと積み重なっていたが、一番向こう側の奥には、昨日の「ストック」の倉庫にはなかったような、とてもでかい試験管みたいなものが並んでいて、中に何か入っている。遠くから見たらピンク色のボールのようなものだった。

ポン、とまた音がした。音は左側から聞こえた。

チップが左の耳をくるりと向けた。

その左側の部屋、ガラスの壁のこっち側は、一番奥に5人は掛けられるような横に広い机があり、キヤスターと背もたれと肘掛のついた椅子が二脚あり、机の上には普通の大きさの試験管と、気まぐれに捨てられたような注射器、半分ほど入った液体が少し蒸発して濁ってしまっているフラスコが載っている。なんだかずいぶん長い

ことほつたらかしにされたみたいだ。机のはしに、昔は白かったんだろう紙がさがさと積み上げられていた。今は黄ばんで端が丸まっている。そのまた左の奥にはまるでピザ屋にある窯みたいな、でも白くてステンレスのふちがついていてまるで

「豪勢な棺おけ」

チップがくんと鼻を動かしながら言った。そんな感じだった。またポンと音がした。音はこの棺おけから出ているらしい。その3倍サイズの棺おけは、黒い大小の箱で囲まれて、たくさんのコードで繋がっていた。黒い蜘蛛の巣の上に棺おけが載ってるみたいだった。横つ腹に10センチくらいの丸い穴が5センチ感覚で3つ並んでいて、中が見えるようになっていて。ちよつと覗き込んでみると、中にはとても小さい体があった。子どもの体が液体に沈んでいる。

「うわ・・・」

チップが中をちらりと見てまさに一瞬で扉に駆け戻ってしまった。ストライクも逃げたかったが、それがどうなっているのか理解できなくて逃げそこなった。中の子どもは、顔がぐっちゃりと潰れている。スイカが割れたような赤い肉がこちらを向いて揺れていて、顎くらいまでをすっかり隠している。そしてその皮と肉と骨の隙間に、がっちり金属の薄いプレートが差し込まれて、頭蓋骨があるべきあたりをヘルメットのように覆っていた。ヘルメットには太いコード、細いコード、あらゆる色のさまざまなコードが繋がっていて、頭を棺おけの奥に固定していた。

「う・・・」

ストライクが吐きそうになって屈みこむと、P・Pが予想通り空中に現れた。

「ここで嘔吐するのはやめてください。その棚の3段目にガーグルベースがありますので、その中に吐瀉してください」

ガーグルベースって何だよ

ストライクはなんとか吐き気を押さえ込んだ。

「なんだこれ。病気？死んでる？頭割れちまつてるぞ」

チップが恐る恐る戻ってきて、屈んだままのストライクの背中をしつぱでばんばん叩いた。介抱してくれているつもりらしい。

「昨日も申し上げたと思いますが、ここはフィリップ・プロトタイプ・ストックの倉庫です。つまり」

「つまりその頭割れてるのもP・Pなのか」

「そうです。それはP・P3065号です。3063と3064は、それぞれ身体的に異常が見られたので移植用ストックとなりました。今、P・P3065号はフィリップ・オリジナルの記憶を脳に移植しているんです」

「それでなんであんな、頭剥いてんの？」

「記憶の移植は脳の対応する部位を刺激することによって進行します。脳に直接電流を流す必要があるのです。だから頭蓋骨を外して脳を露出させ電極を」

ストライクはもう一度吐きそうになった。その時本物のP・Pが後ろから近寄ってきて、そら豆の形をした深い洗面器みたいなやつを差し出した。同時に目の前に浮かんでいた方のP・Pがぱっと消えた。

「これがガーグルベースです」

「・・・いや、いい。だいじょうぶ。うつぶ。こうやって記憶を移植してるってこと？顔がぐちゃぐちゃだぜ」

「こうやって約11年かけてフィリップ・アンテノワの21年の記憶を移植します。皮膚を筋肉組織から剥離し、引き下ろしています。時が来れば別な場所で培養している頭蓋骨をはめ込み、皮膚を元の位置に戻します。成長によって足りなくなった分の皮膚は遺伝子的・肉体的に欠損が見られたP・Pから移植します」

そしてやはりストライクはP・Pの手からガーグルベースを奪い取って吐いた。

「私がそうやってできたP・Pの3年目です」

言われて落ちて着いてよくその棺おけの中の子どもを見ると、ちょ

っただけ見えている顎のラインはP・Pに似ているような気がした。  
「つまりこの子どもはあと何年かしたら、お前と全く同じになるっていうこと？」

「あるいはフィリップ・オリジナルと全く同じに」

P・Pは手を伸ばして棺おけの窓に触れた。窓はさつと白く曇り、中でだれかの記憶を植えつけられているP・Pをほんのつかの間隠した。

その指は細く幼く、P・Pの顔だつてたつたの14歳だつた。

## (2)

またポンと音がした。

「ピピッ」

P・Pのゆびが今つけたばかりの、ガラスの白い曇りをぐりぐりと拭き取った。そして右の目をぎゅっと寄せて中を覗き込み、ぐにやと唇を歪ませて笑った。

「やあストライク。元気そうだね？実は君に折り入って頼みごとがあるんだよ」

ストライクは顔をしかめて白衣のP・Pの横顔を眺めた。

「そんな顔をするな。君にならきつと簡単にできることだ。まさか傷を治してもらってそのまま出て行こうなんていう恩知らずでもあるまい」

ねちっこい蛇のような話し方にストライクはぞつとした。見た目は変わらないのに、中身がDr・A・Aになっただけでどうしてこんな落ち着かない気分になるんだろう。

「箱があつただろう、ストライク」

「・・・箱？」

ハロウの箱？箱？どの箱のことだ。

「察しが悪いな。やはり頭の回転がよくないようだ。わしが言つて

いるのはあの教会にあった箱のことだ」

「そー言えばあんたたちが教会に来たのはあの箱のことだったなあ」

チップが腕を組んで扉のすぐ横によりかかった。Dr・A・Aはチップの言葉を無視した。

「あれを手に入れてほしい。方法はお任せしよう。準備が必要なものがあればP・Pに言え」

「は？」

「君になら簡単だろう。引き受けてくれ」

「何を言ってるんだ？」

「君はわしが思っている以上に頭が悪いらしいな。しかし能力というものは学術的な事象にのみ発揮されるものではない。例えば君の窃盗の技術がそうだ。知能指数がわしやP・Pよりも低くても、わしやP・Pよりも技巧的に技術を習得し行使することができる。無論使用している脳の部分が異なっているからだが、君に説明してもわかるまいな。あの箱を盗んでここに持って来てくれ」

俺がチップならとくにしっぱが太くなってるころだ、と、ストライクはゆっくり呼吸しながら思った。猫のしっぱを羨ましく思ったのは初めてだ。

「なんであんたみたいなやつのためにあれを盗んでこなくちゃなんねーんだよ。絶対やらねーからな。大体P・Pには恩もあるし感謝もしてるが、あんたにはずっと罵倒しかされてねーよ。あんたのために動く義務はないね」

「罵倒か。これは失礼。わし自身ここ100年ほどP・Pとしか口を利いていないのでね。わしの話が理解できないような人間との話し方を忘れてしまったのだよ。ところでストライク、君は『ドミノ倒し』という遊びを知っているかね。全ての文明を破壊したと言われる、第4次大戦の中にも生き残った数少ない古き善きゲームだよ」

Dr・A・Aは手前にあった椅子を引き寄せ、どっかりと腰を下ろした。椅子はきゅうとさび付いた声を上げた。生っちょろい小さな



顔は、白い棺おけ（3065号が入っている装置）の覗き穴から淡い青緑色の光を受けて満面の笑みを浮かべている

「知らんかね。ドミノという牌をいくつも並べ、最初の一つを倒せば連鎖で全ての牌が倒れるようにする遊びだよ。ただ全てが倒れればいいのではない。その連鎖はある一定の軌跡を描かなければならない。その軌跡は複雑であればあるほど、その連鎖は長ければ長いほど美しい」

「それがなんだって言うんだ」

「例えば一つ目の牌。君がケットローグで捕縛された時の3人の共犯者だが、そのうちの2名がその後別な場所で逮捕されている。一人は自分たちがある集団に属していたと告白している」

Dr. A. Aは面倒くさそうに白衣のポケットから布切れを取り出し、左のモノクルを左手で支え、右手で挟むようにして拭いた。

「二つ目の牌。さて、その集団について調べてみると、どうやら窃盗を始めとした犯罪組織らしい。ただし小規模で犯罪としても軽度のものであった。だがどうやらここ一年で、それまでとは異なった事業に手を出し始めたらしいね」

「三つ目の牌。残る君のお友達の最後の一名は、ミストハウバーンの街で死亡が確認されている。名前を知りたいかね？君の友達だと思ふよ。ブロウドという男だ。その遺体には特徴のある凶器が使用された痕跡があった」

扉がゆっくりと開いてハロウが亡霊のように滑り込んできた。でもDr. A. Aは話をやめなかった。

「4つ目の牌。死亡が確認された君のお友達、憐れなブロウド氏の死体に残された凶器は、他の事件でも同型のものが見つかった。3件ほど犯罪組織の上層部と言われる人間が暗殺された事件だ。とても特殊な凶器だからね。間違えようがない。時代錯誤もはなはだしいが、それは弓矢だ。ちょうど君の大腿部にあった傷と同様のね。ただすべて一撃で絶命させているため……無論君を除いてだが。暗殺者には『魔弾の射手』などという小ざかしいあだ名が付

いている。元となったオペラにおける『射手』とは銃の射撃手のことであると言うのにだ」

「5つ目の牌。ブロウド氏はどうやら属していた組織の私刑として殺された可能性が高いと見られている。それがなぜ他の暗殺事件に使用されたのと同じ方法なのか？つまりブロウド氏及び君の属していた組織の新しい仕事は暗殺だということだ」

「6つ目の牌。14年前のある記録が残っている。二人の人間男子の兄弟がハンナ・ウォルスキート養児院に引き取られたという記録だ。兄弟の年齢は不明であつたらしく、年齢欄には二人とも5と書き込まれている。二人の呼び名はストレインとストライク。二人とも黒髪、黒い瞳、健康体。白人と見られるが、黄色人種の混血の可能性あり。そしてその3年後の記録。ストレイン、ストライク、脱走により所在不明。ふふふ、このハンナ・ウォルスキート養児院は7年前に児童虐待と不正労働で告発されて消滅したよ。実際はどうだったかね？」

ストライクはその黒い目でDr・A・Aを睨み付けた。  
「7つ目の牌」

Dr・A・Aはそんなストライクに向かって齒をむき出しにしてにつこりと微笑んだ。

「二人は公的には未だに行方不明のままだ。だがここに不思議な記録がある。9年前の記録。これは町内新聞の記事だ。『サーカスがやってくる ドーラ・グランガーデン。来る7月23日、各地を旅する高名なサーカス、ドーラ・グランガーデン一座がやってくる。綱渡り、空中ブランコはもちろん、人間ピラミッドや軟体美女など見たこともない夢の出し物が目白押し！中でも注目は若干9歳のストレイン君による射的。小さな体から繰り出される弓矢は決して標的を過たない』稚拙な記事だが内容はわかる。ここに射的の名手、ストレイン君が現れる」

「そんなの偶然かもしれないだろ」

「問題はその後だ。その2年後にこのドーラ・グランガーデンは路

上生活をしている孤児を拾っては芸を仕込み、それに向かない子供にはスリの技術を教え込んで町で財布を取ってこさせる、サーカスを隠れ蓑にした犯罪者育成機関だったことが発覚し、団長以下成年12名が捕縛、18歳以下の少年少女13名が保護されている。その保護された少年少女の中に、ストレイン・ストライク兄弟が含まれている。彼らは慈善院に送られたとされているが、その後の記録はない」

椅子がきりきりと音を立てた。Dr・A・Aは長い机にひじをついてこめかみを少し触った。そのしぐさはP・Pのよくやるのに似ていた。

「本当はどこに連れて行かれたのかね。それとも逃げ出したのか？まあどちらでも大差ないが」

白い棺おけがまたポンと鳴った。

「次の牌。その2年後、ストライクという少年がたびたび補導されるようになる。主に窃盗罪。身元引受人はアルヴィル・ドーという人間男性ということになっているが、実際にはこの男性は存在しないな。そうだろう。戸籍も出生証明書もないのに運転免許証を持っている男がこの世界にいるわけがない。このころからすでにストライクはどこかの組織あるいは集団に拾われていたわけだ。さて、この軽犯罪常習犯のストライクとドーラ・グランガーデンで保護されたストライクは、君の反論も空しく同一人物だ。指紋を取られただろう？そして無能な犬の警官どもが見事に見逃したようだがね、その指紋は14年前にハンナ・ウォルスキーと養児院で指紋を採取され、11年前に失踪届けが出された当時8歳前後のストライクとも一致するのだよ。そして先日殺された哀れなブロード氏もまた身元引受人にアルヴィル・ドーと書いていた。偶然だろうか？つまり君は巷で『魔弾の射手』と呼ばれている暗殺者と同じ集団に属していたと言ったことだ」

「さあ。次の牌だ。P・P。あの写真を投射してくれ」

「ピピッ了解しました。25倍に引き伸ばして投射します」

「ピピッ」

空中に横3メートル、縦2メートルほどあるスクリーンが突然現れた。そこに一枚の写真が写っている。それは一人の青年、あるいは少年の全身を遠目の俯瞰から写した写真で、ピンぼけな上に画質が悪く、細かい表情はちっとも読み取れない。だがそんなことは本当にささいなことだった。その立った感じ、鼻の形、髪の色

「ストライクじゃん？」

チップがすつとんきょうな声をあげた。

「そう。そつくりだ。さすが兄弟と言うべきかね。実際に2727年の9月にストライクはこの写真の主と間違われて事情聴取されている。まぬけなことに、事件の当日、ストライクが留置場に入られていたのが証明されたので別人とわかったのだが。これが『魔弾の射手』の現在唯一の写真だ。彼がストレインだね？」

「あんた何が言いたいんだ？勝手に人のことをかきまわってくれたみたいだけだな。俺は何も言わないよ。あんたの調べたことは俺には関係ないね」

Dr・A・Aはにやにやと笑って「そう言ってくれて嬉しいよ」と言った。

「さっきも言ったとおり、ドミノ倒しというゲームは手が込んでいるほど充実感が増すのだ。まだ牌は続いている。楽しみにしておくことだ」

「ピピッ」

ポンとまた音がした。

P・Pはにやにや笑いが張り付いたままだった表情を戻し、こめかみを指でさすって目をつぶった。

「昼食にしましょう」

4人がぞろぞろと廊下を歩いている間も、誰も一言も口を利かなかった。

(3)

もぐもぐといつもの堅いケーキのような、ぱさぱさしたものを食べていると、チップがぼつりと「ルーのメシが食いてえ」と言った。チップは半分ばかり食べたところで食欲をなくしてしまったようだ。確かにルーの作ったご飯がとてもおいしかったことをハロウは思い出した。ストライクに半分食べられてしまったハンバーガーだつて感動的だつた。あれは一体どういうわけなんだろう。ハンバーガーなんて材料をバンズに挟むだけみたいにいるのにな。

「どのような食事をしていたんですか」

P・Pは薬品臭い液体をストローで飲みながら言った。

「なんでもさ。サンドイッチ、ハンバーガー、ピザは生地を買ってきてたけどさあ、スパゲティ、オムライス・・・あー、ルーのチキンライスが食いてえ」

「そういったものは栄養価が偏っています。このニュートリシャス・バーの方が携帯性に優れ、腐敗しにくく、必要な栄養素を過不足なく摂取できます」

「だからさー、栄養がどうたらこうたらはどうでもいいわけよ。こんなの味気ないだろ？あつたかくて肉とか野菜の味がするもん、食いたくなんないわけ？」

「味のするもの？」

「まさかこんなパサパサしたトリのエサみたいなもん毎日食つててうまいと思うのかよ？たまには生の野菜でも食ってみろってんだ」

P・Pはどうしたわけか頭を抱えてしまった。

「おい、どうしたんだ？」

チップが声を掛けてもぴくりとも動かない。

「そんな真剣に悩まなくていいだろ？ちよつと言ってみただけなんだからさあ・・・なあ？」

「いや、今のが誇張表現だったということは理解しているんです。ただ、少し混乱してしまっただんです」

「コンラン？」

「はい、ちよつと落ち着いて考えたいので出てください」

あまりに率直に出て行けと言われてしまったので、3人は仕方なくそれぞれのコンパートメントに戻った。

ストライクはすぐに自分の部屋に入ってしまったが、チップはハロウの部屋にするりと潜りこんできてハロウが腰掛けているベッドのわきの床に腰を下ろし、顔を手で何度もこすった。

「雨が降るんですか？」

「違うよー。確かに雨が降る前は落ち着かないけどさあ、それとこれとは関係ないよ。いつもやってるよ」

ハロウはちよつと頷いて箱を開けにかかった。少しだけ前に進んだようだった。まず最初のボタンを押すと隙間ができるので、そこをちよつとこじ開けるようにして側面を押すと、ある一面がざつとずれるのだ。そしてそうやって側面がずれた部分につまみが埋まっ  
ていて、起こして捻ると、端っことから6センチほどの削ったばかりのえんぴつみたいな形の棒が出てくる。そして……

そこから全然わからない。この棒はどこに使うんだろう？朝からやっていてどうしてもわからなかったから、もう一度P・Pに見てもらおうと思って追いかけてみたらストライクとDr・A・Aの対決—（というように見えた）にかち合ってしまった。Dr・A・Aはどういうわけかそういうのがお好きなようだ。

「P・Pが考えたいことってなんだろう？」

チップが壁に寄りかかって目を細めながら言った。

「なんででしょうね。こちらは色々と込み入っててわからないですね。もしかしたらあの食事しか取ったことがないのかも知れませんが」

「あり得るな」

「ここの奴らはおかしいよ」

壁越しにストライクが言った。

「頭がおかしくなりそうだ。『ストック』って一体何だよ？息子と同じものを作るってなんだ？183歳って何だ？あんなプールの中で何かの標本みたいに生きて、人のこと勝手に嗅ぎまわって何が楽しいんだよ」

壁からどん、と音が聞こえた。たぶんストライクが壁を殴ったんだろう。

「そうですね。なんだか違う世界にいるみたいだ」

「いるだろ。違う世界に。俺たちが一週間前まで住んでた世界には一日で傷が治っちゃう絆創膏もなかったし、死体も飾られてなかったぜ」

ストライクはだいぶ腹を立てているようだった。Dr・A・Aの長い話がよほど頭に来てるんだろう。

「もうさー、そしたら帰ろうぜ」

チップが目をしよぼしよぼさせて言った。

「ここ居たってつままないしさー、俺まともなメシが食いてーよ。飽きたよ。もういいだろ。ストライクの足も治ったんだしさ。もう」

「ここやだよー」

「そうだな」

ストライクが壁の向こうで起き上がる気配がした。

「ちよつと探してくる」

その時ハロウの手の中で、ぱち、と軽い音を立てて一枚金属がはがれ、六角形の穴が現れた。

(4)

震えそうな指で、そつと鉛筆のような部品を現れた穴に入れると、ピンポンと軽快に音が鳴り響き、続けて少女のささやくような声が

響いた。

「がんばりました！それではヒントをあげましょう。合言葉はあなたが私にくれたものよ。もっとがんばったらもう一つヒントをあげまーす」

チップが目丸くしてハロウの手元を見ていた。歩き出しかけたストライクが声を聞いて足を止めた。

「あなたがわたしにくれたもの？」

ハロウが確かめるように言った。

なんだろう。そもそも僕は何か彼女にあげたことがあったんだろうか？彼女が喜ぶようなものを？

「なんだろう」

チップが耳をくるくる動かしてハロウを見上げていた。

「なんかあげた？思い出してみなよ。適当に言ってりや当たるよきつと」

「……………花は行くたびに持って行ったな……………ほとんど毎回違う花だったから、何を持って行ったのかと言われても思い出せません。ナニーが……………僕の教育係なんだけど……………・用意してくれたものだったし」

「前に色々言ってたじゃないか。もっと思い出してみろよ」

気づくとストライクまでがハロウの部屋のドアの近くに立っていた。そうだった。前に思いつく限りパスになりそうなものを試してみたことがあった。

キャンディ、オリオン、スイトピー、ベンジャミンの木、天使のランプ。

彼女の家族の名前。

僕があげたもの。

「ぜんぜん思い出せません。何か……………」

「誕生日に何かあげたとかさ。何かあるんじゃないの？」

「誕生日……………僕、彼女の誕生日はなんというか、経験していないんですよ。彼女が12歳になってすぐの時に初めて会って、



それから一年も経たずに……」

「ふーん……でもなんかあるはずだろ。花のついでに小物をあげたとかさ、お菓子でももってったとか。覚えてない？」

小物。お菓子。あげたような気もするし、僕があげたんじゃなかったような気もする。彼女は花を受け取っただけでもとても嬉しそうに毎回到こにこして、いつも一度細い腕に抱きしめるように匂いをかいでいた。『ありがとう、ハロウ。いつもこれが楽しみなのよ』でも彼女の部屋は僕が持っていくまでもなく、彼女の家族や親戚や家庭教師が持ってきた花で埋まっていた。僕が帰る時は『枯れる前にまた来てね！』と手を振った。何の花だったのかなあ。どうして僕はそんなに漠然と彼女に接していたんだろう。

「どっかに一緒に行ったとかは？その時買っただげたんじゃない？」

「一緒に出かけたのは何度か……あの……この箱があった家があったでしょう。あそこの商店街でお祭りがあって……・・・・・・・・・・。確かにその時何か買っただげた気がします。なんだっただろう」

「思い出せ！」

「思い出すんだ！」

チップとストライクが二人で声をそろえた。

二人の応援は有難かったが、祭りのこと自体は全く覚えていなかった。

「彼女は体が悪くて、本当はお祭りなんか行かない方がいいって言われてたんですよ。しかも夜店を見に行きたがったから、余計心配でね。何があったのか他のことを覚えてないんですよね」

「ふむ」

ストライクが腕を組んで唸った。「あの辺の祭りね。夏のだろう？」

「そうでしたね。そうだった気がします」

「夏の夜店にあるようなもんだろう。お面？ワタアメ？そうだな……・安物のアクセサリーも売ってるよな。おもちゃとか。でも女の子

って何を欲しがるとかな？人形？ひよことか金魚とかも売ってるし、風船もあるだろうなあ。ぺらぺらの民族衣装とかな」

「カキ氷も売ってるぜー。手品のタネとか。俺は焼きイカが好きだよ。腹壊すけど」

「おもちゃ。かな。そういえばこまこましたものがたくさん並んでるところで何か話した気がします」

これとってもきれい。きらきらしてる

見て！こんなのはじめて見たわ

そう、どこか・・・夜店というよりは小さな店のようになったブーースに二人で暫くいた。

ほらハロウ、生きてるみたい！でもこれ作り物なのよね？

明かりがランプだけで薄暗くて、カーテンで囲まれた店だった。

スノウボールや小動物の置物、子供だましのバッグや妙にキラキラと光を乱反射するガラスの宝箱・・・そんなもので棚が全部埋まっていた。彼女はそれでもとても喜んで、棚の一つ一つを踊るように見て回った。

「そう、それで、『ハロウ、どれか一つ買って』と言われました。じゃあ好きなものを選んで、と。そしたら」

彼女は真顔でもう一度品物のすべてを検分し始めた。あまりに彼女が熱中するのでハロウは彼女が熱を出してしまわないか本当に気が気ではなかった。

指輪・・・だめね。私、つけるとかゆくなっちゃうのよね。

髪飾り・・・ちよっといいかも知れないわ。

レースのシヨール。きれいだけどママにテーブルクロスにされそうね

オルゴールはパパが作ってくれたのほうがいい音だわ。

お人形・・・これもパパが作ってくれる方がすてきね

彫刻が入ったペン・・・これでハロウに手紙を書くのはどう？

水晶の丸いボール、宝石の小さな原石がざらざらと入った小瓶

何に使うの？これ

ポストカード。手帳。筆入れ。宝石箱。小さな金魚鉢に入った作  
り物の魚。

でも彼女が最後に手に取ったのは小さな小箱だった。

「ハロウ、私これにするわ」

それはガラスでできた5センチ四方のガラスの箱で、ふたの表面  
にゆりの花が彫ってあった。

「そんな小さなものでいいの？」

彼女は目を輝かせて「いいの！」と言った。

「ふたをあけてみて！」

ハロウが言われたとおりに開けてみると、箱の中からはふわっと  
ゆりの香りがした。箱の中には透明のビー玉のようなものが入って  
いて、それを転がすたびに香りは強くなった。匂い玉なのだ。

「ね、ハロウ、いいでしょう？これを買ってちょうだい」

買ってそのまますぐ彼女に手渡すと、彼女はハロウの腕にもたれ  
かかった。すっかり疲れてしまったようだった。軽く熱い体だった。  
「辛くなってきたかな。おうちに帰ろうか？」

「そうね。そろそろ帰らないとパパやママやお姉ちゃんに怒られる  
わ。でも楽しかった。お土産も買ってもらっちゃった！」

「お土産なんて大層なものじゃないよ。本当にそんなのでよかった  
の？」

おもちゃ一つ買ったくらいで、と思うくらい彼女は頬を真っ赤に  
して喜んでいた。あるいはその時も熱が出ていたのかもしれない。  
「ふふ、私ゆりの匂い大好きなの。それにこれ、ゆりの花でしょう。  
私の名前よ。リリイってゆりでしょう。そうでしょう？」

そして彼女はやっぱりその次の日から当分安静にしなければなら  
なかった。やっとお見舞いの許可が出て会いに行くと

「私は平気だったのよ！お祭りに行ったせいなんかじゃないんだか  
ら」

とものすごく憤慨していた。後で彼女の父親であるリシユリユー・エウリデイクから手紙が届き、無理を申し上げて娘の相手をしていただいているあなたには誠に恐縮であるが、あまり娘を興奮させたり、外に連れ出したりしないで下さらんかと言われた。でも僕は

「それってなんて言うものなんだろう？ 匂い箱？」

「なんだろうなあ」

「確かに彼女はそれをすごく気に入っていました。香り玉からゆりの匂いがしなくなっても、ずっとベッドサイドに置いてありましたから」

「他には？」

「ちよつと思ひ出せないですね……でも二人でどこかに行つて特に買つてあげたのはそれだけだと思います。お菓子くらいは普段でも持つていったでしょうが……」

3人で悩んだ末、結局その小箱をなんと呼んだらいいのかさっぱりわからなかつたので、もっとがんばつた先にあるはずのヒントを聞いてから考えようということになった。

もしかしたら僕あての箱じゃないのかもしれない。こんなに全くわからないなんて。

ハロウがあまりに落ち込んで見えたのか、チップはハロウの足をしっぽでぱんぱんと軽く叩き、ストライクは手近にあったハロウのシルク・ハットを俯いたハロウにすぽつと被せた。

「開くつて。」

## それでは次のヒント(2)

(1)

でかいブラシの頭のようなもの(あるいは程度のいいムカデのようなもの)がかさかさと廊下を通り過ぎていった。きっと掃除の間なんだ。

P・Pはそれをクリーナーズと呼んでいた。形と動きは不気味だけど、毎日そこらじゅうを走り回って磨いて周り、いつも研究所にはしみ一つ、ちり一つない。

築130年でも綺麗なわけだよなあ。

ストライクはP・Pを探しながらつくづく思った。でもP・Pは検査室にもいなかったし、P・Pの私室らしきところ(ストライクたちのコンパートメントの向かいだが、広いし廊下側の窓は全面ガラスだし、とても居心地がいいとは思えなかった)にももちろんいない。

「P・P、どこにいるんだ」

さつきから呼んでいるのだが、例のゆうれいみたいな虚像のP・Pさえ出てこない。どこに行ってしまったんだろう。

そろそろDr・A・Aのメンテナンスの時間だった。あれが口を挟めない時のほうがいい。

入りたくなかったけど他になかったので、P・Pのストックの倉庫を覗いてみた。

白衣の子どもが埃の積もった机につつぶしていた。

「P・P?」

全く身動きをしないのでストライクが回り込んで顔を見ると、P・Pは呆けたように口を半分開き、目を見開いていた。

「なあ、P・P、目が乾くし・・・怖いよ。起きろよ」

「邪魔しないで下さいよ。思い出そうとしていたのに。出してくれ

と言う気ならだめですよ。あなたたちにはもう暫く滞在してもらいます」

「なんでだよ。俺の脚も顔の傷も治っちゃったじゃん。もういいだろうよ」

P・Pがむっくりと起き上がってしきりにまばたきをした。

「あなたたちは、私が生まれて初めて長時間接触しているオリジナルの人間なんです。もちろんDr・A・Aを除いての事ですが。もう暫く研究させてほしい」

「Dr・A・Aのことでも研究してるよ。口が達者で面白いだろうよ」

ポン、と棺おけが例の音を立てた。P・Pは大きなため息を一つ吐いた。

「Dr・A・Aの肉体はもう老化が進み、細胞の増殖力も、研究対象から除外せざるを得ないほど落ちています。今私が知りたいのは、あなたたちオリジナルの人間、オリジナルの獣人のことです」

「じゃーさー、俺とハロウのクローンでも作ってそれで遊んでるよ。それでいいだろ？」

ストライクは、P・Pがさつきから食い入るように自分の「ストック」の列を見ていることに気が付いた。なんだって言うんだらう。ストライクが視線を追って300人のP・Pを眺めると、3062号のP・Pがけだるそうに口を開いた。

「駄目なんですよ。クローンじゃ駄目なんです。クローンとオリジナルの人間は別物なんです。クローンは確かにオリジナルと全く同じ遺伝子情報を持って生まれます。それなのに、そのクローン体がオリジナルと同様の健康な人体に成長する確率は40%程度しかない。そして無事カプセルから出てなお、クローン体には、オリジナルにはなかった欠陥が現れやすいのです。全ての人間男性のクローン体には生殖能力がなく、自己治癒力が比較的低い。臓器不全にも陥りやすい。なぜなんでしょうね。それはまだDr・A・Aにもわかっていません。だからもう暫くいてください。あなたたちと私の

「一体何が違うのか」

「俺にはわかんねえよ」

「でも何かが違うんですよ」

ストライクは、ちよつと机を触っただけの自分の指が、埃で真っ白になっていることに気が付いた。

「どうしてクリーナーズが来ないんだ？この部屋だけ？」

「この部屋は昔からP・Pたちが掃除していたのです。私もいわゆる12歳まではここを片付けました。でも他のP・Pたちが処分されて、ここを一人で片付ける気がなくなったのです」

P・Pはぴくりとも視線を動かさなかった。ずっと「ストック」をガラス越しに見ていた。

白い横顔は無表情で、言葉には抑揚がなかった。彼もまた、クロインのP・Pの一人だった。

でもストライクには余計にクロインと人間の何が違うのかわからなくなった。

(2)

駄目だと言われても言うことを聞く気がなかったので、ストライクはチップと研究所の中を歩いてみることにした。逃げようと思えば何か見つかるかもしれない。驚いたことにハロウまでついて来た。「箱はもういいのか？」

「ちよつと休憩させてください」

天井は高い。イグナシオの教会といい勝負だ。でも天使も聖者の彫刻も天地創造の絵もない。

軽く一周しても出入り口は最初の門のヤツしかなかった。火事になつたらどつから逃げる気なんだよ？

でももしも火事になったら、火災を感知したP・Pが天井中から雨を降らせるのかもしれない。火はすぐに消し止められてしまう。気持ちの悪い世界中のストックたちの部屋にもこっそりと入った。長居するとP・Pに気温がどうたらこうたら怒られてしまうので、かなり手早く見て回ったけど、それでも十分なくらいきちんとその部屋は密閉されていた。

「なんだかなあー」

検査室はいつも明るくて白いイメージだったので、窓の一つもあるんじゃないかと思ってみたが、やっぱりただの白い壁だった。

「すごいですね。僕たちは大きな箱に閉じ込められているみたいだ」「閉じ込められているんだよ。実際に。」

「換気扇とか通風孔とかないのかなあ？俺通つていくんだけどな」

チップが床近くの壁をノックしながら言った。

「そうですね。酸素はどうしてるんでしょうね。窓も通風孔もないと酸欠で死んでしまいますよね、そのうち」

「死にませんよ」

空中にP・Pが不機嫌な顔をして現れた。

「あなたたちはお気づきでないと思いますが、換気は毎日行われています。そしてまた、その換気口はあなたたちの通れるものではありません」

言つてP・Pの映像はすつと天井を指差した。指のはるか先には白い丸い円盤みたいなものが光っている。

「あれが換気口ですよ。研究所内の空気を廃棄し、外気を取り入れ、循環させています。いくつもついています」

てつきり照明だと思っていたので、ストライクは驚くと共にがっかりした。あんな高いところにカバー付きであつたら手が出せない。「空気くらいの粒子になりさえすれば、あの換気口も通れるかもしれませんね」

P・Pは言い捨てて消えてしまった。言い方がものすごくDr・A・Aに似ている。とりあえず肩を落として3人はコンパートメン



トに戻った。珍しくチップも自分のコンパートメントに入ってしまった。寝る気なのかもしれない。壁の向こうでハロウがベッドの上に腰を下ろす気配がした。

「開きそう？」

「いや、全然進んでいません。次のとっかかりが掴めないですね。P・Pに見てもらえばいいのかもしれないんですけどね」

あの箱のおかげでこんなに変なところまで来てしまったなど、ストライクはベッドに寝転びながら考えた。

あんなおもちゃの、女の子が作った他愛ない箱一つのために。

「なあ、どうしてその箱にそんなに拘るの？あのユーージンだっけ？電話の女も拘ってたよな」

ふう、とため息が聞こえた。

「これを作ったのはリリイという女の子でね、彼女はこれを作り終わってまもなく亡くなってしまったんです。この箱を誰にあげるために作ったのか言わないうちにね」

「形見？」

「そうです。彼女の家族は『これはあの子が私たちに作って遺した物だ』と言いました。

でも僕は僕にリリイが作ってくれたものだと思いました」

「・・・・・・」

「だからどうしてももらおうと思ったんです」

「なあ、待てよ。その根拠は？リリイちゃんがお前なんか眼中に無かったんだったらどうするんだよ」

「リリイが生きている時に約束したんですよ。僕の誕生日に素敵なものをあげるって。彼女が息を引き取ったのは僕の誕生日の1週間前でした」

ストライクは少し頭がくらくらしてきた。ハロウは思っていたよりもずっと頭がいかにれているのかもしれない。

だってそんな、だって

「そんなのは根拠にならないだろう！」

「そうですね」

しかもハロウがとても素直にあっさりと認めたので、余計にこっちの頭のねじがはずれそうになった。

「そうですね。だから僕は確かめたかったです。どうしてもこの箱を開けたいと思ったんです」

「あのさー、恋人だったとかさ、そういうのなの？なんなのそれ？ぶっちゃけどういう関係？」

「恋人ではなかったですよ。僕は最後まで彼女の保護者のうちの一人でした。遊び友達かな。リリイはまだ12歳でしたからね。彼女をかわいらしいと思うことがあって、一緒にいて楽しくても、やはり女性として見ることはありませんでした」

ストライクにはますますわけがわからなくなって唸った。

「それでどうして家族から娘の形見をかつばらう話になるんだよ？」

「だって僕への形見だったとしたら、僕が受け取らないといけくないですか？」

「……だからさー、その自信はどっからくるわけ？お前、その箱が本当にご家族宛の箱だったらどうするんだよ」

ハロウの気配が突然すうつと薄れたので、ストライクは一瞬ハロウがP・Pの宙に浮かぶ映像みたいにすうつと消えてしまうのを想像した。

だめだ。俺の頭はほんとうにこんがらがっているみたいだ。

でもハロウはちゃんとそこにいた。

「本当はね、誰に宛てた箱だって構わないですよ。正直に言って箱の中身が庭のみみずに宛てた最高の木の葉だって僕はぜんぜん構わないんです。ただ僕はこれを何があっても絶対に開けようと決めたんです。僕はこの箱の中身がただ知りたいだけなんです。彼女が最後に作ったものがね」

(3)

次の日も朝からハロウは箱をいじっていた。だからハロウだけは結構暇ではなさそうだったが、ストライクとチップは本当にやることがなかったので、P・Pに言っただけの昔のシネマをスクリーンに流してもらっていた。

「こんなのあるんだったら最初から出してくれよ」

「これは歴史的な資料ですから、まさか今でも娯楽として見る人間がいるとは思っていませんよ」

シネマには美しい白黒のドレスを着た茶色の髪の女性と、ハロウみたいな服の男が出てきた。でも男の髪は金色に近い茶色だったし、コートも帽子も灰色だった。

「獣人がぜんぜん出てこねえよ」

「獣人が誕生したのは2216年です。このシネマは1964年のものです」

ハロウがよろよろと出てきたので、4人で(P・Pも暇だったよ)うだ)そのシネマを眺めた。

「この女性は綺麗ですね」

「うん、カワイイな」

「背高い」

「エッダ・ヴァン・ヘムストラという女優ですね。この当時16歳です」

「そっさいやハロウのお母さんも女優じゃなかった？」

「そうですね、僕彼女の映画を全く見たことないですよ」

「データを探しますか？」

「いいです」

やがて夕食の時間になったが、P・Pは一緒に食べなかった。これはとても珍しいことで、例の犬みたいに律儀なワゴンが3人のための乾燥ケーキと配合を間違った風邪薬みたいな飲み物を運んでき

た。

「P・Pはどうしたんだろう?」

「呼んでみれば来るんじゃないの」

「P・P」

言うなり空中にP・Pの映像が現れて、

「ちょっと今手が離せないのので先に食べていてください」と言っ  
て消えてしまった。

「おかしいな」

ストライクがさくりといつものまづいバーを齧った。チップは  
乗りしないらしく、嫌々椅子に腰掛けると眉間にシワを寄せてい  
つもの「食事」を見た。

「ん?」

「どうしたチップ。ルーのメシはないぞ」

「違う。これいつものと違うぜ。これ・・・何か変なものが入っ  
てる」

「カビ?」

「違うけど、いつものよりもつと薬臭いよ」

その時ずっとP・Pの実像の方が入ってきて、右手を背中に回す  
ようにして真っ直ぐにチップを見た、

「チップさん」

「P・P、これは」

シュパン、という風を切るような音がして、チップの腹に注射器  
のようなものが突き立った。P・Pの右手にはとても大きな、狙撃  
手持つような銃が握られていた。

「チップ!おい、P・P」

ストライクがP・Pに走り寄ろうとすると、足からぐりと床に  
崩れた。どうして。

「ハロウさん、食べましたか」

「食べてしまいましたね。どうしてこんなことをするんですか」  
食べてしまいましたねじゃねえよ

どうしてそんなに落ち着いているんだよ

ストライクはゆっくり前のめりに倒れながら、やっぱりハロウは一回死ねと思った。チップは大丈夫なのか？

「ピピッ」

ハロウが椅子からがたと落ちて倒れるのがストライクの目の端に写った。

「次の牌だよ、ストライク。でも薬の量を調整してあるから、一番面白い部分は君にも見られるだろう」

嫌な予感がした。

(3)

P・Pはベッドに乗せるなんてほど親切ではなかった。

何しろハロウもストライクも、生まれて14年のP・Pよりは一回りも大きかったのだ。ストライクは、自分のコンパートメントの中に、台のようなものからどずんと落とされた衝撃でうつすらと目を開けた。

ドアが閉じられ、がらがらと何かが廊下を横切っていく音が聞こえた。自分が床に投げ出されているのを上から見ていような気分になる。体が重すぎて動かないのだ。こんなのは俺の体じゃない。やがてもう一度がらがらと音が近づいてきたが、今回の音はさっきのよりもずっと重そうだった。ときどききゅっ、きゅっとキャスタの鳴る音が混ざる。隣のコンパートメントの扉が開けられ、どさっと何か重いものが打ち捨てられ、ドアがぴしりと閉ざされて、また人の気配は遠くなっていた。きっとP・Pがハロウをハロウの部屋に投げていったんだろう。

「……う……」

声も出なかった。どうなってるんだよ。接着剤で床に貼り付けられているみたいだ。チップはどうなっているんだろう。注射器が刺さっていた。殺されてなきやいいけど。

それにしてもこんなことをして何になるって言うんだろう。

倒れる直前に「次の牌だ」というDr・A・Aの声を聞いたような気がする。昨日の話の続きのつもりなんだろうか。

だとしたら

本気で指先に力を込めた。右の指が魔法を解かれたみたいにぴくりと動いた。深呼吸を一つ。手のひらとひじについて、じりじりと起き上がる。体が重すぎて潰れそうだ。重力の違うべつな星に来てしまったのかもしれない。

どうしても上体を持ち上げられなくて、結局這ってドアに近づき、ノブにぶら下がるみたいに手をかけたけど、案の定ドアには鍵がかかっていた。おまけに力ギ穴がない。

「・・・クソッ」

ずるずるとその場に転がってドアに背中をつけた。

「P・P・・・聞いているんだろ？開けるよ」

「聞いているよ」

ガラスの壁の向こうにふっとP・Pが現れた。映像だ。その顔は実に嬉しそうににやにやと笑っていた。

「お前Dr・A・Aだろ。何する気なんだよ。チップは平気なのか」「あの薄汚い獣人なら別なところにいるよ。獣人なんて何をやるかわからないからな。拘束服を着せている。まだ眠っているがね。さて、わしの推測が正しいければ、今夜あたり客が来るはずなんだ。君がよく知っている人物だよ。リアルタイムで見せてあげよう」

言うだけ言ってDr・A・Aは姿を消した。

「おい！開けるよ！P・P！開けてくれ！P・P！」

でももうDr・A・AもP・Pも来はしなかった。なんにしるチップはとりあえず生きているらしい。よかった。

「・・・ト・・・ライク」

ハロウのうめくような声が壁越しに聞こえた。

「ハロウ、大丈夫か」

「・・・全然体が動きません」

「何かやる気らしいな、Dr・A・Aは」

「こういう暴力的な・・・身体に訴えるようなことは、しない人たちだろうと思ってたんですけど。わからないものだね」

「・・・どうしてそう思ってた？」

「『そんなことは野蛮だ』って言いそうじゃないですか」  
「なるほどね」

「すぐに人に殴りかかるような野蛮人に、なぜ人間的な対応をしなければならぬのかね。自分の立場も理解できない人間に。話しても通じない人物に対話による理解を試みることは、純粋な時間の無駄なのだよ、ハロウ・ストーム。君のような文型の人間には突きつけられたくない事実かも知れないがね」

映像のP・Pがドアを通り抜けてつかつかと歩いて来て、ストライクを見下ろした。

「言葉など何の役にも立たない。知能程度の低いものは感情や本能に従って行動し易い。説得は無意味だ。どんなに噛み砕いて説明してやったとしても、扁桃体の反応そのままに受け入れ、あるいは拒否する。言語によってそれを覆すことは難しい。つまりストライク、君のような粗暴で教養のない人間を動かすには、どのような方法が最も効果的であるかという点、言語によらない直接的な刺激を与えるということだ」

Dr・A・Aはしゃがみこみ、壁に背中を預け床に手足を転がしているストライクを、不気味に笑ったまま透明すぎる栗色の目で覗き込んだ。

「犬のしつけと同じだよ、ストライク。言ってもわからないから叩くのだ」

ストライクはぺっとDr・A・Aの顔につばを吐きかけたが、つ

ばはDr・A・Aの体をすり抜けて向こうの床に落ちた。

(4)

やがてチップの体を台車に乗せた本物のP・Pが前を通っていた。

「いてっ……」

チップの声と扉の閉まる音、そして足早にP・Pと空になった台車を通り過ぎていった。次の瞬間、正面のP・Pの部屋のガラスが一面真っ白になった。8部屋ぶち抜きスクリーンだ。

「……なんだよこれは」

もう体はだいぶ動くようになっていたが、閉じ込められたままだった。廊下側のガラスの壁に張り付くようにして、向かいに現れたスクリーンを見ると、ふっと大きく引き伸ばされた写真が写った。

違う。写真じゃない。右下に小さく年月日が入り、時を刻み続けている。その日付は今日で、その時刻は今だった。

映像はこの研究所の唯一の出入り口である門を写していた。やがてゆっくりと門が開いた

「門が」

ハロウのつぶやくような声が聞こえた。

門が開いて暫くしてから、様子を伺うように一人の男が入ってきた。一瞬ストライクはもう一度床に吸い込まれるような奇妙なめまいを感じた。

どうしてなんだ。

ハロウはそのスクリーンに映っている人物を見て首をかしげた。門が開いて暫くしてから、様子を伺うように一人の男が入ってきた。でも入ってきた男はどうみても服の違うストライクだった。他に何



一つ違うところはなかった。髪の長さが少し違いかもしれない。でもそれ以上に同じすぎた。ストライクのコンパートメントからどんと大きな音が聞こえた。

チップが隣のコンパートメントから声を上げた。

「おい！おい！おい！ストライク！あれは誰だ？あんたはそこにいるのか？」

そしてハロウはあの箱を盗んだ日、あのリリーの家の路地裏でストライクの足を射た人物のことを思い出していた。

あの時は逆光で顔が見えなかった。でもあの体つき、しぐさあの一とだ。

画面の中の男は長い白い廊下をひたひたと歩き、どうやって撮っているのか、映像もその速さに合わせて追いかけていった。

「……どうするつもりなんだ」

「……さあ、ストライク、懐かしいかね？嬉しいだろう？」  
ストライクの部屋の中央にひゅつとP・PのDr・A・Aの映像が現れた。

「お前……一体何をするつもりなんだよ？呼び出したのか？」

「君たちがこの研究所に来て何日になるかね？君たちはこの研究所でどれくらいのデータを落としたと思う？君たちの映像はあらゆる方向から撮影され、君たちの声はあらゆる語彙がサンプルとして録音されている。だからこんなこともできる」

Dr・A・Aはふつと姿を消した。目の前に広がるスクリーンにDr・A・AがP・Pが映った。映像の男は廊下の途中で驚いたように足を止めた。

「ここにストライクという男がいるはずだ。合わせてくれないか」「ではついて来てください」

P・Pは研究所の奥にその外から来た男を導く。だがもう少しで検査室に辿り着くというところでP・Pは空気に溶けるように消えた。

「な・・・」

その次の瞬間、男の真後ろからストライクの声が響いた。

「おい、どこにいるんだ」

男は弾かれたように振り返った。振り返った先には、いつものフーダのマントを着てこちらに向かって歩いてくるストライクがいた。

「うそだ」

コンパートメントに閉じ込められているストライクは、本物のストライクは、割れてしまうんじゃないかというくらい力任せにガラスの壁を叩いた。でももちろん壁は割れてはくれなかった。男はその廊下に忽然と現れたストライクの方に一步一步近づいていく

「違うんだ！それは俺じゃないんだよ！」

いくら叩いても、叩いてもガラスは割れなかった。

「お願いだから・・・」

映像のなかでストライクが立ち止まり、辺りを見回すそぶりをする。男は険しい顔でストライクの腕を取ろうと手を伸ばした。

その時、検査室でさっきチップを撃った、あの体に不釣り合いな銃をもったP・Pが、その男の背中に発砲した。

「レイン！！」

両手をガラスに叩きつけてストライクは床に膝をついた。

映像の男は半身をひねってP・Pのほうを見たが、そのまま死んだように倒れた。

「おい、どこにいるんだ」

スクリーンの中で映像のストライクがもう一度同じことを言った。P・Pがそのストライクをひと睨みすると、そのストライクは煙のように消えてしまった。

「完了しました。ストレイン捕獲」

「ピピッよし、彼にはティタール溶液の中で過ごしてもらおう。処置を開始せよ」

「ピピッ了解しました」

そこでスクリーンはもとのただのガラスの壁に戻った。

「どうかね？楽しかったかね？いい牌だろう。この牌が倒れれば君も動かざるを得まい」

ストライクは片手と額をガラスの壁につけて、向かいの壁に反射しているDr・A・Aの顔を呆然と眺めた。

「それにしてもまさか双子とはね。興味深いものが手に入ったものだ。さあ、どうするかね？ストライク。ストレイン氏は低体温状態でティタン溶液に漬け放置する。そうするとどうなると思うかね？実はオリジナルの人間をティタン溶液につけ他の処理をせずに保存した場合、何日間生命活動を維持することが出来るのか、まだ実験したことがないのだよ。恐らく2週間はもつだろうと思うのだがね」

「……どうしろって言うんだ」

「君がどうしたいかだよ、ストライク。君のためにここまでやって来たストレイン氏を、見殺しにしたいのならそのまま我々に実験をさせてくれればいいし、もしストレイン氏を生かして出してほしいというのなら、君はそれなりの対価を我々に支払わなければならぬ。わかるかね？」

「人質にとるって言うのか」

「その通りだ。少しは賢くなったようだな。ハロウ・ストームと獣人を人質にしようかとも思ったのだがね、どうもそれほど強い結びつきではないらしい。仕方がないからより確実な駒を使うことにしたよ。ハロウと獣人が人質では、君を外に出したとたんに逃げられるだけだからね」

「……そんな……」

「不確定要素は少ないに限る」

Dr・A・Aは、口のはしが耳まで届くんじやないかと思うくらいの不気味な顔で終始笑っていた。

「君がいけないんだよストライク。最初に盗んでこいと言われた時に先を見越して頷いておくべきだったな。……まあそれでも逃亡

を防止するなんらかの手を打っただろうがね」

ストライクは放心したようにじっとガラスに反射する白衣の小さな体を見ていた。

「痛いだろう？君は自分の考えを改めざるを得ない」

白衣の体は粘着質な笑顔のまま言い捨ててふっと姿を消した。

## 月に映る（１）

（１）

ストライクが昨日の夜から口を利いてくれなくなったので、ハロウはやはり箱に取り掛かっていた。実際のところ、ハロウもストライクもコンパートメントに閉じ込められたままだったし、チップに至っては「寝袋に入れられたまま」だった。

「なーんで俺だけこんななんだよぉー」

チップがとても不満そうに声をあげた。もつともだ。

昼になると、P・Pがチップの部屋に入って行ってチップをワゴンに乗せ、どこかに連れて行った。ハロウとストライクには、いきなり部屋の真ん中に、天井からぼとつとケーキの箱みたいなものが落ちてきて、開けてみたらちゃんといつもものクッキーのようなものと、液体が入ってストローのついたプラスチックのコップが入っていた。食事を取るだけとってまた箱に触っていたら、チップが寝袋から出されワゴンに乗せられてがらがらと戻ってきた。チップは眠っているらしく、ぴくりとも動かず、P・Pは無表情でチップを部屋に放り込んで出て行った。

「うえっ。体が動かねえ。ヒゲがびりびりする」

暫くしてチップが目を覚ましたようで、ぶつぶつ言っている。

「なんか俺もでかい棺おけみたいなのに入れられたぜ。すっごいうるさいやつ。あーでも寝袋から出られた」

ハロウは少し目を上げて正面のP・Pの部屋を見た。ライトの消えているP・Pの部屋のガラスに、比較的鮮明にストライクの部屋は映り込んでいた。ストライクはベッドの上に横になっているように見える。そしてその姿はハロウの記憶が確かならば、昨日の夜から変わっていない。

何か声を掛けるべきなんだろうか。

聞きたいことはあるような気がした。昨日捕まったあの彼はあの夜ストライクを射た本当に本人なんだろうか。ストライクは彼をとってもあの夜怖がっていたと思う。たぶん本当に殺されると、彼は僕たちに危害を加えるはずだと、ストライクは思っていたんだろう。それでも昨日のストライクはとて……とても今P・Pに捕まっているはずの彼の兄弟のことを案じていた。とてもじゃないけど彼に殺されると思ってている人の様子ではなかった。

どうして？ということなんだろうな。

僕には踏み込めないことだけれど。

小さいころから一緒に過ごしてきた兄弟なら、たとえ自分を殺そうとして来たとしても、やはり死んでほしくないのかな。僕にはよくわからない。

ハロウは自分の兄のことについて少し思い出した。いつも頼もしい笑顔で、いつも僕を気に掛け、毎年僕にカードやプレゼントを贈ってくれる、ナニー以外の唯一の人。

でもどこかでやはり兄はハロウとは隔たった人だった。兄はいつもいつもいつも違う世界に住んでいた。精神的にも、肉体的にもたぶん兄と一緒にいた時間を全部足しても、一年分にはならないだろう。だからあんな風に、もし僕が兄の目の前で捕まったとして兄は昨日のストライクのように取り乱したりするだろうか？

するのかも知れない。兄はとても優しい、明るい、「まともな」人だから。あらゆる手を使って僕を助け出してくれるだろう。「正しい」人だから。でもそれは少しストライクと彼の兄弟の気持ちとは違うような気がした。恐らく兄は、目の前で捕まったのが赤の他人であったとしても、同じことをするだろう。それが正しいことなら。

そして僕はするのだろうか？叫んで手を伸ばし、このガラスの壁を割ろうと？

「がんばったのね。次のヒントです。私の名前を呼んで」

一瞬ハロウにはその意味がわからなかった。

さっきまでの思考の余韻がまだあたりに散らばっていて、まるで目覚まし時計にだしぬけに起こされたみたいだった。反応したのはむしろチップの方だったくらいだ。

「おいハロウ！今箱がなんか言ってただろ！」

「……何か言いましたね。『私の名前を呼んで』……？」

「呼べ！早く呼ぶんだ！」

チップは壁の向こうで飛び跳ねているらしく、たんと軽い音と振動が伝わってきた。ハロウは深呼吸をしてからそつとスイッチに指を置き、押し込んだ。

「パスワードをどうぞ」

「リリイ」

(2)

間もなく冷たい女性の声が響いた。

「パスワードエラー」

「なんで？」

チップがいかに不満そうに壁の向こうで言った。もう一度。

「パスワードをどうぞ」

「リリイ・エウリデイク」

けどやはり同じ声が聞こえた。「パスワードエラー」

「……実は真ん中にもう一個名前が入ってるんじゃないのか」

ストライクは半日ぶりにハロウに声を掛けた。なんのかんで半

月もストライクだってあの箱に付き合っているのだ。中身のことは多少気になった。もう宝箱だとは思っていないけど。でもハロウはリリーのミドルネームがあるかどうかさえ知らないようだった。

「わからないですね・・・」

「誰かに聞けねえの？」

ハロウには非常に気が進まなそうに、それでも他に方法がないので、P・Pをとりあえずコンパートメントの中から呼んだ。P・Pは検査室の方からすたすたと歩いてやって来た。ガラスの壁はほんの少し廊下に張り出していたので、ストライクの部屋からは、うまく体を寄せれば、P・Pとガラス越しのハロウの青白い顔を二つとも見ることが出来た。

「どうしました」

「あの・・・電話を掛けていただいてもよろしいでしょうか」

「どなたに」

「ユージン・エウリデイクに」

P・Pは暫く自分の左目のモノクルとにらめっこして、3回まばたきを音がしそなくなるくらい正確にやってから口を開いた。

「その名前は番号の登録がありません」

「ああ、そうか・・・では・・・ウォラ・デモンを」

今度はすぐにP・Pは顔を上げてガラスの壁越しにハロウを見た。女の声が研究所中に響き渡った。

「はい。こちらウィークリー・グリップス」

「接続が完了しました。どうぞ」

心の準備というものはP・Pには存在しないようだ。ハロウは、いきなり電話が繋がってしまったらしいことに軽く動揺した様子だったが、すぐに（見た感じだけは）落ち着いて話し出した。

「こんにちは、ウォラ。久しぶりだね」

「・・・ハロウ？」



「そうです。えー・・・と」

「久しぶり久しぶりってあなた毎回言うけど全然久しぶりじゃないわよ。あなたまだあそこにいるわけ？一体なんの用なのよ」

「聞きたいことがあります」

「何よ？また妙なこと聞くんじゃないでしょうね。ねえ、あなたからの電話に応えるのも結構苦痛なのよ、わかる？」

ウオラの声は、横から聞いていてもイライラしてくるくらい棘があった。でもハロウは例によってへこたれずに話を続けた。

「あの、ね、リリイのことなんだけど」

「何？今さら電話口で土下座でもしてくれるの？ねえ？」

「いや。リリイのフルネームを教えてほしいんだ」

「あなたね」

女の声は氷のように冷たかった。

電話口から（つまり研究所のそこかしこから）何かよく冷えた、空気の塊が流れ込んで来そうだった。でもハロウはまゆ一つ動かさなかった。

「そんなことも知らなかったの？失礼にもほどがあるんじゃないの？よくもそんなことを今さら聞けたわね？ねえ？あなた最低よ。二度と掛けてこないで」

「がごとんと音がしてP・Pが顔をしかめ、

「回線が切断されました」と言った。

「質問の解決が望めなかったようですが、もう一度接続し直しますか？」

「絶対に掛けなおさないで下さい」

P・Pは不思議そうな顔をして戻っていった。

「すごい」

ストライクは思わず呻いた。

「ひどい」

チップが言った。

「なんでハロウはあんな扱いなんだ？」

チップが屈託なく尋ねたので、ハロウはちょっと黙ってから答えた。

「ウオラは・・・もともと僕の取材に来る記者の一人だったんですけどね、僕にリリーを紹介した張本人です。でも僕は彼女の期待に応えられませんでしたから・・・仕方ないですよ」

よくわかんねえ、とチップの声がした。

「・・・・たぶんミドルネームとかはないと思うんだけどな・・・。どうして開かないんだろう」

さっきの箱の言い方だと、これで最後のヒントみたいだ。でも開かない。

「リリーって言うのは誰があげた名前なんだろう？」

ストライクが思いついたように言った。

「それは、ご両親が何らかの血縁者の方じゃないでしょうか」

「一番目のヒントがさ、『あなたがわたしにくれたもの』だろう。

次のヒントが『わたしの名前を呼んで』。つまりさ」

「つまり」

「ハロウ、お前彼女をなんて呼んでた？あだ名か何かつけてやったんじゃない？普通に考えると」

「あだ名」

ハロウはガラスの向こうに目をやって、ずいぶん長い間空中を眺めていた。P・Pでも浮かんでるのかと思うくらいだったけど、もちろん誰もいなかった。

「心当たりがないですね」

「じゃあお前が箱のあて先じゃないんじゃないかね」

チップがころつと言った。そうかも知れない。ハロウは思いのほかがっかりしたようで、ずるずるとガラスの壁に背をつけた。あま

りに明らかに落胆しているので、ストライクは少しハロウが気の毒になった。

「まあ、思い出してみろや。名前だろ。リリイちゃんの名前。俺はストライク、チップはチップ、P・Pはフィリップ・プロトタイプ・  
・何号だっけ」

「はは。Dr・A・Aはなんだっけ？ここの二人は本名がわかんねえな」

「あ」

ストライクとチップがハロウに耳を澄ました。

「なんか思い出したのか？」

「本名・・・の話をして・・・あの時僕は・・・」

「思い出せ！」

「思い出すんだ！」

ストライクはついこの間もこんな会話をしたのを思い出した。

(3)

あの日僕はリリイにピンク色をしたゆりの花を持っていった。

ハロウは冷たいガラスの壁に額と両手を付けて自分の脳みその中を歩き始めた。脳みその中には、たくさんの回廊とたくさんのドアがあって、どれも少しずつ似ていてどれも少しずつ違っていたので、その扉にたどり着くのにかなりの寄り道をしなければならなかった。それはたしか5月のことだったはずだ。そう。とても暖かい日で……でも窓を閉めた。風がとても強かったから

「窓を開けていたいお天気なのにな」

リリイは口を尖らせてそう言った。

彼女の母親が窓を閉めて部屋を出て行った後、ハロウとリリイはさんさんと初夏の日差しが降り注ぐ中庭を眺めていた。天使のランブが気持ちよさそうに、強い風の中を口にラッパを当てたまま飛んでいた。風はびょうと鳴って窓を揺らし、暴力的なほどに青々と葉を茂らせた木や草を激しく波打たせていたが、その太陽の光の中でそれは不安を感じさせるものではなかった。ベッドの横に飾られたゆりの花の一輪を、リリイは病的に細く白い腕でそつと取った。

「ねえ、ハロウ、あなたの本当の名前はなんていうの？」

「本当の名前？」

「ハロウって本当の名前じゃないのでしょうか？お姉ちゃんもお仕事で別な名前を使っているでしょう。それと同じなんでしょう？」

「そうだよ。ペンネームだね」

そのときハロウはすでに自分の本当の名前を全く使わなくなっていたので、彼女がどういったことを聞きたかったのか一瞬わからなかった。

本当の名前。

「私はリリイでしょう。生まれたときからそう呼ばれてるわ。ねえ、ハロウは？」

「僕も生まれたときからハロウと呼ばれていたよ」

「でもそれはほんとの名前じゃないでしょ？私知ってるわ。ハロウのパパの苗字はオルフェリウスだもの。ハロウだけ苗字が『ストーム』なんてないわ」

そこでやっとハロウはリリイがハロウの、市民として登録されているような名前のほうを聞きたいのだとわかった。

「ハロルド。だよ。僕の本名はハロルド・オルフェウス・オルフェリウスだ」

リリイは大きくてとても上品な茶色の瞳をぱちくりさせて、もう一度ハロウにその名前を繰り返させた。そしておかしそうにくすく

すと笑った。

「長いわ。覚えていられない」

「うん。僕もそう思う。実際にさっきまで忘れていた」

「魔法の呪文みたいね」

リリイはすつと窓に手を伸ばして開け放った。ハロウは慌ててリリイの体と窓に手をやって、風に煽られるのを防いだ。リリイはただくすくすと笑っていた。

日差しのおいをいっぱいに含んだ風が吹き渡り、リリイの甘いにおいのする、背中の中くらいまである長い髪の毛が舞い上がった。

「いいなあ！私の名前は短すぎると思わない？ねえハロウ、私に名前を付けてよ。忘れてしまいうくらい長くて、素敵な名前をつけて。私の本当の名前をつけて」

それで………

僕は腕を組んで暫く外を見ながらそれについて考えたはずだ。彼女の名前はリリイだから

だから

ハロウは一つ大きく深呼吸をした。そつと箱を探り、スイッチをそつと押した。

「パスワードをどうぞ」

「リリアノーラ」

「パスワードを確認。ブロックを解除します」

## 月に映る（2）

### （1）

箱はまるでほぐれるようにはらりと開き、中から光があふれだした。まぶしさに目を閉じ、また開けると、そこにはちょうど親指くらの大きさのリリイがにっこりと微笑んでいた。ハロウは何度もまばたきをしてその光景を見つめた。

『ハロウ』

ゆっくりリリイが呼びかけた。その高い声はか細かったが、それでもストライクとチップとそのほかの白い部屋があるこの一続きの廊下にいれば、必ず聞こえるだろうというくらいしんとして、厳かだった。

『ハロウ、こんにちは。お久しぶりね。お誕生日おめでとう。本当は自分であなたに渡したかったのだけど、わたし、具合が悪いのでママに頼もうと思っています。ちゃんとあなたに渡してもらえてるのかしら？』

「リリイ」

『ねえハロウ、私本当にあなたとお誕生日をお祝いしたかったのよ。でもいけませんって、ママにもパパにもお姉ちゃんにもお医者さんにも言われたの。元気になったらねって。でもね、私たぶんもう少しで神様のところに行く気がするのね。私、もう元気にはならないと思うの。あなたにももう会えないと思うのよ。だからどうしても、そこに行ってしまう前にあなたに言いたかったの。私あなたに会えて本当に嬉しかったし、あなたからもらったものの、何一つ忘れない

わ。神様のところに持つていくわ。あなたの詩集もね。あなたは自分の詩集のことが好きじゃなかったみたいだけど、私はあなたの詩がとても好きよ』

小さなリリイはハロウの手のひらに乗ったまま、少し首をかしげてはにかむようにうつむいた。髪の毛がさらりと流れて骨ばった首筋をちらりと見せ、そのまま白い寝巻きに包まれた薄い胸の上に落ちかかった。白い額には青く血管が浮いて、目の周りに茶色にくまができているのがわかった。

『もつとたくさん言いたかったのだけど、忘れちゃったわ。お誕生日おめでとう、ハロウ。お見舞いにいつも来てくれてありがとう。あなたのことが大好きよ』

そして箱はいきなり光を放つのをやめ、今までホログラムでそこにリリイの残像を写していたレンズを、天井からの白い光に晒しながら沈黙した。

(2)

ハロウは今どんな気持ちなんだろうな。

ストライクはベッドに体を横たえたまま、隣のコンパートメントを壁越しに見た。あの箱が開いてから、隣の部屋からは何一つ物音が聞こえない。箱の声と一緒にハロウまで消えてしまったみたいだ。とりあえず箱がハロウ宛のものだったことで、ストライクは少し安心していた。

よかった。のかな

渡るべき物を渡るべき人へ。

そしてP・Pがやって来た。

「ストライクさん、どうしますか」

「行く」

ストライクはむっくり体を起こして、久しぶりにその小さな白い部屋を出た。体がなまっているのが、ドアまでのそんな数歩でもよくわかった。

だりい。

「今何時？」

「午後11時13分です」

「何時間で着く」

「2時間17分での到着が想定されていますが、トラブルがあった場合はその限りではありません」

「……トラブルって起こりそうなのか？」

「現在までのデータでは100%トラブルは発生しておりませんが、しかし確率を考慮しますと、路上で何らかの危機に直面する可能性は、いかなる場合も必ず存在します」

ストライクは例によってP・Pの口をなんとかして閉じさせてやりたくなったが、黙っていた。

小型の船みたいな、ハロウとストライクとチップをイグナシオの教会から運んできた乗り物に乗りながら、ストライクはぼんやりと外を眺めた。久しぶりに外の世界を見たと思った。

けど外はやっぱり雪で、この無人の立ち入り禁止区域を、夜の闇の中にいくらすかしてみても何一つ見えなかった。空気だけが冷たく、雪のおいがしていた。

「何も用意していないようですが大丈夫ですか」

「うん」

あとは無言だった。



密閉されているはずの船内だが、ストライクには、外の凍るように冷えた風が、どこからか吹き込んでいるように思えた。耳を澄ませばその風の音や、船の進む音や、人の声さえ聞こえてきそうな気がした。でもそんなのはぜんぶ気のせいにはすぎないとよくわかつてはいた。丸い窓にぴたりと手のひらを押し付けると、窓はさつと白く曇り、少しだけ汗ばんだ手を取り残した。切り取ったようにぽっかりと開いた手のひらの形の闇の中に、見慣れた顔が映りこんでいた。黒い髪は外の景色に埋もれ、黄色人種特有の奇妙な強さを持った肌が、不思議なくらいに生気を失って浮かんではいる。ストライクは確かめるように何度か瞬きを試みた。その世界で一番見慣れた顔はそれに倣って瞬きを返した。

自分の傍らにはいつもこの顔があった。鏡なんか見る必要がないくらいに。こんな雪の季節も二人だった。風邪を引くのもいっしょ。治るのもいっしょ。気がついたら二人きりだった。寒かったよな。

最初の記憶は路地裏。季節は覚えていない。誰か女の人が手を伸ばしてきたので、レインがその手を取った。広い車に乗せられたような気がする。すごく大きな灰色の建物の中に連れて行かれて、女の人とはそこで分かれた。あの人は誰だったんだろう。行った先には、顔だけ出た灰色の服を着たおばさんたちがたくさんいるところだった。今思うとあれは何かの宗教の尼さんたちだったんだろう。よく覚えていないけど、すごくひどい目に会って、夏の夜に二人で窓から逃げた。

気がついたらサーカスの子になって、レインは弓を始めてめきめき上達してステージに立つようになった。

俺は何もできなかったから、ほかにもたくさんいた子達と泥棒になった。

見つかると財布の持ち主と警官から殴られる。サーカスに戻って親方からも殴られる。

「お前なんかレインがいなきゃぶつ殺してやるのに」って何回言われたんだろうな。いつもレインが俺を庇った。

だんだんうまくなって、鍵開けが誰よりも得意になって、へまをしなくなったところに今度はサーカスが駄目になった。あの時は二人で話をしたっけな。どうする？って。どっかに連れてかれるらしいぞって。レインはすごく落ち込んだ。だって…

「だって俺は普通のことは何にもできないよ」

「俺だってできない」

「どうせちつこいころに入れられてたみたいなところに行かされるんだろ」

「よく覚えてないけどな」

「俺は覚えてるよ」

「どんなとこだっけ？」

レインは言いたくない、と言って顔を背けた。お前は忘れたって言うのか？

「本当に覚えてないんだよ。飯食わせてもらえなかったのと……鞭で叩かれたな」

「ふん」

「……まあとにかく…そんなに嫌ならまた逃げ出せばいいじゃん」

「だからそうしたところでさ…」

「いいよ。これまでもなんとか来たじゃねーか。大丈夫、大丈夫」

だいじょうぶ、だいじょうぶ。

ぜんぜん大丈夫じゃなかったけど。

(3)

遠くにぼんやりと光る建物が見えはじめても、まだストライクは6年前の記憶の中にいた。あの夜そのまま逃げ出したんだった。あ

の時は楽に逃げられた。いつも見張りをしていた大人たちはみんなどこかへ（たぶん警察へ）連れて行かれて、子供たちだけがテントの中で一塊になっていた。警官か一人テントがある敷地にいたけど、犬系獣人だったから、いくつもあるテントの穴をくぐる分には、あまり警戒しなくてもよかった。ウサギが猫ならうまくいかなかったかも知れない。

よく覚えているよ。

俺たちよりも三つ年上だった：なんて言っただけな……。ウォルト……だったかな。が俺たちよりももっと小さい子達をぎゅっと抱いて一緒に泣いていた。

俺たちは少し離れた所から、ひとつの毛布にくるまってそれを見ていた。俺たちはもうどこかに逃げるとか、そんな話を小さな声でしていたけど、ウォルト兄は世界が終わるみたいに声を殺して泣いていた。不思議だった。

俺たちは12でウォルト兄は15だったはずだ。

面倒見のいい人だった。茶色い髪とそばかすの多い、ひよろつと縦に長い顔を覚えてる。心配させなくなかったから、いよいよ抜け出すつとときに、ウォルト兄の肩を叩いて声を掛けていったんだ。とてもやさしくしてもらったから。俺たちのお兄ちゃんみたいだったから。

「ウォルト兄、俺たち抜け出すよ。もう施設とか嫌なんだ」

ウォルト兄は、声を押し殺してひとしきり泣いた。あんまり泣くから見張りの警官が回ってくるんじゃないかと思ったのを覚えている。そして涙で濡れた手を伸ばして、俺とレインの頬に交互に触れ、涙をもう一度ぬぐって真正面から俺たち二人の顔をじいつと見た。

それから「さよなら」と言った。

テントのほころびを潜り抜けるとき、ちよつとだけ振り返ると、ウォルト兄はまだ俺たちを唇をかみ締めて見ていた。

「ストライクさん、着きましたよ」

ふらふらと外に出ると、いきなり冷たい空気が顔にぶつかって来た。それでもなおストライクの思考は記憶の中に留まったままだった。

P・Pは訝しげに眉間にシワをよせてストライクを見上げ、Dr・A・Aが二言三言嫌味を言ったが、ストライクの耳には全く入って来なかった。

P・Pに促されて、ほとんど無意識に教会の正面の扉の鍵穴にちよつとした耳かきみたいな工具を突っ込みながら、まだ頭の中では当時の映像が、P・Pに見せてもらったシネマみたいに際限なく流れていた。

今になってみるとあの時のウォルト兄のことがわかる。たぶんウォルト兄は俺たちとはまた違ったことを考えて泣いていたのだ。だから俺とレインの頬に触れ、穴が開くほどに顔を見つめて俺たちを送りだしたのだ。

それは恐らくきつともう二度と会うことは無いということだ。ウォルト兄は、こんな風にいなくなってしまうんだということを思っ泣いていたんだ。

そんな当たり前のことを。

今俺はやつとわかってる。「さよなら。」

俺はウォルト兄がしたように、もっと真剣にもっときちんともっと正確にウォルト兄や他の人たちのことを覚えておかなくちゃならなかったんだ。

あの時自分たちのことしか考えなかったから、今俺はあんなに面倒を見てくれたウォルト兄の顔すらよく思い出せない。

もしも

「……くないですか」

「……え？」

「暗くはないですか。見えますか？」

「……あ」

ピン、と高く澄んだ音がして、硬く閉じていた大きな扉はふっと緩み静かに開いた。

「……注意力が散漫になっていますね。出直しますか？」

「いや。大丈夫」

足音を殺して一步中に入る。P・Pがぎこちなくそれに従い、どういうわけか壁にへばりつくようにして、そろそろと奥の、イグナシオやジョーが眠っている部屋へと続く扉へと向かって歩いていつてしまった。

「おい」

「あなたは柵を確保してください。私はまた別に確保しなくてははいけないのです」

P・Pはひそひそとそれだけ言い残すと、奥の部屋へと見るからに挙動不審に入り込んでいった。

さて。

ストライクはしばらくその真夜中の暗さに目が慣れるのを待って、真っ直ぐに祭壇の奥へと足を向けた。何層かの大掛かりなカーテンをたぐって潜り抜けると、そこには以前見たときと全く変わらない様子でとても無防備に、静かに、何でできているのかわからない箱が横たわっていた。一つ違っているのは、箱が安置されている部屋の突き当たりに、大きく五芒星と、それを囲むようにびっしりと書き込まれた見たことも無いような文字と数字が、部屋が明るく見えるほどに輝いていたことだった。

昼間に見たときにはわからなかったらしい。

ストライクはほんの少しの間それを眺め、かじかみそうな指を何度かこすり合わせた後、そっとその緑の光に照らされて白く見える

箱を手を取った。

(4)

箱は見た目よりもずっと軽かったが、ストライクにはそれを実感している余裕がなかった。箱をほんの少し持ち上げたその瞬間、いきなり耳をつんざくようなブザーのびいびいという不快な音が教会中に、あるいはこの近辺の崩壊した都市の中に鳴り響いて、それどころではなかったのだ。

ストライクが反射的に柩を抱えたまま祭壇から飛び降りると、またそこには思いもかけない状況が広がっていた。

さっきまで真っ暗で、しかも明かりだってランプや蠟燭で灯していたはずの礼拝堂に、いきなり天井から、数々の天使や聖者の彫刻の隙間から、ライトの光が真昼のように明るく一斉に降り注いでいたのだ。

「な」

大きな正面の扉に、天使たちの視線とまばゆいばかりの光線をつばいに浴びながらたどり着くと、扉もまたびつちりと堅く閉じられ、鍵穴すら何かが中に詰まって何者も受け付けなくなっていた。

なんだこれは？

「ピピッ システム22976 解除」

「ピピッ 扉が開きました」

その時背中からP・P（だかDr・A・Aだかどっちかの）声が聞こえ、教会の居住区に続くドアがぱたんと開いた。

「ストライクさん、その扉も解除します。柩を手放さないように」

P・Pは息を切らせて何か小型のテントのような、ここに来たときには持っていなかったものをぶら下げていた。

「牧師に発見されました。この扉を解除するまで………予想される秒数を、Dr・A・A」

「あなたがたは一体……」

扉の奥からイグナシオの声が聞こえて、P・Pは背中であつて自分が通り抜けた扉を閉めた。

「ピピッ想定では304秒」

「ピピッ了解しました。ストライクさん、この扉を抑えてください。その正面の扉はあなたには開けられません。Dr・A・Aが処理に当たります。処理が完了するまで、あなたは何らかの妨害が入らないように状況を保全してください」

「開けてください！ストライクさん？そこにいらっしゃるのですか？お願いです、開けてください！」

「P・P、お前……」

「ストライクさん、ご協力下さい」

ストライクは四角い箱を無意識に力いっぱい抱きかかえながら、言われるままに扉を背中であつて押さえた。

P・Pは当然のようにずっとストライクを置き去りにして、背筋を伸ばして大きな扉に近づいていった。

その時ストライクはやつとP・Pに、いつもの左目のモノクルがなく、その代わりに銀色の二本のメートルほどの長さのコードがこめかみに開いている穴からぶら下がっているのに気がついた。P・Pは扉に着くなり跪いて、その銀色のコードを鍵穴に詰め込んで指であつて押さえた。ストライクは、背中で自分が支えている扉がどんと叩かれているのを感じながら、ぼんやりとそれを眺めていた。

「ピピッ接続成功。シリアル確認。4500661NY。コードを解読にかかろ」

「ストライクさん？そこにいらっしゃるんですか」

どうしてこんなことになつてゐるんだらう？

まばゆいほどに照らし出された真夜中の礼拝堂の中で、俺は何も悪くない人の邪魔をしている。

「……イグナシオ」

「ストライクさん！？お願いです、開けてください……どうしてです

か……これは……どうしてしまったのですか……聖なる柩を動かしたのですか？

『聖なる柩を揺り動かす時、聖なる鐘が知らせ、鋼の天使が罪びとを掴み

神の目が罪びとを見据え、神の手が罪びとを焼くだろう』と言われています……。お願いです、元に戻してください……」

「……」

「神の手と来たか。ふん、ただのレーザー銃じゃないか。随分と安っぽい神の手もあったものだな」

「その人は……誰なんですか……ストライクさん、どうして……？あなたは……わかつてくださったのではなかったのですか！」

彫刻の天使たちの顔は、ライトの光がまぶしすぎて見えなかった。でもストライクの体中を何かがちくちくと刺していた。

「ごめん」

「……ストライク……さん……」

もうイグナシオは扉を叩いたりしなかった。ただストライクにはその扉のあちら側に、イグナシオが手のひらを当てて語りかけているのがよくわかった。

「……ストライクさん、あなたのような人はたくさんいるのですよ。

一度、あるいは何度も罪を犯してしまって、そして二度とはしないと誓って……それでもまた罪を重ねてしまう。あなただけではありません」

「……」

「今勇気を出して、繰り返し返さないで下さい。今まで多くのそういう人たちは私は見てきたのです。何人も何人も……また罪を重ね、二度と私のところに尋ねては来ません。あなたはそうしないでください……私を……裏切ったりしないで下さい……あなたはなぜあの時、自分が犯した罪のことを語ったのですか。それはあなたが本当はそんな罪を犯したくなかったからではないのですか」

「……ごめん、本当にごめん……」



「どうか…ストライクさん！」

「システム停止。60秒後に復帰する」

「ピピッストライクさん、60秒以内に脱出します。早くこちらへ」  
ストライクは弾かれたようにドアから背中を剥がして礼拝堂の扉に一直線に走り、冷たい雪の世界へ滑り込みながら後ろをわずかに振り返った。

ほんの一瞬、閉じつつある大きな扉の隙間から、リンネルのローブを着て直立しているイグナシオが見えた。

彫刻のような非現実的な美しい無表情で、ストライクを凍りつけたように見ていた。

「…ごめん！」

「早く」

扉がぴたりと閉じるのとほとんど同時に、二人とも船に乗り込んだ。P・Pはアルフなみに急発進して教会を後にした。

(5)

船はどんどん教会から遠ざかっていった。

だって、イグナシオ、仕方が無かったんだ

俺だって何も盗むつもりなんかなかったんだ。ほんとうにあの日から、自分に言い訳しながら、天使の彫刻や、目の前の視線に後ろめたい思いをしながら生きていくのはもうやめようって思ったんだ。こんなこと好き好んでやったんじゃないんだ。

イグナシオに前に捕まったときもそう言っただ。

こんなことしなくても生きていけたんなら。

どうしてよりもよってイグナシオをまた傷つけないといけなかったんだろう。

「ピピツストライク君。その柩を渡してくれ。君にはなんの価値もないものだ」

ストライクはそう言われてやっと、自分がまだ固く四角い冷たいそののっぺりとした箱を大事に抱えていることに気がついた。反射的に手を開くと、『聖なる柩』は船のリノリウムの床に落ち、ごつんと鈍い音を立てた。

「おい！乱暴に扱うんじゃない。拾ってここまで持ってくるんだ」嫌だった。もうそれに触りたくなかった。

ストライクが真つ青な顔でゆるゆると首を横に振ると、例の機械音がしてP・Pがそれを拾い上げ、Dr・A・Aが指示した運転席の横のごつい入れ物の中にしまいこんだ。

「ピピツどうしたんだ、大泥棒のストライク君。ずいぶん顔色がよくないが後悔でもしてると言うのか？君はこんなことの専門家じゃないか。胸を張るべきではないのかね？実際わしは君のそのプロフィールに大いに助けられた。あの教会はその柩の保管場所であるためか、あの古さにしては驚くほど保存状態がよく、施錠も行き届いていてね、わしだけでは壁を破壊でもしなければ、それを盗み出すことはできなかったのだ。君は君の技能を誇りに思うがいい」

「……」

「不満なのかね？君の兄弟の殺人犯も生かして返すし、君も自由の身になる。自分の技術を生かす場も持つことができた。わしもP・Pもそれを評価するよ。一体何が不満だというのかね」

「……」

「報酬に不満があるのなら相談に乗ろう。ただあまり高望みすると、君の双子の殺し屋もどうした加減か死んでしまうかもしれないがね」

「…そんな話したくないんだ。イグナシオは知り合いなんだぜ。それを…目の前で盗んだりして…」

Dr・A・Aがあの不気味にゆがんだ顔でははたと笑った。

「君のこれまでの犯罪歴を見ると、君がそういった感傷を抱くとは考えがたいのだが、わしの理解する範囲で個人的な意見を述べてみよう。先ほど不法に自宅に侵入され、管理下にある物品を持ち出された気の毒な牧師は君の友人かもしれない。でもだからどうだというのかね。君がこれまで盗んできた数々の品々に持ち主がいなかったと思うのかね？どんな品物一つをとってもやはり同じように持ち主がいて、他人に奪われたいとは思っていなかったはずだ。例外はあるだろうがね。君が先ほど犯した窃盗と、これまで君が犯してきた犯罪は何一つ変わりはないのだよ。『知り合いだから心が痛む』などというのは無に等しい。偽善に過ぎない。ほんとうの偽善だ。わかるかね？知り合いから盗むことに胸を痛めるくらいなら、最初から誰からも盗むべきではないのだ」

「だって今回は…今回はあんたがやらせたんじゃないか！俺は盗もうとなんて思ってたんだ。あんたがレインを人質に取って、ハロウやチップを閉じ込めて、こうしなきゃいけないようにしたんじゃないか！」

Dr・A・Aは再びゆがんだ微笑みをストライクに向けた。

どうして中身が変わっただけであんなに気持ちの悪い顔ができるようになるんだろう？

「そう。そうすればいいじゃないか。ストライク君。そうやって自己弁護したまえ。それはとてもよい解決法だと思うよ。自分を正当化して現実問題から遁走することは、精神の安定を保つのにとてもいい方法だ。簡単だね。君の言うとおりだ。君が窃盗に手を貸したのは、わしが全部仕組んだからだよ。君が動かざるを得ないように。君は君の人殺しの兄弟と、友人と呼べるのかどうかもわからないような旅の仲間のためにものを盗んだのだよ。仕方なくね。君は

何一つ悪くない。君には何も罪はないよ。満足したかね。ではおとなしく到着を待つことだ」

Dr・A・Aはそこまで言うと、運転席から前に向き直って箱をいじり始めたので、ストライクは力なくぐったりと布張りのベンチに腰をかけた。

なぜ盗みが罪と言われるのかというと、何一つ自分がその身を削らずに、誰かから奪うだけ奪っているからです

Dr・A・Aは正しい。イグナシオと同じことを言っている、んだ。たぶん。でも、正しいのはわかるけど、でも、

「吐きそう」

「酔い止めがありますか。服用しますか。あくまで予防の段階で摂取しておくべきものですが」

「…いらない」

P・Pはいつもの調子で「あと81分で到着です」と言った。そしてこめかみから生えていた銀色の線を引き抜くと（少なくともストライクにはそう見えた）、白衣の胸のポケットからいつものモノクルを取り出して、線を引き抜いた穴にぐさりと突き刺した。P・Pの顔はその一連の動作に少しも動かなかった。

ストライクは思わずそれに見入ってしまったって声を掛けた。

「痛くないの？」

「配線用のバイパスに繋がる合金のソケット部分に接続しているだけですので、接続の際に異物を感じることはありませんが特に痛みはありません」

「それ付け替えできるんだな」

「必要に応じて」

「ほかにどんなものがつけられる？」

「端子が合うものなら何でも」

「街灯とか？」

「車もですね。繋がるだけですけど」

「繋がってどうする？」

「電源を入れたり消したりでしょうか。車ならエンジンを掛けられるかもしれませんね。繋がった端子によっては」

「便利？」

「使用法によります。たとえば電子ロックでないと私には開錠できません。あなたにはできますが」

ストライクが黙り込むと、P・Pは運転席から少しだけ振り向いた。

「あなたの技術を高く評価します」

「ありがとう。でも俺は取り返し of つかないことをしてしまったような気がずつとしてる。Dr・A・Aは偽善だと言うけど……」

「私にはそういった概念がよくわかりません。Dr・A・A本人がハロウ・ストームさんに意見を求めることをお勧めします。私は今夜法律に反する行為をいくつか犯しました。しかし私たちはこのくらの犯罪行為を追及させないことが可能です。ですから私たちは実質的には無罪です。わかりですか」

「……罪がなかったことになるっていうこと？」

「そうですね。一般的に法律というものは他者の心身や名誉、財産を守るために作られたもので、それらを侵害したからといって自動的に適用されるものではありません。しかるべき手続きが必要です。つまり、その手続きが取られない限り、どんな犯罪行為を何度犯しても、法的には無罪なのです」

「なあP・P」

「なんででしょうか」

「それはうそだろう？」

「事実です」

「じゃあP・Pは何も悪くないのか？俺も何も悪くないのか？」

「そうです。法的には無罪です。イグナシオさんがこの警察あるいは弁護士に掛け合ったとしても、どこかで必ず我々の犯罪行為は立件を見送られることになっています」

「じゃあ今夜のことは罪ではないのか？家をこじ開けて？箱を盗み出して？」

「無罪です」

「イグナシオを裏切って？お願いだから裏切らないでくれと言った人との約束を破って？それでも罪ではないのか？」

「それはもともと違法な行為ではありません」

じゃあどうしてさ、どうしてどうして

「じゃあどうして約束を破った人たちはイグナシオに会えないんだ！」

「その発言は意味不明です。脈絡がありません」  
そして船はゆっくりと研究所に収まった。

(6)

白い廊下がとても長かった。こんなに長かったつけ。足音もえらく響いた。もう夜明け近いはずだ。P・Pはあの柩を胸に抱き、右手で白いテントのちっこいやつみたいなのをぶら下げて、あごを上げてすたすたと歩いていく。

これでレインは助かるのか。

ストライクはP・Pのだいぶん後をのろのろと追いかけていた。レインは果たしてそれを喜ぶんだろうか？そもそも俺はレインを助

けるべきだったんだろうか？

また射掛けられたりして。

もう半年もレインと追いかけてっことをしていた。

どういうわけかどこに逃げてもちゃんとレインは追いかけてきたし、自分もレインが近くに来たことがわかった。不思議なものだ。あるいはそれはレインが近づいているという予兆ではなくて、ただの焦燥感だったのかもしれない。

でも事実として

そう。こんなところまでちゃんと追いかけてくる。

廊下は長く、静まり返っていた。レインはどの部屋に入れられていたんだろう。

レインは小さい頃から俺に比べて真面目だった。現実的だったと言ひ換えてもいいのかもしれない。だいじょうぶだいじょうぶって言う俺をいつもいたしなめた。サーカスにいた時だってそう。真面目で親方に従順で、おまけに芸もできたから、いつも俺はレインに言われた。

ストライクだって真面目にやればいいのに。泥棒なんかのほうがいいのかよ、親方だって殴るばかりじゃないよ。

できなかったんだよ、レイン。俺にはね。

必死で訓練してもものにならなかったんだよ。できないやつに優しくするような親方じゃなかったんだよ。簡単にできるよ、がんばればいいのにつて言うレインが嫌いだったよ。

どこでだってそうだった。真面目にやれよストライク。やってるよレイン。双子なのにどうしてこんなに違うんだろうってな。

泥棒やって拾われたところでも、レインはすぐに上の方に気に入られて俺とは別格。

どうしてなんだろうな。

大嫌いだっただよ、レイン。しかも俺のことを本気で殺しに来るし。お前はそんなことを平気のできるやつだったんだなあ。どうしてイグナシオを裏切ってまで、そんなお前を助けなきゃなんなかったんだろつ。

P・PはあたりまえのようにP・Pたちの貯蔵庫に入っていた。ストライクが後を追うと、久しぶりに入ったその部屋には、脳みそに記憶を送り続けられているかわいそうな小さなP・Pの棺おけの横に、白くてとても簡素な、申し訳程度にマットが敷かれているベッドが置かれていた。

そのベッドには誰かが布団も掛けられないままに裸で横たわっていた。そしてそれはまるでマネキンのように硬直して、白く、そしてそれは

「レイン？」

P・Pはきしきしと音を立てるキャスター付きのいすに腰掛けて、くるりとストライクに背中を向けた。ストライクはゆっくりとそのベッドに悪い予感とともに近づくと、そつとその横たわっている男を覗き込んだ。

レインだった。でも

「レイン？」

肩に手を当てて揺らすとその体は、まるでゴムでできた人形のようになぐらぐらと不安定に揺れた。奇妙な感触だった。その皮膚は、ストライクの手のひらの熱さを吸い取るみたいに奪っていった。血の気のない唇は乾き、皮膚がめくれ上がっていて、そして目は閉じられたままだった。恐る恐るストライクがその体の首筋に指を当てると、指はただその青白い皮膚に沈むばかりだった。何も触れない。

「……P・P、どうということだ？」

「それは機能を停止しています」

「死んでるっていうこと？」



「ありていいにええそういうことです。生体としての機能をすべて停止しています」

「どうしてだ？」

「実験のためです」

「生き返るのか？」

「その固体が生体としての機能を回復するのは不可能です。でもまた新しくクローン体を作れば」

ストライクはP・Pを椅子ごと蹴り飛ばした。

椅子はキャスターが途中で床に引っかかり、乗っていたP・Pはまともに壁に激突した。

「どうしてだ！！俺はちゃんとやっただろう？お前ら箱を手に入れたじゃないか！そしたら…そしたらレインは返してくれるはずだったじゃないか！」

「い……」

P・Pが鼻血を出しながらひじをついてよろよろと起き上がったところを、ストライクはもう一度突き倒した。

「ちょ……」

「どうしてレインが死んでるんだよ！おい！」

「やめてくださ……」

レインなんか

レインなんか大っ嫌いだったよ。憎くて憎くてしょうがなかったんだ。俺と同じ顔をして。俺と同じ声をして。ぜんぶ俺と同じくせにどうしてこんなにも違うんだ。

レインなんか

「どうして！」

P・Pの鼻血まみれの白い小さな顔をもう一発殴ろうとして、振り上げた腕を不意に誰かが掴んだ。

「もうやめな。ストライク」

レインなんかどこで死んでたって構わないよ。俺を普通に殺そうとするやつなんか

「もう、やめな。」

レインなんかこんな風にこんな風に死んじゃったって俺は

「レイン……が……」

「ストライク」

腕を下ろすと涙がこぼれてきた。何だって言うんだ。

「俺なら生きてるよ」

「は？」

振り返るとちゃんと服を着て弓を背中に差し、矢筒を足につけた  
レインが、少しだけ笑ってストライクを見ていた。

「レ」

「馬鹿だね相変わらず」

「れいん！」

レインに勢いに任せて抱きつくと、レインは小さな子供をあやす  
ようにぽんぽんとストライクの背中を叩いた。

ストライクは暫く声も出なかった。

「く……う……」

でもなんだか知らないけど涙は出た。

「……まったく……」

P・Pがとても無然と立ち上がって鼻血を止めにかかった。スト  
ライクに殴られて鼻血を出すのが二度目だったおかげで、今回は泣  
かなくても処置ができた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2016g/>

---

ハロウ・ストームの冒険 色鳥飛行

2010年11月28日06時15分発行